

---

# ラピスラズリの天蓋

朝昼夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラピスラズリの天蓋

### 【Nコード】

N8716L

### 【作者名】

朝昼夜

### 【あらすじ】

レシ王女は蜜を啜って馬鹿になった。それを嘆いた王は旅に出る。その後任として国を治めることになったトン大臣はエゴイストの豚王が旅立った十二年後、国は滅びる。レシ王女とトン大臣と、そして預言者ドール。

三人を中心にして、物語は進んでいく。

## 平等

一つの大陸があつて、そこに様々な国が点在しています。大陸の東は氷に包まれていて、大陸の西では砂漠ばかりが広がっています。大陸の北では人間には想像も付かない魑魅魍魎が潜んでいると噂され、大陸の南は森林に溢れているといえます。人間たちはそんな危険や未知ばかりの大陸の中で、ひっそりと生息して独特の文化を築き上げているのです。

ある小さな国。ここでは王女が一人、王子が一人。幸せな生活を日々送っていました。名はそれぞれカタカナで何文字か、それなりに美しかったり格好よかったりする名前が与えられていた。平和な国の中で、二人は平和に、優雅に、過ごしました。たくさんの仲間たちに囲まれながら、両親や女中に囲まれながら、日々を謳歌していた。

差別を行つてはいけない、人々は全て平等であれ、という概念を王が唱える国でした。全ての人が幸せであるように、不幸な人など一人も作らないようにと。王は立派な人でした。精力的に政治に取り組み、側近の誰よりも国民のことを考える男だったのです。女王も優しい人で、王のことをいつもサポートしてきました。王子と王女にもそういう思想は受け継がれ、とにかく、安泰。木造建築ばかりが建て並んでいるが、木は切った分だけ植え直しました。それも平等の思想があるからこそ、成せる技でした。

しかし、ある日。国は滅びてしまいます。瞬きをする間のことで

夕焼けの中、空に浮かび上がった八本の足。八本の足が、アツという間に国をめちやくちやし、安泰だった王子と王女の運命も、切り崩してしまったのです。二人は両親の亡骸を見、女中の首を見、鮮血を見、絶句したという。そんなお二人の幼い御身は絶望に打ちひしがれながら、結局、八本の足に八つ裂きにされ、血を流して、

死亡してしまつたのです。

救われない話です。報われぬ、話です。国が、八本の足に地面をえぐられ、命を奪い取られ、積み上げたレンガを崩されます。人々が嘆いてもわめいても、八本の足は命を一瞬にして奪い取ります。突き刺されれば悲鳴を上げる暇ありません。燃やされればいずれ消し炭になつてしまふ。毒をかけられれば肉体は腐り果てる。全てが不平等に、不平等が故に平等に。殺害され、世界での役割を終えました。

やがて夕焼けも沈み、夜になりました。

全てが灰色になつていました。高い所から見下ろすその国は煙を黙々と立てている。亡骸がガレキの下や道端に、地震で倒れたマネキンのようになって、転がっていて、それらの全てが鼻を隠したくなる腐臭を、発しています。

董色の鳥が何羽か、闇夜を飛翔していて、董トリと呼ばれるそれは臭うマネキンに嘴を突きたて、死肉を貪ります。董トリは死の象徴として人間たちに知られるので、忌み嫌われています。彼らは、人の肉が好物なのです。

阿鼻叫喚の光景でしょうか。丘の高い所から（その丘は黄色い花が何本か生えているだけ寒々しくもある場所）、国を見下しているのが一人。嘲笑をしながら彼は、叫び声を上げていました。

喜と悲が入り混じつていた一種独特の憂いを帯びたその咆哮は、董トリの耳まで響き渡るようでしたが、人肉を好む董トリたちはそいつに襲い掛かるうとはしません。むしろ、警戒の念を抱いている様子でありました。

やがて、咆哮が終わります。

残虐な表情をしています。そいつは男で、彼にはドールという名前があるのです。

あたりをギョロギョロと見回しています、出目金のような目つきをしている彼は、なんとも言えない程に近寄りがたいです。

誰もいないのに、誰かに話しかけています。あるいは滅びた国に  
対して話しかけているのかもしれませんが。

「貴様らが、悪かった。狂った涎が毒を持っていったんだからな」  
喋りながら笑いを堪えきれない様子で、最後には微笑んでみせま  
す。それは女神に近いほど美しくは無く、悪魔のように残酷な様相  
でもない。奇妙でした。

彼は国を見渡して、背を向けました。ドールは微笑んだまま、やが  
て、丘から姿を消しました。

生きている人間がすべて、消失しました。死んでいる人間すらも  
董トリに飲み込まれ、姿を消しました。

やがて、東から太陽がのぼりました。朝日に照らされる、滅びた  
国。

ひとつ残らず、それこそ平等に、灰色でした。

董トリが空から両眼で、それを見ていました。

その大臣は何かしらの精神病を患っているのだろう、と周囲の人  
間たちは疑っている。深刻な病を患っているんじゃないかと、疑っ  
ている。一つの大臣の行為を、護衛兵が目撃したことから、その疑  
いは国中に広まった。

国民たちの生活に、大きな問題は存在していないから、国は非常  
に退屈だった。だから大臣のその行為、しかもそれが奇怪な行為で  
あったから、暇な国民たちがそのスキャンダルに目と耳を向けるの  
も、言ってしまうえば当然のことである。語り屋と呼ばれている嗜好  
きのばあさんは、大臣の奇怪な行為に尾びれ背びれを付けまくって  
その状態の噂にさらに国民たちが装飾をくっ付けることによって、  
大臣の奇怪な行為はさらに奇怪ぶりを増し、大臣は国中から『変態  
大臣さま』と、慎まらず呼ばれるようになった。可哀想な話であるが、  
大臣が奇怪な行為をしたこともまた事実であったから、何とも、大  
臣も唇を紫色にして、潤いの足りない頬をぶるんぶるんさせて、お

となしく耐えるしかない。

さて、大臣は一体何をしていたのだろうか。

目撃者である護衛兵はここまで事態が大きくなることを想像していなかったので、もはやその話をするのは控えるようになっていた。護衛兵は特徴的な目をしている。出目金のように出っ張っているのだ。そんな彼は、口の中で何やらもごもごしてから、しかし、静かにその時の光景を話す。大臣の奇怪ぶりを話す。控えていると言っても、進んで話をしないとただで、聞かれれば喜んで話すのである。

「大臣の『あの様子』を目撃したのは今から一年前ほどになります。が、しかしあの時のことは今でもはつきり思い出せます。なにせ、特別暑い夜でした。季節は一番暑い時期を過ぎていたにも関わらず、その夜は一年の中でもっとも暑い一日だったかもしれません。国民の皆様もその日のことはいまだに覚えているのではないのでしょうか。あそこまでの熱帯夜はなかなか、体験しようと思っても、体験出来るものではありません。なにせ、呼吸をするのさえも苦しいほどでしたからね。それほどにひどい夜でしたから、その熱帯夜の次の日の朝は、みんなして真っ赤な目をしていましたね。誰も彼も彼女も、寝付けなかったのです。そんな風に特徴的な夜に、私は非番だったものですから城内のベッドで眠りに付こうともがいては熱と湿気に目を覚まさせられては舌打ちをする、ということを繰り返していました。やがて眠るのを諦めた私は城の庭園を散歩することにしたのです。そこに植えられているホメレラ花は熱気を吸い取ってくれますので、庭を歩くことで涼もうと思っただけです。私と同じことを思っただけに出会えるかもしれない、という期待もありましたね。お喋りをたくさんすれば頭がリフレッシュされますからね」

ここまで話してから、護衛兵は大きく息をついた。その息は寒空の埃と混じり合って、白く空に浮かび上がった。

その白く浮かび上がる吐息を見て、いや、そういうわけでは無いのだろうか？護衛兵は少し頬を緩ませた。いやらしい表情に変わっ

た彼は、物語るのを楽しんでいるのだろうか。彼は真顔に戻ってから、また話を続けた。

「庭園ではホメラ花が、熱気を吸い込んでいました。その紫の花びらを大きく広げては、庭園の気温を周辺と比べて、…そうですね、十度くらいは下げているかもしれませぬ。ホメラ花は無数と言え、るほどに庭園に埋まっていますから、それほどのすさまじい冷温効果を発揮するのです。私は火照っていた体をゆったり冷やしながら、月明かりの庭園を、そうですね、三十分くらいは歩きました。ホメラ花の冷音効果に付して発する柑橘系の匂いを嗅ぎながら、誰か顔見知りに出会えれば面白いのにも思っていたのですが、残念なこと、その三十分の間には誰にも出会いませんでした。まあ、今ではそのことに感謝もしているのですがね。だって、誰かに出会って立ち話でもしてしまつたら、『変態大臣さま』を臨むことは叶わなかつたわけですからね。まあ庭園は一時間歩いても回りきれない程に広い空間ですからね。誰かと鉢合つためには、あまりにも月明かりが頼りなかつたのです」

護衛兵は一息ついてからフツと笑つた。それはさも、話が核心に迫ることを喜んでいいる様子だつた。

「月明かりが頼りない分、私は耳に神経を傾けていました。誰かの話し声が聞こえてきやしないものかと、耳を澄ましながら歩いていました。特に、あの名物王女に出会えたら面白いことだ、なんて思っていました。耳を澄まして彼女の不自然な奇妙なキャツキャとした笑い声は聞こえてきませんでしたが、きつと、その代わりだつたのでしよう。そんなことを思っている時に、音は聞こえてきたのです」

「どのような音が？」

このとき初めて、インタビュアーは場を盛り上げるために、口を開いた。期待に応えるかのように、護衛兵は声を張り上げてみせる。「生々しくて、苦々しくて、汚らしくて、何か憎悪も含んでいるかのように荒々しい。それは、そうですね。つまり、肉を踏みつける

ような音でした！地団駄を踏むようにして、転がっている肉塊を片足上げて何度も何度も……怒りの限りをそれにぶつつける様子が瞼の裏に浮かび上がってくるような……私は慌てて辺りを見回し、腰に常に携帯しているサーベルに手を掛けました。腰を曲げることで体を屈め、悪意の聞こえる方角に目を凝らしました。月明かりを凝縮することで一点だけを眺めました。……そこに、ぼんやりと月明かりを反射させる……つまり、人の頭が見えたのです」

護衛兵は手を口元に当てた。笑ってしまうのを堪え切れないのか、くっ、くっと呻く。

そこにインタビュアー。

「大臣のあの頭が、月明かりに？」

「ぶー！」

インタビュアーの含んだような一言で、護衛兵は屁みたいな唾を撒き散らした。

護衛兵はしばらく栓が飛んだようにして笑い続けた。脳裏で、大臣の月明かりに照らされるハゲ頭がよぎって、その時のおかしさを思い出させるのだった。

「失礼しました」

やがて落ち着いた彼は、再び口を開くが。

「その、大臣の月明かりに照らされ……く、う、その大臣の月明かりに照らされ……う、くくく」

「大丈夫ですか？」

「失礼しました。大丈夫です」

一息つく。護衛兵は笑うと元々大きな瞳がさらに大きくなる。奇妙な笑い方をするのだった。

それから五分ほど護衛兵は噴出し続けてから、ようやく落ち着いていた。

ガチャリと、着込んでいる黒光りの甲冑を、軋ませる。

「インタビュアーさんすみません。ええと、どこまで話したのでしたっけ？」



「大臣の頭が…」

「あ、ストップ、ストップ。わかりました。では、話しますよ」

「お願いしますよ」

「もう大丈夫です。 さて、私は驚きました。大臣は基本的に

はいつもSP付きです。いかついボディガードが確実に三人以上はいます。国でもっとも屈強な男を常に自分の身边に置いて、暗殺されるのを防いでいる臆病者というのが、あの大臣の正体でしょう？ いやあ、失脚して欲しいものです。あの大臣の臆病が故の被害妄想で、今まで何人の同僚たちが殺されたことか。まあ、こんなことをいまさらいっても、殺された同僚たちが甦ることはありませんがね。そんなことは私だって、わかっていきますとも。そうです、わかっているのです。わかっているからこそ、こうして大臣のスキヤンダルを話しているのです。話が脱線してきましたね。少し熱が入ってしまいました。：少し、水をいただいても？」

護衛兵は木製の椅子から立ち上がり、狭い小屋の奥の方にある冷蔵庫を開けた。そこから茶色い瓶を取り出し、コップに液体を注ぐ。

それは何やら怪しげな、何かドロドロとした、黄土色の液体だった。

「インタビュアーさんもこれ、飲みます？」

護衛兵はやけに真剣な顔つきで、インタビュアーは戸惑ったが、すぐに首を横に振って、「いえ、結構です。取材させてもらっているわけですから、物をいただくわけにはいきません」と、しぶしぶといった顔をした。が、インタビュアーにそんな信念らしきものは元々無く、黄土色の液体を飲まないための嘘だった。

嘘に気が付いているのか、いないのか。護衛兵は残念そうに首を傾げてから、「これができた味で無いことは知っていますが、気が付くとコップにこれを注いでいる。なにせ、遺品なのです」と眉を潜めた。

『遺品』という響きに興味を持ったインタビュアーが「あなたの同僚の？」と期待を隠しながら問うと、護衛兵は「はい、そうです」と悲しそうな表情になった。そして、護衛兵も『遺品』に興味を持

って欲しかったのだらう、茶色の瓶を手にしたまま、インタビュアーの下に戻り、薄汚れた白のテーブルに瓶をどんと置いた。インタビュアーは仕事魂が燃え始めた。

「やはり、いただいてもよろしいですか？」

気が付くと口走っていた。

護衛兵は少し妙な微笑みを作ってから、「よろしいので？」と問うた。インタビュアーは「はい」と力強く頷き、透明のコップにドロドロ黄土液体を注いでもらう。インタビュアーは凝視した。右手で、黄土になったコップを持ち上げ、振るが、黄土はドロドロのせいでちつとも振動しない。普通液体ならばプリンのように振動するのに、もはや半液体、もしくは半固体のそれは、体に悪そうで、インタビュアーに一種の覚悟を強いるのだった。しかし、ぐっと勢いで、一口、唇をくっ付けて放り込む。

嫌あな、土の味。

陰気な土地の湿ったのをぎゅっと絞り下ろしてジュースにする。それを飲み込んだ感覚だった。一口は少量なのに、インタビュアーの頭は麻痺して、彼は眩量を感じざるを得ない。その次には吐き気が襲い掛かってきた。「トイレをお借りしても？」恐ろしい速度でインタビュアーは訪ねて、護衛兵も苦笑いしながら恐ろしい速度で頭を上下に何度も動かした。

トイレで嗚咽を繰り返してから部屋に戻ってくると、護衛兵が姿を消していた。

(どこにいったんだ?)

あちこちにガラクタの置かれているその宿舎を見回すが、どこに消えたのやら、黒光りの甲冑の護衛兵はガチャリと鳴らさない。

インタビュアーはため息をついてから、テーブルの脇にある出窓に、身を乗り出して手をかけた。赤茶の取手を握り、右にひねる。

空気をかすめるような軽音を鳴らして、出窓は、外の風を吸い込むようになった。

春の風が、吹いてくる。

これは何の匂いだろう、昔から何度も嗅いだことのあるいい匂い。インタビュアーは少し晴れやかな気持ちになった。春は、彼にとって好きな季節だった。空を見上げると、晴天。夏が近づいてきているのだろうか、近頃の空はどんどん青みを増してきている。いい空だ。狭い宿舎の出窓から、果てない空を眺める気分は、なかなか良い。

ふと、護衛兵が花粉症だったらどうしようと思ったり、もはや手遅れだろうが、出窓の取っ手を握り、入り込んでくる風を塞いだ。ふう、と言ってから室内を見回す。窓を閉めた後の宿舎。

やけに静まり返っている。

太陽の光に反射して、埃がたくさん空気中で遊んでいる。自然とインタビュアーの鼻はむず痒くなってくる。呼吸をなるべく抑えたく願うが、遊んでいる彼らはインタビュアーの鼻腔に容赦なく悪戯をしてくる。はつくしゅん、と彼が大きくクシャミをしてしまうと、してやったり、と言った風な埃たちは車輪のように回転して、悪戯にも飽きてしまったのか、古びた床に落っこちて、やがて静まり返る。まるで生き物のようだ、とインタビュアーは自分でよく判然としないことを思った。

その判然としない思いの正体が何者なのか、彼にはまったく見当がつかなかったし、その判然としなさを違和感だともしなかった。ただ自然と零れ落ちるため息と共に、彼はこげ茶の座椅子に腰を下ろすのだ。ミシと椅子が軋む。腰を下ろしてから再度ため息を吐いて、彼は何をしているのだろうか、と護衛兵のことをぼんやりと思った。仕事だと言うのに、俺はこんなところでぼんやりとしていいの、と頭の中で焦りが少し生じたが、本格的に焦ったりはしなかった。インタビュアーの脳裏に浮かび上がってきたその一種の不安は何か実感の無い焦燥でしかなくて、それは、彼が時折襲われる不思議な気分だった。この曖昧な不安。何か中途半端な気がして、あんまり良い気持ちじゃない。

茫然としているインタビュアー。

風もないのに、カーテンがふわっと揺れて。その刹那に、声。

「だいじょうぶでしたか」

ガチャリ、甲冑の鳴声と共に、護衛兵の声。インタビュアーが彼に振り返れば、目力のある顔。護衛兵は右手に一冊の本を携えていた。

「それは？」

訪ねると、護衛兵は不適な笑みを浮かべた。

インタビュアーの対面にギシと座り、本をテーブルの上に置く。

「預言者ドールという人物が書いた、預言書ですよ」

「預言書？」

急に話の焦点がずれてしまったと、インタビュアーは護衛兵のことを不審に見るが、しかし護衛兵はイキイキしている。

大きな目が、輝き出した。

「知らないのですか。知らないのならば、お話ししなければならぬ」「いや……」

インタビュアーは顔から苦つたらしさが現われるのを抑えられなかった。慌てて押さえ込んでから、護衛兵に不快な思いをさせたかな、と思つて見つめてみたが彼はまったく気にしていない様子だった。護衛兵はイキイキし過ぎで焦点がぶつ飛んでいる。腕を翼のように広げて、楽しそうに預言者ドールについての説明を始めた。インタビュアーのことは見ていないようだった。

「ドールは世界の危機について唄っていた人物です。予言していたのです、各地を方々に歩いて回り。しかし、残念なことに、その頃世界は平和でした。どこの国にいても、どこの地方にいても、みんなドールを煙ったがる。追放して、時には暴力を奮つて、不吉なことを言つ彼を虐げたのです。ドールはそのような扱いを受ける度に絶望したそうです。このままでは人間は滅びてしまう。私の予言をみんなが信じてくれさえすれば、世界は滅びないというのに。しかし彼にそれを証明する手段はありませんでした。預言者ドール

には世界の滅亡を予期する能力はありましたが、それ以外の能力は皆無だったのです。…ちょっととした未来を予測したりだとか、そういうことが出来れば他の人間を信用させることも出来たのでしょうか、残念なことに、彼はそういう能力を持っていなかった。」

インタビュアーはうんざりしながらも、他にどうすることも出来ないで人が変わってしまったような護衛兵の話を、聞いているフリをしながら聞き流すことにした。前日眠っていなかったから途中何度も意識が飛びそうになったが、しかしギリギリの境界線で踏みとどまっていた。

しかし話が約三十分も続いてくるとさすがにしんどくなった。

(疲れてきたな)

頭の中でつぶやく。しかし護衛兵は目を輝かせるばかりで、薄暗くならない。インタビュアーの目つきはどんどん落ち窪んでいるというか、しぼんできているのだけれども。護衛兵はインタビュアーのことを見ないから落ち窪みなど知ったことでもなかった。

(いい加減にしてくんないかな、この人)

脳裏で繰り返すことで気を発散させようと試みたが、余計にこの場を離れたい気持ちが増えるだけだった。『嫌だ』と一度想像するたびに不快なストレスになって全身に鉛をくっ付けていくかのようだった。途中何度も大臣の話に切り替えてもらおうと口を開きかけたが、キラキラと輝く護衛兵の大きな瞳はそれを遮るのであった。

護衛兵の話はドールがいかにして預言を人々に信じさせたか、という部分にまで発展していた。だが前後が不明なために話の内容はよく理解出来なかった。よくわからない人物だとかよくわからない地名だとか、色々と言っているが何一つピンとこない。

『ドールが護衛兵にとって重要な人物だ』、ということだけはよくわかった。そして彼はまだ生きているらしい。で、彼を慕う者の集いが世界中で広まっている最中らしい。…雲行きが怪しくなってきたものだ、とインタビュアーはどうにも落ち着かなくなってきた。身を左右によじらせた。

そんなところに、お誘いが来た。

「インタビュアーさんもこれを一冊、読んでみるといいですよ」

スツと、蘇芳のハードカバーに包まれた預言書が押し出される。色彩のせいか妙に雰囲気のあるそれがテーブルの上を滑り、インタビュアーの目前に置かれる。インタビュアーは何とも言えない状況に唾を飲み込み、どの様にすればこの場から切り抜けられるのかを想像する。もちろん、入信する気は無かった、のだが。

部屋はなにゆえか陰鬱だ。

宿舎を包み込むのは、春の陽気に口付けをして迫る陰気であろうか。不気味なだけの匂いを持ち合わせているそれは陽気などアツという間に吸収してしまうから、インタビュアーは息を呑んではカーテンが揺れるのを見つめる。先程から風もないのにヒダを次々に作っているカーテンは、預言者ドールの魔力に動かされているかのようにもふと思えてくる。

インタビュアーは寒気を感じて即座に蘇芳のハードカバーに触れたが、原因は表紙か自らの手か、妙にそれは冷え切っていたから手は退かざるを得なかった。押し返そうとした預言書は蘇芳のくせに金塊のような重さと冷たさ。

いや、金塊…。これは、金塊だ。

インタビュアーの錯乱が始まった。預言書が金塊に見え出したのである。右目を閉じてみたり、右目だけで見てみたりするがインタビュアーの目から見るそれはどう見ても金塊…。

彼の全身が萎れていく。植物がやがて枯れるように、彼の肉体も。宿舎は陰鬱をいっそう増す。もはや春の気配は消え失せた。季節の潤いだけでなく、インタビュアーの活気さえも奪い取っていく。護衛兵はもはや笑っていない。目の焦点が狂っていくインタビュアーを観察しながら、可笑しそくに唇を曲げる。彼の目が大きく開き、『してやった』という風に得意気だった。

「だいじょうぶですか」

護衛兵は訪ねるが、答えはわかっている。インタビュアーはこっ

くりこつくり頷いているが、やけに縮瞳している。

陽が少し傾いたころ。

インタビュアーは金塊を抱きかかえながら。木の床に崩れ落ちて、身動き一つしなくなった。

## 八つ足

一見、排気ガスと見まがうような浮雲たちも夕日の中に佇むと優雅、風雅。

闇夜のとばりに覆い尽くされるまで、世界は真つ赤に燃え滾り続ける。燃烧のあまりに消し炭になりやしなやかと心配しなくても大丈夫で、大概次の朝日が昇りあがる頃には街々はベッドで安眠することに飽きたらしく起き上がって欠伸して、不機嫌になりながらモノに当たって破壊を開始する。どこもかしこも頭から爪先まで消し炭にならない限りは蘇生するので、毎日は陰気であるうがそうでなからうが常々続く。例えその人に待ち受ける先が消し炭になる一歩手前という程の厳しい試練だとしても、朝日は優しいので試練を与えます。

さて、しかめっ面のトン大臣が宿舎を訪れたときには、既に亡骸は隠蔽されていた。

そこで行われた殺人の形跡は一切合切、消し去られた。宿舎はほんのりと明るい、暖かみもある燈の灯火に包まれていて、そのランプの明かりは護衛兵の大きな瞳や黒光りの甲冑を怪しげに不気味に照射していて、そんな幽霊的な彼をトン大臣は不快に見つめる。『こんなヤツと関わって無事に済むか？』。思いながら、マインスな思考を打ち消すために口を開く。

「あなたが…」

しかしトン大臣は口を閉じた。護衛兵が手をパーの形に突き出したからだ。

太い眉毛を『へ』の字にしているトン大臣に眼球を向けながら、護衛兵はゆっくりと述べる。

「ドールの使いの者か？…そうお聞きしたいのでしょうか？言われなくてもわかっちゃいますね」

ガチャリと鳴らしながら、ニカッと子供みたいに歯を見せる。歯



はやけに白い。

トン大臣は余計にしかめっ面になる。

「さすが、預言者ドールの使いの方だけあって、勘が鋭いのですな」  
心の内では（そんなもん誰にだってわかることだろうが）と思いつつも、お世辞を述べて空気が辛辣にならないように注意を向けながら、室内を二度、三度、顎にとつぷりと溜まり込んでいる脂肪を震わせながら、見回した。ろくなモノが無い。天井にぶら下がっているラジコン式の、羽の折れ曲がった飛行機、なぜかヒビが入っている壺。そこら中で垂れ下がっているボロ布は、まじまじと見れば洗濯物。それらがランプに照らされて燈でぼんやりしている。部屋の奥の方では、それこそ目を細めなければ存在を確認できないが、やけに巨大な冷蔵庫が一つ、佇んでいる。冷蔵庫のくせに、物言わぬそれが部屋の中ではやけに異端だ。鬱々としていて、それが故に目立っている。

トン大臣は冷蔵庫に人差し指を向けた。そして、

「…あそこに隠されているのかね？」

尋ねる。偉そうに眉を曲げながら。

ガチャリ。甲冑は鳴る。椅子に座っていた体を持ち上げて、護衛兵は答えぬまま、冷蔵庫へと歩を進める。途中何を思ったか「ああ、跡が…」と視線を下に向けていた。トン大臣が彼に続きながらその視線を追うと、そこに一粒の点。真紅の、殺人の形跡。血である。

護衛兵は冷蔵庫に手をかけて何の躊躇もいれず、この場合は躊躇を一寸程度は入れることが間違い無く正解だったはずなのに、容赦なく冷蔵庫を開かせたのである。冷蔵庫の明かりが室内に漏れる。暗がりかほとんどの室内が、多少光に包まれる。しかし、トン大臣の表情は青白くなり、蒼白になり、ぶるぶると奮え上がった。護衛兵は白い歯を剥き出しにした。そして、姿を現したのだ、亡骸。

二つの遺体。一人はトン大臣にも見覚えのある顔だった。それは、かつて自分の護衛をしていた人間の顔だ。

傷一つ付いていない神聖なるそれを眺めながら、トン大臣は嫌悪

感を丸出しだった。

「見事なやり口だ。あんたは殺し屋にでも転職なさったほうが生活が楽になるんじゃないのかね？」

ふん、と鼻息を吹いた。それから殺人者の大きな瞳、トン大臣から見れば狂気のそれにしか見えない瞳、を、じつくりと見つめ、

「…あんたみたいなのはやはり、全く油断ならん。いつ毒が俺の体内に流し込まれるかわかったもんじゃない」

「協力者に毒を盛るようなことは、しませんよ」

さらつと言つてのける護衛兵。そんな彼の『さらつと』で、トン大臣はさらに険悪な様子になった。

「それだつたらいいのだがね。少なくともお互いが協力者だと理解し合えている段階だつたら、たしかに安心なのだろうが」

「でしょう」

「…だが君みたいな、人間という汚らわしい動物を綺麗に葬る、優しいヤツには」

トン大臣は言葉を区切ってから、ため息をつく。護衛兵は『クツク』と呻いた後、

「なにが言いたいのでしょうか？」

苦笑しているようだが、目は笑っていない。言葉も笑っていない。ランプの灯火だけの暗がりで見えるその顔と言葉は冷酷で悪魔的で、トン大臣の脂身みたいな身体をよりいっそう脂身らしくプルプルと震わせる。

トン大臣は場の冷やかさにひどく慌ててから、詰まらせたようにしながら、しかしなんとか、搾り出す。

「やはり、協力出来ない」

護衛兵の嘲笑じみた大笑い声が、室内を響き渡った。超音波のように高音のそれは、高音のくせに室内を一瞬にして覆い尽くす。カカカタとラジコン飛行機はプロペラを回し、洗濯物たちは身をよじる。遺体さえも、目を覚ましてしまいそう。

一分後、やがて静まる。静寂の中、護衛兵は『さらつと』、

「馬鹿なことを言わないでください」

返答し、目を大きく見開いた。

「何故、死体を優しく扱うことが協力できない理由になりましたか？」

護衛兵に、ゆがみが生まれた。それを見たトン大臣は、すぐにブルブル。

「ま、まともでは無いからだ。まともな人間ならば、もっと単純な殺し方をする。それなのにあなたは、必要ないほどに丁寧に相手を殺している。…なんだ、この安らかな死に顔は。天国にでも連れて行ったのか？」

「天国へは連れて行っていません」

護衛兵はトン大臣をすぐさま否定した。トン大臣の言葉に被せるかのような速度で否定した。大きく息を吸って、言葉を続ける。

「地獄へ連れて行ったのです。この世という天国から突き落とすこととが出来るのです。『雲と蜘蛛』の神に身を預けられ、彼らは肉体と翼を休ませることが出来る。この世の、人間という名の天使たちと別れを告げることで、そして己の潔白の翼をちぎり取ることで。裏切りや痛みや苦しみから逃れ、地獄の『雲と蜘蛛』の下で永久の安らぎを与えられるのです。ですから彼らは天国へは向かいませぬ。地獄で、安らぎを得ているのです。ですから、こんなにも綺麗な亡骸となれるのですよ」

「それが、ドールの教えか？」

「ええ、そういうことになりますね。はい」

沈黙に包まれた。トン大臣は睨み付け、護衛兵は涼しい顔をしている。

燈の灯りが、揺れる。年季の入った出窓が風に吹かれ、軋む。音を、立てる。

地獄に突き落とされた遺体は、安らかに眠っている。飛行機のプロペラは、かすかに回る。

トン大臣は室内のいちいちの軋みに敏感に反応しては、落ち着かない子供のようには挙動不審になり、プロペラの回転を見ては何者かの気配を察しようとするが何者もそこにはおらず、出窓を揺らす風の音を聞いては禿げた頭に皺を作った。髭が湿気に反応するかのようには曲がり始めて、目は徐々に血走り始める。その血走りが護衛兵をにらみつけているのだが、既にトン大臣は男の気迫に敗れているのだから、すぐに目は辺りに逸らされる。

『もはや、逃げ場はないのか』

トン大臣は、察した。

へなへなと落ち込みながら、椅子に座る。ミシシ、とトン大臣の体重で悲鳴を上げる座椅子。

うなだれている彼の元に、護衛兵は近づき、何か、耳打ちをする。ある真実を伝えたのだ。耳打ちをされた彼は途端に顔を上げ、「きさまが…」と呻くが、一瞬にしてうなだれてしまい、それから呟いた言葉は、「貴様は預言者よりもペテン師にでもなったほうが、儲かるよ」。ペテン師と評された彼は、また不適な笑みを浮かべてから、高笑いをする。収まってから、陽気に喋る。

「私はペテン師ではなく、預言者ドールです。さあトン大臣、顔を上げてください。早く王女を連れ出してこの国から発たなければ、国民たちは容赦を入れずにあなたを処刑することでしょう。私の預言によれば、もう時間が無い。さあ、翼を広げるのですトン大臣。有限の航路で死ぬる時まで踊り続ければ、きつと新たな道が開けてくることでしょう。さあ、ほら立ちなさい。ほら、トン、トン。…

豚！」

大陸は筆箱みたいな形をしている。つまり、横に伸びている。筆箱などと述べたが、要は、長方形である。

その長方形の中央辺りに、中心辺りに、つまり日本の国旗『日の丸』の、ちょうど日の丸のポジションみたいな辺り、ど真ん中であ

る。といつても、国旗の日の丸ほど割合が大きいわけではなく、実質幕の内弁当についてくる梅干くらい割合の大きさであるところが、現在トン大臣の治めている国がある場所である。そこは、さまざまな他の国に挟まれている。窮屈そうだが戦争などは起きない。平和である。平和なのは今の今まで非常に頭の優れた王様が国を統治してきてくれたからであつて、彼ら王家が国民を導かなければ、国民はきつとアツという間に絶滅していた。まあ、そんな国も現在はトン大臣というなさない豚が統治しているのだが。

紅葉のように葉が真つ赤な木、国民たちからはアトシアと呼ばれるその大木は、その赤を抽出する成分に虫除けの効能があるらしく、しかもこのアトシアが分布している地域がこのトン大臣の治める国周辺のみだから、それを国外に売りさばくことでもかなり儲けている。それだけでなく、自然の美しいものだから人間の目を休ませてくれる赤い木は、他国から観光客を集めるのにも一役買っている。だから国内でアトシアはそこら中に生えている。たむろつて真つ赤な葉を地面にパラパラと降り注がせる。だから国は一時期、真つ赤に染まる。それはとても綺麗な光景であるから、その時期には国外やから色々集まつてきて、国は盛大になる。他の国の偉い方々も多く訪れるのだ。

だが、近頃はそうでもない。トン大臣に魅力が無いから盛大にならない。

というのもトン大臣は威張り腐る男だ。しかも露骨に威張り腐るタイプではなく、密かに心内で他人を見下しているタイプだから厄介。みんな表立っては彼を非難できない。トン大臣の見下しに不快にされても、周りはトン大臣にはつきりと物を申し上げることが出来ない。だから、いろいろな箇所溝が生まれる。漆黒の亀裂が生じる。そしてそれは修復されることもなく、国内と国外の両方に不満をもたらすのだった。

こうした不満の積み重なりが原因で国民たちの怒りが暴発したのは、預言者ドールとトン大臣が話し合った夜の、その一カ月後のこ

とであった。

こげ茶の噴水には複雑な彫刻が刻まれている。描かれているのは動物。その全てに一粒の雫が付。動物たちは涙を流しているのだ。というのも、このトン大臣の国では、『涙を流す動物』が繁栄の象徴とされている。だから国の公共なモノの多くには『涙を流す動物』の彫刻がなされている。それらは一人の優秀な彫刻家が全て彫り尽くしたのだとか。その彫刻家は既にこの国にはいないのだが、彼の彫刻に魅せられてこの国に滞在している見習いは、今も数多く存在している。

さて、そんな彫刻家の話などは今はどうでも良い。なぜなら、今日はとっても良い天気である。まさに晴天で、誰も彼もが太陽の下にその姿を惜しみなく照らされてしまふ一日なのであるが、何故か一箇所に国民たちが集まっている。その集まっている人々は一点に集中していて、その視線の先には、そう、あのトン大臣。彼が鉄製の演説台の上で、拡声器（というがマイク）を握り締め得意気になりながら、唾を撒き散らしているのだ。

「皆の衆、私のためにこんなにたくさん集まって頂き、誠に感謝、感謝」

『お前のために集まったわけじゃない』

『ハ、あの面。見下してやがる』

『王女を出せ、王女を。豚大臣に用は一つもねえんだ』

『さつさと下がれよ。お前は俺たちを不快な気持ちにさせるだけだ』  
『これは国民たちの声である。みんなそれぞれ、トン大臣に対してろくな心象を持っていない。それに気が付いているであろうトン大臣だが、図々しい性格なのだろう、彼らの嫌悪の様子に怯んだりはいしない。』

「今年もアトシアが国の大地を真っ赤に染め上げてくれた。全員で自然の恵みに感謝しよう。さあ、今日は夜まで騒ぎ合おうじゃないか。交友を深め、揺らぐことの無い信頼を築こうじゃないか」

『うさんくさい』

『台本通りのセリフね。言い回しを変えただけで、去年と同じことしか言っていないじゃない。さすが豚大臣。頭脳も脂身で形作られるんだわ』

『王女を出せ、王女を』

『大臣が一番信用ならないな。王が不在なのをいいことにやりたい放題の男が、何を偉そうに信頼などとほざくんだ』

「お、お、おお。みんな、みんな！運ばれてきたぞ、豪勢な食事たち！顔をひよっこりと見せ始めたじゃないか。なんておいしそうないだ。たまらん。さあ、みんな遠慮せずに食べてくれよ。近頃は不景気だが今日は話が別だ。細かいことは気にしないで行くんじゃないか。ケチはいかんからね、ケチは。やっぱり粹じゃなきゃあいけませんよ。……おお、おお！これは、悪くない匂いだ！何だろうなあ、この匂いは嗅いだことがあるのだが。どこかの名産品じゃなかったかね？……ほら、当たった！そうだろうそうだろう。そうだと思っただよ。まあ、私はこれでもグルメというか、美食家というか、食にはこだわりがある男だからね。食べ物のことなら何でも私に聞いてくれ。……道路工事のこと？ははは、そんなことを今聞くのはおかしい話だよ。空気が読めていないねえ、あなた。こういう場ではそういう真面目な質問は控えないと、あまり優れた人物としては見られないよ。次からは気をつけてね。それよりもほら、この煮込みハンバーグを食べてみてくれ。ああ、こっちの鶏、鶏。これも忘れちゃあいけませんよ！あとは……出たー！これだよこれ。忘れるところだったようっかり、はは。本日の主役であるヤギの鞆丸ですぞ！さあ、そこのご婦人も恥ずかしがってちゃあいけません。これがたまらなくおいしいと評判の一品なのですよ。ほら、ペロリつとね。うっん、たまらん。精がつかますなあ、なんというか、なんとというか。たまらん。さあ、みんなも食べてみてよ。これをおいしいと言えないヤツはとんだ皮肉家か、味覚音痴、もしくは私に反旗を翻そうと考えている者のどれかですぞ！さあ、さあ」

『急に元気になりやがった』

『なにあのニヤケ面。美食家だって言ったか？笑わせるな、ただの飽食家だろ？あの大臣は。美食家だって言っんなら、もうちょっとスマートになつてほしいもんだね』

『道路工事のこともいつだって煙に巻きやがる。途中で断絶されるあんなふざけた道路を作ったヤツが余裕ぶっこいて。何人そこから落っこちて死んだことか。あれはひどい光景だったよねえ』

『まあ酒だけはいただきましょうか。…その後は』

『酒が無くちゃあ戦は出来ませんからね』

『その通り。……で、私、考えたんだけどさ』

その日は、アトシアが一年の内でもっとも栄える日。国民たちは城から近い広場に集合し、普段よりも綺麗に磨かれているタイルの上で、どんちゃん騒ぎを行う。他国の偉い人などもこの日はいないから、国民たちはタイルの上で自由にはしゃぐ。そうすることで、一年間積もりに積もった疲れやストレスを、発散するのだ。食事も豪華だし、みんな気が明るいから楽しい。国にとって無くてはならない最高の一日が、アトシアの栄える日なのである。

しかし、今年は様子がおかしい。みんな楽しそうに笑っているが、ちよつとだけ、目が笑ってない。みんな周囲を見回したりしていて落ち着かない。それは浮かれた様子とは違う、何かの真剣味を帯びている。それにはもちろん、理由がある。

そう、今まさに、トン大臣に対する反乱分子の芽が、花咲こうとしていたのである。

トン大臣が昔より広げてきた亀裂が、今まさに、火山を呼び起すのである。

いや、もう噴火してしまった。噴火！

記念日の宴が始まって、数時間後のことだ。

ヤギの鞆丸の感想を聞いたトン大臣に対して、国民たちのほとんどが、ニヤッと示し合わせたように笑ってから、『まずかったです』と叫び、それぞれが凶器を取り出した。



包丁、チェーンソー、錆びた斧、底が剣山みたくなってるフライパン、木刀、殺虫剤、巨大なハサミ、金属バット、芝刈り機、釘バット、黄金のメリケン、剣、五メートルはありそうな槍。そういった物はまだまじだが、七面鳥の丸焼き、変な黒い鳥の亡骸、民家のレンガ、巨大な釘、なんかの骨、タイヤ、道路標識、折れ曲がって錆びてる棒、凶暴な犬、凶暴な猫、いかついヤクザ者、紫色の液体が入った水鉄砲、注射器の針、なんかよくわからない異臭を放つ固めの物体、もしくはそんな感じの液体が入ったピーカー、などなど。

トン大臣、ヤギの睾丸を口元からポロつと落つことし、蒼白の表情。

どこに隠していたというだろう。それぞれがそれぞれの隠し場所から凶器を取り出した。ある者は白い布に囲まれていたテーブルの下から。ある者はマンホールの中から。ある者は口の中から。ある者は服の下から。ある者は近くの民家から。ある者は食べ物の中から。ある者は腋から。ある者は崩れていたタイルの下から。ある者は友達の服の下から。ある者は近くのこげ茶の噴水の中から。ある者はけつの穴から。ある者は地面に置かれていた看板の陰から。ある者は民家のレンガの中から。ある者は酒瓶の中から。ある者は腕時計の中から。ある者は柱時計の中から。ある者は異臭のする靴の中から。

お酒ですっかり酔っ払った、モンスターという名の国民たちは、血走った両眼。

トン大臣にジリジリ、ゆっくりと近づいていく。

その数延べ百三十人超であった、とか。

『覚悟しろ、豚』

チャキリと、刃物が擦れる。

演説台の上で、四面楚歌。トン大臣は幾つもの紅眼に囲まれながら、憎悪のそれを向けられながら、晴天の空よりも真っ青。

青天の霹靂。人々の脳みそは熱暴走している。迫る死期。時間が一方通行に前進して死期が人に襲い掛かる。迫る死期。その死期はもうすぐ訪れる。誰の死期が訪れるのかは明白の事実。国民たちの死期が迫っていたのだ。残り十分ほど。

青天の霹靂。国民たちは何かしらをギャーギャー騒いでいる。ある人は真剣そうに、ある人はふざけたように。ただただトン大臣の責任を追及することで多人数の強大かつ卑劣な力を行使している。凶器を持ち出し、トン大臣を肉塊にするべく。

しかし、トン大臣は脂身の醜い姿とは言え、結局は国のトップたる人物である。彼は一人でも強大で卑劣だ。だからこそ預言者ドールは彼の下に現われたし、八本の足も、この青々と澄み渡る空に、姿を現すのだ。国民たちは気が付けばよかったのだ。今日は白い鳥が飛んでいないことに。密かに、董色の鳥、董トリが飛んでいたことに。

しかし誰も青空など見向きもしていなかった。ご馳走を貪り憎むべき人を睨み付けることの方が、大切だった。このアトシアの記念日に、トン大臣という豚を殺す使命こそが重要だった。大人たちはまだ異変に気が付かない。だが、子供が気が付いた。

「…あれ、なに？」

虎顔の少女。親に連れてこられたのだろうか。スタンガンを右手に携えながら、左の手で空を差す。

大人たちが気が付いてくれないので、隣にいたベレー帽を被った怪しげな男（それは彼女の父親）の裾を引っ張る。

「ねえ、ねえ」

紅蓮の目つきの父親は釘バットを握り締めながら、トン大臣を凝視したままだ。虎顔の娘の呼びかけには気が付いていない様子だ。何とか気付いてもらおうと策を練り、パツと思いついた手法は、足の外側の痺れる箇所。そこをグーで全力で殴ることだった。

「パンチ！」

ごっ、という鈍い音と共に父親は「うん!？」と驚いてから殴ら

れた所を押さえ込んだ。それから、

「なにすんだ馬鹿が！」

と怒鳴り散らしてから、虎顔の娘が必死に空を指差していることに気が付く。『空を見る』と言わんばかりに、何度も指を突き出していた。

「なんだ…」

しぶしぶ父親は顔を空に向けた。そして、思わずベレー帽を剥ぎ取って放り投げてしまった。

「八本の足じゃあああ」

空を見上げたとほぼ同時に絶叫したのである。周辺の血走っている国民たちはすごい勢いで彼から飛びのいた。そのせいで彼の周辺では何人かが衝突し合って、武器と武器も衝突し合って軽い事故に発展しそうになったが、幸い誰も怪我をしなかった。が、沸騰している彼らは突然の男の絶叫に、かなり眉を潜めた。

「なんだってんだ」「おい危ないな」「八本の足って何だよ」「いて、おい、気をつける」「さっさと豚を殺そうぜ！」「落ち着けええ、落ち着けええ」「危ないわよ」「ちよつと、裾踏んでる」「変人が…」「相変わらず謎なことを言う男」「臭う」「屁えこいた」「そりやくさいな」「俺の屁だよ」「なに食ったらそんなことになる」「やきいもだ」「くだらないことを言わないでくれ、殴りたくなるだろう」

その父親は街の中では変人として名が知れ渡っていて、他人が知らないような変な知識ばかりを収集するために日に日に変人ぶりが増す人物であった。彼が晴天に見たのは『古代まあず』と名づけられてはいるが実質はただのインチキ本、に載っていた、八つ足そのもの。

蜘蛛の足のようなそれらの、先端にはそれぞれ象牙らしき鋭利。それが地面に突き刺されば、クレーターが作られ、地震が巻き起こり、象牙に塗りこまれている毒を受ければ人間は蜘蛛人間にされてしまう。肋骨だとかわき腹あたりから産毛が生えた昆虫の足がニョ

キ、ニヨキと、八本飛び出、口内からは唾液の代わりに粘着質の糸が出る。一度蜘蛛人間になってしまった人間はもはや再起は不能。人喰いとして一生を過ごし死に至る。

想像も付かない程にエキセントリックな内容だし、インチキ本に書かれていたことだからあてにならない。しかし、父親もその出鱈目を実は信じていなかったが、現実には八つ足のような怪奇が現われれば、もうちょっと俺も、そういう点での知識が役立つて、周りから認められるのではないか、と思っていた。だから彼は絶叫したのだ。みんなに危険を伝えようとした、というよりは『俺の知識も役に立つんだ』という意味でもあった。だが、もちろんみんなは信用しない。ベレー帽の男が変人だと、みんな知っているから。

しかし、ベレー帽の彼が、娘がしたように、天に指を突き出して、「八本の足じゃて、八本の足じゃて」

繰り返し発狂し続けると、周りの国民たちもそれが目障りで、彼の指の方向を気にするしなくなってしまう。で、しぶしぶ顔を上げたのである、数人が。そしてその数人はポカンと口を大開きにしてしまい、指を突き出すという行為がその数人にも伝染した。数人に伝染したからにはさらに数人もそれが目障りになるしか無いので、やはり彼らも、しぶしぶ、上空を見ると、彼らにもそれが伝染した。そして次第に騒ぎになり、最終的にはトン大臣を紅蓮の目つきで見つめる者は一人もいなくなり、全ての紅蓮が晴天に向かった。そして演説台で腰を抜かしているトン大臣は、脂肪を揺らしながら、蒼白ながら、満面の笑みを浮かべたのである。

「ざまあみたか、脳みそポカンの集合体が！群れやがって！」  
台本には無いであろう本音を口走りながら、ここぞとばかりに罵詈雑言を喚き散らすトン大臣。彼の言葉を耳に入れる国民は一人もいなかったが、しかし彼の自尊心は満たされた。殺戮劇が始まるこれから、それは余計に満たされるであろう。

空に一つだけ、雲。高山の頂にかかるようなその笠雲は、その両側面から足を四本ずつ伸ばして、計八本。異様極まるその姿に

脅えない国民は誰一人としていなかった。皆、逃げ出そうとした。だが、始めに広場を抜け出ようとした男に、八つ足のひとつが突き刺さって、彼の身体をそれが貫通した。男は呻く暇もないまま絶命してしまつて、タイルの上にごろんと寝っ転がった彼、の身体から昆虫の足が：飛び出てくることは無かつたが、しかし彼は晴天を、色も無く眺めるようになって、動かなくなつた。それが合図となつて、広場は爆発した。

「あああああああああああああああああああああああああああああ  
あ」

一人の絶叫。それにあわせるかのように、

「アアアアアアアアアア」

そういつた声々の全てが混ざり合つて、一つの渾身となつて青空を昇り上がり、吸い込まれていく。笠雲に。八つ足に。

グサリ。

人の体に突き刺さつた音が生々しい。

「グウア」

肺から押し出されるような咆哮が、広場の国民の恐怖を、煽る。

煽る煽る。

急いで逃げるんだどこでもいいから逃げグサリ、ああ嫌やめてそ  
うちにいつちやだめグサリ、戦え闘争だこれは戦争だ武器を持つグ  
サリ、いやじゃああグサリ、八つ足が八つ足がグサリ、気持ち悪  
いグサリ、やめてグサリ、なんでこんなことにグサリ、叩け、叩く  
んだグサリ、ああお母さんお父さんグサリ、いやああああグサリ、  
グサリ、グサリ、グサリ。その内叫び声も少なくなり、ただただグ  
サリという生々しい効果音ばかりが広場を突き抜けていつて、董ト  
リをどこかから集めるばかりになつた。

休む間も無く八つ足は働き続け、過労死することも無く殺人を続  
けた。人々も休むことなく殺され続けた。トン大臣はその光景の特  
等席から観覧しながら余裕に耽り、そして、ふと、恐ろしいほどの  
美人を見つけた。今までに見たことが無い顔だったが、トン大臣が

見た今までの誰よりも美しい人だった。顔だけが美しいのではなく、佇まいが、平民の割に高貴で、その仕草の一々は既にお亡くなりになった女王の御姿を、トン大臣に想起させた。王女の母親である女王はもう死んでしまったが、目の前で逃げ回っている美人はまだ生きています。トン大臣はとつさに思いつき、三百六十度を見渡し、何度も見回し、預言者ドールの姿を探した。ドールに頼み、何時殺されてしまうかわからない美人を生かして、我が物にしようと考えたのである。しかし預言者ドールは見つからない。そこら辺に隠れている、と、トン大臣は聞いていたから探すけれど、いない。早くしなければ美人が殺されてしまう、私の妻に妃に出来るかもしれない美人が殺されてしまう、たまったもんじゃない、「ああ、もう。」かくれんぼをしてるんじゃないんだぞ、とトン大臣は憤りながら思考して美人を再び眺め見ようとしたが、既に彼女は美人ではなく、故人となっていた。彼が美人に振り向いたとき、彼女のお腹にずぶつと足は、めり込んで既に貫通していた。美人は血だらけになり、空中に浮かび上がりながら、目からは光が消えうせて、故人となった。トン大臣は愕然、がっかり。「もつたいないぜ、あんな美人、なかなかいない」と薄情なことを呟いた彼。その彼にグサリ、足が突き刺さった。

トン大臣は「ええ」と一驚しようとしたが、足は喉を一刺しにしていたため、唇だけが開いたり閉じたりした。憐れトン大臣、彼の首は球体であるがごとく宙にぶっ飛び、太陽を拝んでからタイルに墜落した。首は断腸の思いといった様相で自らの肉体を見つめていた。ひどいことに、トン大臣の元の肉体はさらに八つ足にじめられていて、それこそ本当に断腸されている程だったから、まさしく断腸の思いだった。

やがて、トン大臣の治めていたこの国、その全ての人たちを、八つ足が絶滅させた。足の一本一本で、呆気なく、数時間で国民たちは死んだ。

複雑な彫刻が成されたレンガで構成されているお城。複雑とまで

はいかないけれど、涙を流す動物の描かれている、民家。それらが、物言わず佇んでいるだけだ。

タイルで横たわる亡骸を、董トリが突つつく。やがて夕焼けが来て、それも終わって、夜になった。

夜になって、国には誰もいないから、当然なのだけれど、広場は本当に静かになって、鳥の気配しかなかった。

しかし首はプカプカと浮かび上がった。一つ、月明かりに照らされながら、それはホメラ花が咲き誇る庭園へと、向かった。

## 瑠璃の花とホメレラ花の蒼

頭が良かった。天才だった。秀才などという程度ではなく、他の追隨を一ミリも許さない頭脳。公式を一瞬で暗記し、その意味するところもチラと文章を読むだけで理解してしまう。それを応用することも容易くこなす。彼女はまさに才女だった、五歳までは。

まだホメレラ花が植えられていないお城の庭園に、その果実は凜と生えていた。彼女の目から見てそれは、とても映えていた。広い、とにかくただっ広い、庭というよりは丘のようなそこで、その中心で、果実は瑠璃色だった。その瑠璃色が、透明な、陽光を反射してキラめくところとした蜜みたいなモノを垂れ流していて、頭の良い天才児はその蜜が食べられるものだと判別した。近づいてまじまじと蜜を見ると、透明なそれは彼女の幼気な顔を歪ませて映していて、そのせいで、とても不細工に見えた。彼女はそれが面白くて、様々な角度から、首を右に捻ったり体を屈めたりして、蜜を観察した。いずれ蜜が茎を伝って土に染み込むと、次の蜜が瑠璃色の内側から染み出てきて、満杯になつて零れ落ちている。その蜜も陽光をキラキラと反射していたし、彼女の顔を不細工に映しこんでいた。彼女は自然とほころびながら、辺りをキョロキョロと見回した。それから、

「あなた、面白い顔してるよ」

と感慨に耽るような顔をした後に、また蜜が茎を伝って土に染み込む。で、また溢れ出てくる。

「んー」

唇を閉じたまま喉を鳴らしてから、蜜の味わいを想像してみたりして楽しんだりして、「んんん」から「ふっふっふっふっ」と鼻歌交じりに変わって蜜を指で掬い取った。それはひんやりと、気持ち良い感じに冷えていて、彼女は思う。父や母に見せてあげよう、大臣



にもまあ、見せてあげよう、みんなにも教えてあげよう、蜜には興味を持たないかもしれないけど、少なくともこの瑠璃の花は国で初めて見る。きつと、新種だ。庭のこんなド真ん中に見映える花が咲くなんて、それだけでロマンチック。きつと、みんな喜ぶだろうね。

あどけない微笑みを浮かべながら、五歳児は蜜をペロつと、一舐めした。舐めると同時に、とても濃密な蜜が、彼女の小さな口内で弾けて踊りまわった。口だけに収まらず鼻腔さえも甘味が満たしたし、ていうか脳が痺れた。ひどく痺れた。脳裏で何かが暴発した。それは脳細胞やらニューロンやらに強烈な電気ショックを巻き起こすかのようで、その電流のあまりに脳細胞の幾つかがショート。一瞬にして、ポンコツ化した。

王女は馬鹿になった。どのくらい馬鹿になったかと言うと、二次方程式も三角関数もゴルゴーの最終定理もバツハの最終定理も理解出来なくなった。外国語もペラペラ喋っていたのに、自分の国の言葉も危うくなったし、というか、ことごとく馬鹿になった。顔つきがもはや馬鹿だった。何と言っているのやら、何せ、王や女王や大臣が彼女を見た時、王は「まあ、家の娘に服を着せられたんだね。あの娘は頭が良いから、すぐ城を抜け出してしまっただ。でも君は家の娘に似ているね。なんというか、ちょっとぴり似ている。まあ、家の娘はもうちょっと締まった顔をしてはいるが」と自らの娘目掛けて、言ってしまった程である。といっても既に王女は馬鹿になっていたから、王がなんていっているのか微妙に理解出来なかった。とりあえず、「ええ、まあ」とだけ、相づちを打って、それから思わず、涎を垂らしそうになって焦っていた。

そんな間拔けな彼女を、王と女王は微笑ましく眺めていたものだが、それが実の我が娘の変わり果てた姿だと気が付いた時には、さすがに冷静ではいられなかったそうである。女王はくらくらとなつた後に、失神して床に臥した。王は茫然、啞然、とした表情をした後、怒ったような顔になって遠くに目を向けてしまった。

瑠璃色の果実。そこから流れる蜜。そこにどんな毒が秘められていたのか、なぜ王女が馬鹿になってしまったのか。それは緻密な研究を重ねなければわからないことであろう。王は王女の才気を取り戻させるために、この蜜と瑠璃色の果実の、研究を国規模で開始した。

時にはネズミに蜜を吸わせたこともあったし、死刑囚に蜜を舐めさせるような、多少非人道的なこともした。その結果、舐めさせた奴は一人残らず馬鹿になった。どう馬鹿かと言えば、科学的には証明されないが、なにか馬鹿だった。博士が死刑囚に話しかけるとこんな反応が返って来る。

「今日は何日だか、わかりますか」

「なんなんですかー突然。そんなことを尋ねられても困っちゃいますよー。今日って、あれでしょ。仏滅でしょ、仏滅。困りますよホントそついうのオフレコなんすよー。あんま答えられないことなんで、そういう質問控えてくださいね、特に今日から気をつけてくださいね、よろー」

「なんなんですか、仏滅ってのは」

「そんなことをお主に語る舌をわたしは持たんって。…持たんって」  
「真面目に答えてください」

「なんで真面目に答えなくちゃいカんの。俺死刑囚だからさあ、もつと語りたいことがね溢れてんだよ。例えば世界のこと？なんつうか、今まで知らなかったことをもつと知りたいっていうかそんな感じかなあ。みんなは俺のことを馬鹿になつたつて言うだろうけど、俺的には爽快気分爽快っていうかあ、もうたまんねつす。もうたまんねつす。それよりも仏滅つすよ。世界で仏滅つす。これやばいですよ」

「世界が仏滅になるとどうなるんですかね？」

「知らん」

「え？」

「いや、知らん」

「知らないのに大変ってわかるんですか」

「そうだよ」

「それはおかしいでしょう」

「おかしくはないよ」

「そうですか？」

「うん。ていうかさあ、飯食わせてくんねえ？腹減っちゃったって  
いうかさあ、胃が収縮してるっていうかさあ、なんつうか脳が重た  
いんだよねー。早くしないと俺の機能が停止しちゃうっていうかさ  
あ、ていうかさあ、もう腐ってんだと思えてきたんだよね近頃。あ  
んたの息が臭いし」

「わたしの息がですか？」

「そうそう、臭いよ。どう臭いかっていうと仏滅臭いんだ。なんて  
いうか、君があれだったんじゃないかな。仏滅。世界が仏滅の意味  
わからなかつたけど、なんつうか俺が今わかつた。俺、世界の真理  
わかつちやつたかもしんねーあんたが真理だよ。オメ。胃にくるね。  
息が伝わってきて仏滅だよホント。おめでとう、拍手、拍手喝采し  
たいよ。ていうか腹減ったんだけど、飯まだ？飯くわせてくんねえ  
かな、俺オムライス好きなんだ。それかあの蜜でもいいしねー、あ  
れ、結構痺れて、いい感じだから」

「蜜が？」

「うん。あの濃い感じ、濃密な感じ。たまらないし、なんつうか忘  
れられないんだ。オムライス？とか、そういうのも悪くないし、ど  
つちかつていうと日々の中ではああいうモノを常々飽食したいくら  
いなんだけど、そういう、飽食してしまった時に食べるあの蜜な感  
じってのはつまり、どうということなんだろう。仏滅だとかそういう  
もののご飯ってのは関係の無いことだと思うけれど、そうかと思  
いきや時たま俺の脳みそを支配しているのは蜜なんじゃないかって、  
想像してしまうんだなあ。そうするとショックでさ、俺は俺でやつ  
てやるよ、あんたらのことなんて知らないよって思えるから、遂に、  
まあよくわからないんだけれどね」

「ほんとに、よくわかりませんね」

「そう、よくわからないだろ？で、あなたは俺のことを馬鹿だつていうか、王女が馬鹿になつてしまつただとか騒いで俺のことも巻き込んだわけなのだろうけど、ハッキリ言わせて貰えば、反感を買うことを前提で語らせてもらうならば、俺はまったく馬鹿になつたつもりは無いし、むしろオマエラが馬鹿？つていうか、つまりあんたらは俺のことを馬鹿馬鹿つていうけど、そういうわけじゃなくて、事実俺が馬鹿なわけではなくて、あんたらと俺の価値観が違う、ということだと思つんだよね。そういう価値観の違いがあるせいで俺はあんたらから白い目線だし、喋り方がちよつと周りくどかつたり言いたいことがよくわからなかつたりつてのは結局の所、原因は全て価値観の相違にあるだけの話なんだと思つ。まあ、まあ、それが一番の問題なのだとしたら一番困るといふか俺としては排除される予感がして憚りたいんだけど。少数派でしょ、こつち側は？だからまあ、まあつていうか、そういう訳にもいかないじゃないですか？争いは必須じゃないですか？馬鹿だとかつて呼ばれる問題じゃないんですよね、王女様が馬鹿になつたとかつてのが問題なんじゃないんですよね」

「じゃあ、何が問題なの？」

「そうですねえ、あれですねえ、問題としては蜜を知つた側と、それと蜜の喜びで歓喜していない側との対立、つていうか、そういうものがこれから顕著になつた場合が問題ですよ。顔つきで蜜を食つたか食つてないかもわかるわけですからね、もうみんな対立は激しくなつてきますよ、喋り方もちよつと風変わりになつてくるわけですよ。そういう、違つものに対する不信というか、つて、どう考へても出ちゃうだろうから、やっぱりねえ。でも、俺は考えてるんですよ。どうしたらお互いが手を取つていけるか」

「どうすればいいと思つてるの、君は」

「まず、博士さんたちは俺を研究対象として見ていて、つまり俺のことをネズミと同じだと思つてる。つまり、対等という目線では無

い。なんでかっていったら、やっぱり人数的に負けているせいであるのかな、その人数が同じ程度になれば、こっち側はあなたたちと対等になれるというか、友達になれるというか、そういう感じがあると思うんですよ。あなたたちは人数の利を使っているから、今の時点であなたは俺を捕らえているし、逃がすこともないだろうが、将来はどうか。蜜がどれだけ世界に広がるかの想像は、想像付かないし、気が付いたらこの国以外の連中全員が蜜を嚙っている可能性もある。何せ、蜜はうまかったからねえ。俺は一度しか舐めさせてもらえなかったわけだが、今だってあの蜜を舐められるものなら舐めたい。きつと中毒性があつたのだろうね。ちよつとしたクスリみたいなモノなんだろうよ。あの瑠璃の花は城の庭園に一輪咲いていただけだったが、もしあれが国のどっかに生えていたとしたら、一体どういうことになっていたのでしようか。俺には想像も付かないことだ。まあ、とにかく何が言いたかつたのか忘れたが、重要なのはお互いが手を取り合うということでしょう。幸い王女があなつてしまったことで、俺も死刑にされず実験対象として生かされているんだものな。それまでに世界に俺や王女みたいなのが溢れて、人数的に対等になる。俺にとっては、それが一番、いいことなんだろうな。俺の言いたいことはそれだけだよ。そろそろ、眠ってもいいかな？」

そう言つて死刑囚は、博士の答えを待つまでも無く、その場で眠りに落ちてしまった。いびきを遠慮なく垂れ流し、涎を唇の端からこぼし、時々歯ぎしりさえ起こす。彼は何にもない研究室の中で、そのまま一日中、眠りこけた。博士は、あきれた。

博士は王に報告する。

「彼の言っていることは全くもって理解しづらい。ただ私たちに不満を抱えているようです。それに、あんな死刑囚ごときが、同じ蜜を舐めたという共通点だけで、王女との同属意識を持っています。憂うべき話です」

王は、鷲が彫られている、赤と金が基調の王座に座りながら、う

うんと、唸って、重い口を開く。

「いったい何がどうなっているのか、ちっともわからないな。あの死刑囚は以前、一言も喋らない奴だったね？」

そう、蜜を舐めさせる前の死刑囚は無口な男であった。

博士もその所が理解出来ない。

「何でも話しますよ、彼は。マシンガントークと言ってもいい程にくっちゃべりますから、こっちの耳が痛くなってくる。一つ質問するだけでひよいひよいと自前の考えを何の恥ずかしげも無く晒しますよ。ほんと恥ずかしく無いのかねえ、と私なんかは彼の牛っ面を見ながら、思うのですが」

「そうだな。特に娘と同族意識を持つなどというのが、私としては到底許せない。殺人者が何を言うのだ、本当に。ああいう奴をのさばらせて呼吸するのを許すことはやはり出来ないんだよな。もう、実験、観察は中止にしてくれて良い。あんな奴はもう死刑にするんだ」

「よろしいのですか」

「ああ。それと、トン大臣を呼んでくれ」

「トン大臣をですか」

「ああ。私は旅に出る。あの瑠璃の花を持ってな。その間、国はトン大臣に治めてもらおうと思う」

「何をおっしゃっておるのですか。あのような権力志向の男にこの国を任せられるものですか」

「権力志向だからこそ任せるのだ。なんだかんだ、あの男は優秀な部分も多々ある。性格こそ難儀だが、能力が無いわけではない。案外国を治めるには、あのくらいのエゴイストの方がちょうど良いのだろうよ」

「…しかし、私は納得が行きません。この国を治めるのは、王とその血族の者におのみ、その権利があります。義務と言い換えてもよろしい。トン大臣などに任せては、国は貧しくなります、滅んでしまいます！」

「すまないな博士。私だつて、そりゃみんなに申し訳が立たないよ。……だが、博士。どうか納得して欲しい。私は娘をなんとしたとしても元の様子に戻さなければならぬ。あのままではいかんだ。どうにも可哀想だ。……博士、自分勝手な私を、許してくれるだろうね」  
博士は黙りこくつてから、顔を上げて王をまじまじと見た。

「……王は、今まで私たちのために誠心誠意を尽くしてきました。王は自分勝手などではございません。旅に出るのだから、王女に将来この国を立派に治めてもらうためなのでございましょう。トン大臣に命令されるのは不愉快ですが、しかし、彼を妙な立場に置いていると、逆に国が混乱してしまうかもしれません。たしかに、彼には王という役柄を与えて満足させた方がよろしいでしょう。王が帰ってくるまで、私があつた男を監視しておきましょう。ですから、王。必ず帰ってきてください。我々国民は最後まで、あなたを待ち続けて見せましょう」

博士の言葉。王は、胸を熱くして、泣いてしまった。

泣きそうになりながら彼は言う。

「女王も今は床に臥しているが、直に目覚めるだろう。博士、私が本当に信頼できるのは君くらいだ。どうか、王女と女王を助けてやってくれ。トン大臣のことで苦労することもあるだろうが、だが、君にしか頼めないことだ。お願いするぞ、博士」

「私にお任せください、王」

こうして王は国を後にした。遠征という名目での出陣。その間の代理として、トン大臣。王は王女に、ホメラ花の種を幾つか、渡した。

「これを庭に植えるといい。花は生きている。生き物を大切にすること、上に立つ者としての自覚を深めなさい」

城を発つ直前の、全国民に見守られながらの、王の別れの言葉。

王女はにこやかな笑顔で、答えた。

「お父様、すぐに帰ってきてくださいね。私なんだか心細くあるよ。うな気分もしますけれど、でもなんだか不思議なもので頑張れる気

分でもありますわ。その理由が何だかはわかりませんが、庭園にこれを植えればきつと良いことになるのでしよう。みんなが幸せになればハッピーですわね父上。ハッピーということはどういうことかといえれば良いことですものね。父上、私立派な上に立つ者に成り変わってみせます。近頃お菓子ばかり食べてて怠けてたものですからいけないですわね。お勉強します。お勉強すれば、いつかは二次関数だつてゴルゴの何とかかんとかだつて解けるようになりますわ。あ、最終定理ですわね。ですから、私頑張りますわ。それでこそ私、王女なんですものね」

晴天。空には入道雲。夏だった。蒸し熱くて、広場は汗臭かった。ホメレラ花の紫の花びらだけが、颯爽としていた。王は王女の頬にキスをして、王女も王にキスを返した。王は女王が床に臥している城を物惜しげに眺めたのち、演説台に登り、国民たちへ出陣の挨拶をした。興奮する者がいたり、泣いたり不安がったりする者もいた。応援したり励ましたりする者もいた。王は締めくくりに、「私たち全員が力を合わせて誠心誠意努めれば、解決できぬことなんてものは、何一つだつて無い！私の身体は遠くに向かうが、精神はいつだつて皆と共だ！それを忘れないで欲しい！」と述べた。

たくさんの国民や臣下の者たちに見送られながら、数人の兵士を従え、ついに王は出陣した。

密かに喜んでいいるトン大臣、密かに憂いでいいる博士、笑っている王女、様々な表情の国民たち。

たくさんの瞳に見送られながら、王はやがて陽炎になり、消えた。その時国は、蒸し暑かった。

淒涼の中で慟哭していたのは馬鹿になってから十二年が経ち、少女を卒業した王女。ホメレラ花が月の下で揺らめいている。紫の花



びらが夜の静けさの中で、物寂しい空気を一層深めている中、それらの一部分で王女は慟哭。庭は広くて人もいないから、彼女の泣き喚きはどこまでも響いていくかのようだった。夜も抜けて、城も抜けて、国も抜けて、どこまでも抜けていくそれは、やかましかった。

庭は十二年の月日の中で、王女の献身な飼育のおかげか、ホメラ花を辺り一面に咲かした。かつてあの瑠璃の花が咲いていた中心に立てば、三百六十度のホメラ花に囲まれる。立派な光景。月夜に合う。その中でのお姫様というのは、絵になっていた。やかましく泣いているのが、すこし余計なのかもしれないが、それでも王族の生まれだけあって、景色はまるで額縁に納められているかのようだった。

頬を腫らして、花びらに涙を零している。彼女は毎晩こんな調子だった。ただひたすらに泣き続けるばかりで、他に何をすることもない。

国が減じたこの日も、彼女は泣いていた。

しばらくして、泣き止んだ。

「あー、すっきりした。寒くなって来たし、花に水もやったし、いや本当寒いなあ、さっさと帰りたい。ていうかホントもうすることが無いっていうか、暇っていうか、私ってホント王女なんかなくて思っつていうか。近頃、昔から怪しんでたけどどんどん蚊帳の外っていうか、あの豚大臣のせいでこれっぼっちもねえ、これっぼっちもねえ、私は憂鬱。とつても憂鬱よ、お父様、お母様。なんで二人ともいなくなってしまうのかしら。私もう忘れてしまったわ、二人の顔。もう、思い出せないわよ、二人の顔なんて。ホメラ花は大好きというか大好きなだけけれど、何で私はお城で独占しているのかしらこの景色を。もつと国全員でこれを愛でるべきよね。私も頑張つて育てたことだし！ああ、ああ、もう。なんだかイライラしてきた。なんだかイライラしてきちゃったよ。なんで私って同じことを二回言う癖治らないのかな。これ怒られるのに。ああ、ああ、もう、そうだ。あの豚大臣に庭を公開するように言っつて困らせてや

るうかなー。そのくらいしないとあいつ、ほんと、どうしようもないもんない。ていうか、暇。ほんと、もう暇。あ、また二回言っちゃった。どうしようもないな。お父様、お母様、どちらでもいいから帰ってきてくれないかしら。私やっぱり馬鹿みたいだし。いまだに二次関数となんちゃらかんちゃら理解出来ないし。昔よりも馬鹿になってんじゃないかな。不安だな。私の言葉が他人に伝わってるのかも危ういな。みんな私に教えてくれないだけで、本当は私の言葉を理解できてないんじゃないかな。あ、でも会話できるんだからそんなことないか。私ったら、お、茶、目、ですね。いや、そうでもないか。

様々な身振り手振りも加えながら、彼女は緋色を基調とした、家紋である黄金の鷲が描かれたポンチョ、を月夜ではらはらと瞬かせながら、ホメレラ花を踏まないように注意しつつ自室に戻ろうと歩き出した。鼻歌も混ぜらせていて機嫌が良さそうにも見えるが、別に表情は楽しそうでもなかった。むしろ退屈そうだった。

「ん」

その帰り道の途中で、黒い影が二つ、近づいて来るのに彼女は気が付いて腰を曲げた。一つは人影だったが、もう一つの影はなにやら奇怪だった。

「あやしいーな」

杖、らしく見えた。地面から、一本の棒のように伸びている直線杖ならばその先端に取っ手らしき曲線だとか膨らみだとかがあるのだろうか、いや、膨らみはあつたのだが、露骨に膨張している。まるで、人間の頭部が杖に接着しているかのように見える。それ程に先端部分は膨れ上がっていて、もしアレが杖なのだとしたらそれはひどく使いづらいだろうし、それ以前に自ら地面を移動する杖があるはずもなかった。だが、杖は確かに人影の隣で、彼女に向かって歩を進めていた。王女は少し怖くなって慎重になり、あまり音をたてずに歩いた。

王女と影は、距離を縮める。やがて月明かりが影を照らすと、そ

の二つは正体を現した。思わず王女は「あ」と搾り出した。身を止めてその影の正体をまじまじと、見つめるしかなかった。

「こんばんはレシ王女。ご機嫌おうるわしゅう？」

「あ…こんばんは」

影の一つは人間。男らしき声のそいつが、王女に話しかける。語尾のアクセントがやけに強くて気取ってる風なのが、いやらしいなと彼女は思った。

もう一つの影は、杖だった。その先端にはトン大臣の頭部がくっ付いていた。首の根っこから赤青の繊維みたいなものが何本も飛び出っていて、それらの一本一本が杖のどこかしらにくっ付いていた。身体が杖になったトン大臣は夜目で見てもわかるほどに、不機嫌そうだった。

「王女。こんなやつに挨拶を返すことはありませんぞ。こやつは最低の男だ」

「おや、国の救世主に対して、最低な男などと」

突然現われた二人の男。しかも一人は身体の無くなったトン大臣。もう一人はよくわからない瘦身の出目金みたいな目をした男。王女としては、国の救世主という言葉は引つかかる。それはトン大臣が杖になったこととも関係があるのだろうか。よくわからないが、この出目金な男は不気味だ。

王女：レシ王女は、そのように考えてから、とりあえず会話をし、状況を伺うことにした。本当はさっさと部屋に戻って眠りたかったが、そういう雰囲気でもないか、と思った。トン大臣がこんな状態なのにやけに冷静な自分は、いったいどういうことだろう、とも思った。

コホン、咳払いをしてから。王女らしく語ろうと思いつつ。

「まず、いろいろと何かあった様子ですが、一体何かあったのか教えていただけませんか。まず、そうですね、トン大臣の様子がおかしいのですが、一体どういうことでしょうか。私としてはトン大臣はもつと体積が広い肉体を駆使して稼働していた記憶がある

のですが、このトン大臣は一本足というか棒一本というか。不自然極まりないのですが」

微妙な語り口になったな、と彼女は後悔をした。トン大臣の機嫌はさらに悪そうになった。出目金男は苦笑い、いや、嘲笑いにも聞こえた。

出目金男が答える。

「ここで立ち話するにはデリケート過ぎる話です。しかし、時間も無いのです、王女さま。急がなければあなたの命も危うい」

「私の？」

「そうです。詳しいことは後でお話ししますので、どうぞ私の後についてきてくれますか。私の身分の保証は、トン大臣がしてくれますよね？」

眼球が生々しく動きトン大臣を射抜く。トン大臣はプルプルしながら、

「う、む。王女、このお方は、さっきは最低と言いましたが、実際は信用して良い人物ですぞ。こんな見た目になってしまいました。私が生きているのは全てこの男のおかげ。王女は気が付かなかつたかもしれませんが、国がこの男のおかげで救われたのです。さあ王女、私を運んでくださいまし」

そう言つてトン大臣は頭を突き出しながら、レシ王女に向かってぴよんぴよん気持ち悪く飛び跳ね、近づいた。彼女は「う」と気持ち悪そうに呻いたが、断りようも無かつたので、おっかなびっくり、杖の細い部分を手に取つた。杖は変に温かつた。王女はトン大臣にセクハラされてるみたいな感覚して、悪い気分になつた。

「さあ、こちらです」

出目金男がレシ王女を誘導する。トン大臣は王女の杖らしく納まる。

こうして三人。城下の夜道を、とぼとぼ歩いた。

再び庭。月夜の下。ホメレラ花が揺れている。パラソルに囲まれ

た、純白な椅子と純白なテーブル。純白に座る姫と、預言者ドール。トン大臣は地面に突き刺さっている。

「それでは、教えてもらっても、よろし？」

レシ王女の言葉。預言者ドールは頷く。

「まず、トン大臣がなぜ首だけになり、杖になってしまったのかをご説明しましょう」

「はい、よろし」

「はい。国に花が咲いたのです。一輪の花。それは黄色い花でした」「黄色？花が？」

「そうです。あなたがかつてここで見たように、突然、一輪だけの花が咲いたのです。あ、あなたにまつわる瑠璃の花の話は、既に大臣から聞いています。それは蜜を流しはしませんでした、ある効能を国民たちに発しました」

「どんな効能をもたらしたと」

「闘争本能の向上です。人の普段抑え付けられている暴力的な本能という奴が、その黄色い花で剥き出しにされたのです」

「それが、今日？」

「そうです。闘争本能に目覚めた国民たちは、バツサリ……」

「トン大臣を切り裂いた、ってことですかね、流れる的に」

「そういうことです。巨大な斧でね。余韻も残さず一撃です。デュラハンのように首なしになりました」

「でも杖になつて生きてる」

「そうです。そこで私という救世主の登場です」

「自分で言うとは、かっこいいんですね」

「事実ですから。そんな疑わしそうな表情にならないでくださいよ。妖しくみえるでしょうがそれは当然のことなのです。なぜなら私は妖術使いなのですからね」

「妖術使い……オカルトですか」

「違います違います。オカルトっぽいけどオカルトじゃないっていいつか。ていうかあなた、あんまり妖術を馬鹿にししないでくださいよ、

困ります。忘れないでくださいよ、私がこの国を救ったということを」

「すみません言い過ぎました。目の前でトン大臣が杖になっている以上、オカルトなどというのは知恵遅れでしたね。とても失礼でした。続きをどうぞお願いします」

「ご丁寧にも。私の妖術にかかればトン大臣の命を助けることは可能です。物接の儀という技で木の枝と神経を繋ぎ合わせることで、命を食い止めさせたわけです。胡散臭いなどといわないでくださいよ、事実胡散臭いですが、目の前に証拠がいるのですから。で、次の問題は国民たちをどのように処置するかでした。このままでは闘争本能の赴くままに国民たちが同士討ち、殺し合いを開始してしまふ。そこで行った処置が、八つ足の処置でした」

「…おい！」

突然トン大臣が声を発した。獣が吠えるような蛮声だった。レシ王女は不思議そうな瞳で彼を見る。トン大臣は今にも預言者ドールに飛び掛りそうな形相をしていた。レシ王女は胸が高鳴るのを感じた。何が目の前の出目金男から伝えられるのか、国民に関することなのはわかるがトン大臣の表情によれば尋常なことでは無い。国民を心配する気持ちというよかは、退屈から飛ばされるのではないかという期待から来る、胸の高鳴りがやかましく、やかましく、やかましくて仕方が無い。やかましい？

「八つ足の処置？」

何故か湧き上がってきたやかましさは言葉で紛らわせる。八つ足とは、いったい何なのか。レシ王女の疑問。

出目金男、預言者ドールは、やはり嫌らしい顔つきをする。不自然なほどに片頬だけ曲げて、目を大きくして、とても嫌らしい。

「それをお聞かせする前に、再び場所を変えたほうがよろしいかもしれません。もしくは、やはり、語らないほうがよろしいのかもしれない。が、気になってしまっているでしょう？」

「当然です」

「それならば、広場に向かいます。お城の前の、あの演説台が置かれている所に」

「広場、ですか」

「ええ。来ればわかります。トン大臣も、よろしいでしょう?」

預言者ドールの一瞥。トン大臣は戸惑っている風だったが、しかし頷いた。

「ではいきましょう」

純白の椅子から腰を上げる預言者ドール。続いてレシ王女も立ち上がり、杖を手にとった。

月は朧月になっている。

こうして三人、また夜道を歩き出した。

何も無かった。導かれるがままに、三人で演説台に、狭かったが、登った。で、何かあるような雰囲気を出して怖がらせていたにも関わらず、広場には朧に照らされてるタイルが敷き詰められているだけで、他に何にも無い。

レシ王女はなんだあと思ってから、しかしすぐに、これはどういうことだろうと思直した。おかしいじゃん、と感じた。というのも、今日はアトシアの記念日であったはずなのに、広場に何にも無いというのはおかしな話だった。広場が会場であることはレシ王女も知っていた。しかし頭をもう一度捻らせてみて、あ、そっか、となった。国民たちは暴徒になったんだった、だったら記念日の騒ぎも中止にされるじゃん、と気が付いたのだった。

「なんというか、結局、何かあるっていうんですか。ここに」

レシ王女が尋ねると、預言者ドールは彼女の目前、彼女にメガネをつけるような感じで、片手ずつそれぞれで輪っかをつくった（いわゆるOKサインのような、親指と人差し指を重ねる形）。

突然の行為でレシ王女はたじろいだ。

「この輪っかの中を覗いて見てください。全てがわかりますよ」

やはりいやらしい、やかましい声つきの彼。少しムスツとしたま

まに王女は手作りの輪っか、を覗き込んだ。

しばらくの間、沈黙。

レシ王女は覗き込んだまま、息もしていないようになった。

「王女、何が見えたのです」

杖のトン大臣がピヨピヨン気持ち悪く飛び跳ねながら尋ねるが、彼女は答えない。

「おい、預言者ドール。王女に何を見せているのか、私に教える」  
憤りを抑えないトン大臣。彼が演説台から広場を見回しても、朧のタイルがあるだけ。昼に斬殺されたはずの遺体たちが一つも転がっていないのはおかしいことだが、預言者ドールが何かをしでかしたのだというのは確かだ。預言者ドールの手作りの輪っかに映っているのは八つ足に殺された民衆なのだろうか、それとも別な何かなのか、わからないが王女は絶句している。

「預言者ドール！」

「わかりましたよ」

預言者ドールはめんど臭そうにしながら、トン大臣に輪っかを作ってあげた。「ほら、どうぞ」「そうそう、それでいいんだよ」覗き込む。トン大臣が覗き込んだ瞬間、彼は溜飲。トン大臣は王女に聞こえないように呟く。「いつのまに、こんなことを」。預言者ドールもささやくように、「私の妖術にかかれば、たやすい」得意気に呟く。

広場の殺戮の光景は、殺されたはずの国民たちは、整然としていた。古代の遺跡に残されている土偶たちのように整然と立ち並び、城の方に向かって武器を構えていた。石像となって。

預言者ドールが輪っかをトン大臣からどけると、石像は消える。また見せると、石像たちが佇んでいる。

「どついう手品なんだこれは？お前が手で輪っかを作ると別次元が見えるようになるのか？」

トン大臣がひきつりながら尋ねる。

「すごいでしょ、不思議でしょう？妖術ってのは何でもありません」



「幻か？」

「いえ、現実です」

話がややこしい方向に転がっていくような気分が、トン大臣にはした。

妖術などと言って煙たがらしくして、ごまかして、しかし結局この男、預言者ドールは、ただの詐欺師だ。本日の昼に国民たちは確かに全て死んだ。あれが白昼夢でなければ…間違いなく。そして俺も確かに首を跳ね飛ばされたのだから、アレは白昼夢などでは無い。だからこそ身体を損失し、杖という木偶に成り下がっているのだ。何が黄色い花だ。愚民どもは不満ばかり溜め込みやがって俺に反発、反旗を翻したのだ。なんてことはない、この男は何を考えているんだか知らないが、レシ王女のことは騙すつもりの子だが、この愚民を虐殺したのが己だというのを、隠すつもりの子だ。たしかに王女の協力を得なければ計画は成功しないが…：…ハッハ、面倒くさい話だ。こういうのは王女を無理矢理に丸め込んでしまえば話が早いのに。だいたいにして支配というのはそういうことだし、権力というのは支配を円滑に行うために存在するのだ。ていうか、王女に妖術を使えばそれでいいだろうが。早いだろうが。

「王女、申し訳ありません。国民たちは毒にかかっておりました。全員の闘争本能を押さえ込むには、八つ足という魔術で彼らを石像にし、動けなくするほかありませんでした。王女の御身の一部である彼らにこのような仕打ちをしたこと、申し訳なく思いますが、緊急の事態であったことを了承していただきたく願います」

トン大臣の不満など察することも無く、預言者ドールは話を進める。

レシ王女は悲しげな瞳のまま、預言者ドールに尋ねる。

「元に戻すことは出来ないのですか。その、闘争本能つてのに、とりつかれてしまったわけなのでしょう？私が蜜を嚙ってよくわからなくなっただのと同じように、彼らもおかしくなってしまったのなら、治すということは出来ないのでしょうか、どうなのでしょうか、私

は治して欲しいです民衆を。なぜなら私は王女なんです。今までたいたことはしてきませんでした。父上と母上がない今、私が本当はみなさんと共に頑張っていたかなければいけなかったのは、事実ですもの。今更ですけれど、ですが、しかし、石になったままでは可哀想です。朽ち果ててしまうのでしょうか？」

「私の手で作った輪から見える景色の中では、雨は降りません。石像が朽ち果てることはありません。ですが、石像になっていては彼らも年齢を重ねていきます。彼らの命が老衰で消える前に、それまでに、闘争本能を何とかせねば、彼らは石像のまま一生を過ごすしかありません。闘争本能に目覚めた彼らに出来ることは所詮、破壊だけですから」

「いったい、どうすれば良いのでしょうか」

「簡単なことです」

「簡単なのですか？」

「そうです」

「どうして簡単などと言えるのですか」

「それは、私が預言者だからです」

「……さつきは妖術使いだった」

「妖術使い兼、預言者……いえ、預言者兼、妖術使いです。本業は、預言者のほうです」

そうして預言者ドールは、先ほどまで手の甲を天に向けて輪っかを作っていたのを、今度は地に向けた。まるで両手で『世の中銭ですわ』と表現する手草にも見えて変だったが、預言者ドールはいたって真剣らしい。彼は、「さあ、覗いてみてください」と王女に言った。「覗くんですか？」「ええ、ここを見ればこの先どうすれば良いのかがわかる筈です」「わかりました」

覗き込む。

レシ王女が覗き込んだ手作りの輪っかの先、そこにあったのは。遙か昔に見た姿だった。

特徴的な鼻先は瘤のように腫れ上がっていて真っ赤。顎は鼻と対

照的で、尖っていて細い。福耳で、笑うと耳が赤くなるのをよく覚えていた。普段は帽子を被っているからわからないが、実は帽子の中は天辺がクレーターになっている。よく小さいころ、その頭を手の平で叩いて困らせたのを覚えている。

見間違えようもない、輪っかの先に映っていたのは、王だった。幼い頃に国を発ちいまだ帰ってきていない王。

驚きのあまりレシ王女は退いた。退きながら広場を見た。臙に照らされるタイルを見た。そこに王の姿はもちろん無い。

「どうということなんでしょう」

目を丸くしながら尋ねる彼女に、預言者ドールは答える。

「どうもこうも、見えたことが全てです。何が見えたのか、教えてください。私にはわかりません」

「父上が見えました」

「あなたのお父上というと、王様でしょうか。どこにいるのでしょうか、お城の中でしょうか？」

「いえ、十何年前に国を発ち、それ以来は消息もつかめていません」

「ならば、彼がどこにいるのかわからないのですか？」

「はいわかりません。でも、広場に誰もいないはずなのに、あなたの手を通すと父上が見えたんです。昔と比べてとてもやつれてました。ですけどどうみたって、間違いなく、父でしたよね。見間違えようもないです、わかりやすい顔をしてるんです」

「娘である貴女が言うのなら間違いはないでしょう。で、私の預言の映像の中に彼が見えたということは、そう、彼がキーです。鍵です。彼に会うことさえ出来れば、国民たちの未来が切り開けるかもしれない」

「そうなんですか」

「？ 気が入っていませんね」

「いえ、ちよつと疲れたんです。いろいろと、突然で」

「ああ、そうですね。申し訳ありません。どこかでお休みしたほう

が良いのかもしれないね。しかし、急がなければいけません。何時国民たちを苦しめた黄色い花がこの国で再び咲かぬとも限りません。王女、私はこの国を一刻も早く立ち去ることをお薦めします」「たしかに、そうかもしれません」

それならば、とトン大臣が月明かりを見渡しながら、

「馬車を使いましょう。その中でなら、王女もお休みになれます」

王女は反対しなかった。頷いている。

残っている疑問はまた後々に解明する気でいた。

こうして王女は国を発った。突然の出来事。生活の崩壊。にも関わらず王女の顔は憂い気でもなかった。退屈から逃れることが出来るのが、きつと嬉しいのだろう。国民を救うという王女としての使命が、彼女を興奮させているのかもしれない。少なくとも、城の中で毎日花を育てるばかりだった彼女からすれば、外の世界は魅力溢れる玩具箱であるのには、違いはないかもしれない。だが、彼女は蜜を啜って妙になった人物だから、もしかしたら、使命感なんてのは実は感じていない可能性も、あった。

## 翡翠に生贄

象に踏まれたかのように落ち窪んでいる大地。その周辺を山脈が囲んでいる。囲まれているそこには緑が生い茂っていて、その緑に隠されるようにして住居。瓦屋根。木製の壁。錆びだらけで所々が茶色い巨大な煙筒が、中心に一つ。塔のように聳え立っている。その煙筒の周辺だけ緑が少なくなっていて、上空から見るとその周辺はドーナツ型に見える。

そのドーナツ型の近くで、日溜まりが、太陽の眩しげな光線が、優しく、葉のざわめきをくぐり抜けている。その下で佇んでいるのは、四人。男女丁度半々だった。転がっている四人、全員世代が違う様子だった。一人の男はまだ若い青年だったし、一人の女は老婆だった。もう一人の男は中年男性で、もう一人の女性は少女だった。そんなバラバラな四人が日溜まりで頭を突き合わせて、寝転がっている。

おかしなことは、寝転がっている彼らが拘束されていることだ。全員が、両手が土色の縄で縛られているのだ。手だけでは無い、足すらも縛られていて、彼らは芋虫状態といって差し支えがない。

普通の様子では、尋常の様子では、ないようだった。その拘束されて寝転がっている四人の周りを、多くの人間が囲んでいる。四人を囲っている人間たちは一人残らず両手を合わせていて、目をつぶっている。何かを祈っている様子に見えた。

一人の、代表らしき男が、祈りをしながら歩き、四人の間近に迫った。四人は気絶しているのか、その老人が近づいたことに何の反応も示さない。男は、何かお経らしきものを唱え始めた。

「慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壮呂草々家、転転天鬼喜草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、怪神貢食命草々家、慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壮呂草々家、転転

天鬼喜草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具  
天草々家、怪神貢食命草々家、慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壯  
呂草々家、転転天鬼喜草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々  
家、具愚天愚具天草々家、怪神貢食命草々家」

約、十分ほどであるうか。その男がお経らしきものを唱え終え  
ると、祈りをやめないまま数歩下がり、元の位置に戻った。すると、  
男の隣で祈っていた老婆、が男と同じように数歩前に出、祈りなが  
ら、同じようにお経らしきものを唱え始めた。それも十分ほどで終  
わった。

「慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壯呂草々家、転転天鬼喜草々家、  
命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、怪神  
貢食命草々家」

老婆が終わり元の位置に戻ると、続いて隣にいた男がお経。それ  
が終わるとその隣の女がお経。それが終わるとその隣の子供がお経。  
そういった風に儀式が長らく続く間に、塔のような煙筒が激しく  
煙を放出。害のありそうな黒色で、もくもくと風に吹かれ始める。  
その煙が激しくなるにつれて、その周辺で祈っている人間たち、村  
人らしき人々たちが反時計に回転を始めた。祈っていた手は隣同士  
の村人で繋ぎ合い、先ほどのお経らしきものを唱えながら反時計回  
り。

慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壯呂草々家、転転天鬼喜草  
々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、  
怪神貢食命草々家

お経に合わせて、山火事よりも猛々しい黒煙が、どんどん勢を増  
して空に昇り上がって行き、雲になった。真つ黒な雲が太陽と地面  
を断絶する膜になり、四人の芋虫に差し込んでいた日溜まりも、影  
に変わった。

四人のうちの一入、青年が目を覚ました。目を覚ました彼は途端  
に怒りと悲しみが混じった顔つきになり、すぐ泣き出してしまった。  
「ぶざけんなよ。やだよ。やめてくれよ」

泣きながら、叫び上げる。悲痛な顔だった。

しかし村人たちは全員お経を唱えるばかりで、青年の言っている言葉に耳は貸しているようだが、お経を途絶えさせることはなかった。回転をやめたりはしなかった。お経で少年の叫び声を聞かないようにしている様子でもあって、眉間に深い皺を刻んでいる顔が何人もいる。

「やめてくれよ、俺嫌だよ。やめてほしいよ、やめてくれよ。やめてくれよ」

身体を捻って彼はもがている。それこそ殺虫剤をかけられた芋虫のように、もがき苦しんでいる。幾重もの涙が頬を流れ落ちていた。そんな彼に構うこともなく、村人たちはお経を唱え、反時計回りを、続ける。青年の瞳から覗いた彼ら。それらは反時計に回っている帯で、一つ一つの肉体や顔形は、帯の模様でしか無いように見えた。『人間模様の付いた帯』という怪物が、俺たち四人の人間を貪り尽くそうとしているようにしか、錯覚のせい、か、気絶をしていたせいか、そのようにしか、みえない。元は同じ民族、仲間だったにも関わらず、もはや彼らとは別存在だ。別存在に、されてしまった。青年はパニックになり、また何かを口走った。そこで、青年の騒がしさのせい、か、四人の内のもう一人、老婆が目覚めました。

「なにをそんなに騒いでいるんじゃえ」

老婆は物静かだった。彼女も両手両足を縛られているにも関わらず、青年とは違って荒げる様子はないようだった。

「いやだ、俺は、死にたくない。まだ、死にたくない。やめてくれ、この縄を誰か外してくれ。誰でもいい！誰でもいいから」

騒がしい青年の慟哭に老婆は嫌悪を感じたらしく、  
「若い。若いというのを利用してはしゃぐのはよしなさい。どうせ死ぬのだから、男子らしく、黙って死ぬが良い」

不機嫌な声音で叱る。「なんだと」そこで初めて青年は老婆に気が付く。青年は泣きながら、身体をひねりながら、老婆に顔を向けた。

「ばあさんは、あんたはどうせ、後何年かで死ぬから、そんなに冷静でいられるんだ！俺はな。俺は生きていたいよ！普通の、周りのほかのやつらと同じように生きていたかったに決まってるだろ！ばあさん、あんたはいいよな！もう人生満喫したもんな。俺はな、まだ何もわかっていないんだ、知らないことだらけなんだよ！そんな俺の気持ちが悪ろにされて今ここでぶっ殺されるなんて、こんなのはおかしい」

老婆は青年の言うことはもっともだ、と思いながらも、しかしそれを正しいと教えれば青年の断末魔の叫びはやかましいことになるだろう、と想像して「だがね、誰かが犠牲にならなきゃ、他の人間が死ぬことになるんだ。あんたが辛いのはわかる。だけれど、どうしようもない。どうしようもないんだから、せめて最期は男らしく振舞いな。そうすれば村人たちもあんたの死に際に感動して、永遠にあんたを勇敢な男として記憶に留めてくれるだろうよ」と、なんとか青年を説得しようとしたが、青年の怒りは凄まじく激しかった。「何知った風な口をかましてんだよ。…くそばあ。俺はあんたみたいなのが一番うざいと思う。なんもわかつちやいねえだろ、ふざけやがって。死んだ後のことなんて俺は知れないんだよ。俺が死んだ後に俺が勇敢だつて言われたつて、俺は何にも嬉しくなんかいない。何が感動だよこら。俺は今気が立ってるから、そういう一々なことにも突つかかるんだぜ、面倒くさいだろばあさん、いや、ばあ。ばあ。ばあ。ばあ！黙ってるよ！」

火に油を注いでしまったと、老婆はもごもごして閉口した。

「残り一キロで、隣国の領土に進入することになりますな。王女、目をお覚ましく下さい」

トン大臣の呼び声をうつらうつらに聞きながらレシ王女は目を覚めました。あまり気持ち良くないクッションから顔を上げると、頭だけが人間で身体が杖の、奇妙な豚大臣が髭を揺らしながらこっちを見ていた。



トン大臣の顔のあちこちに痣が付いている。馬車が揺れるせいで、トン大臣は顔面のあちこちを床やらにぶつけてしまうから、酷いあり様になるのだった。国を出てから二日経ったが、トン大臣はこれこれ二十回以上は床に顔を打ち付けている。倒したままにしておけば良いのかもしれないが、それはそれで頭が大きいせいで床をコロコロ転がってしまうので、危険なのだった。

「王女、ご機嫌はいかがですか」

馬車の先頭で、預言者ドールが馬に鞭を打ちながら、声を掛けてくる。レシ王女は「まあまあです」と答えた後、まだ上手く開かない両眼をこしこしと擦り、「隣国には何かおいしいモノがあるのでしようかね、教えなさい大臣」と何故かきつめに問う。

きつさの理由の不明に戸惑いながら、「隣国では農業が盛んですから。そこで食べる野菜はどれもこれも潤いがあつて美味です。それと独特な特産品がありまして、それは食べることは出来ないのですが……」

「黙って」「え」

話しかけたくせに、トン大臣の言葉を遮る。

「おいしいモノというのは、どういうことだと思ってる？」

「は？」

「いや、どうなのかなって」

「また、そういった質問ですか。そういうのは止めていただかないと……」

「気になるから」

追求するかのように意味がわからない問いの答えを求めるレシ王女。時々こういった質問をしてくる王女にはつくづく沈鬱にさせられる。

「おいしいというのは、食べ物を口にした時に広がる幸福感のことでしょう。高級な肉や魚、珍味な品、滅多に食べられないものを食べる時に感じるような幸福感。そういうものを感じさせてくれる食べ物、おいしいモノということでしょう。それ以外に何がありません」

しょうか」

意味のわからない質問に対しては適当に答えを返すことを心していた。だから深く考えずに適当な考えをトン大臣は話す。すると大抵、どんな答えでもレシ王女は満足する。

少し考えたような顔をした後、

「ああ、そう」

この一言が返って来るのが大抵だ。トン大臣としては、こういった態度を王女が他国の人間に振舞うのは、困る。だがそういった困ることをよくしでかすのがレシ王女だった。外交の席でもレシ王女は時たま「ああ、そう」を発する。当然場は固まる。まあ、国が滅びた今、トン大臣がそういった心配をする必要も、もはや無くなっただけだ。

車輪が石にでも乗ったのだろうか、馬車はグラリと揺れた。

「痛ッ！」トン大臣はバランスを取ろうとしたが、また車内を転がった。レシ王女は「ああ、そう」と言った後にいつもする、何かぶつきらばうな表情のまま、しかしふらふら立ち上がり、トン大臣の頭部を古ぼけたクッションに置いてあげた。「すみません、王女」。

「はいはい」。王女は上の空だった。

預言者ドールが先頭から、馬の手綱を握り締めながら、背後に声をかける。

「にしてもトン大臣。他国の領土に進入するにあたって、問題は多々あると思うのですが、それはどうやって解決すれば良いんでしょうね？」

トン大臣はクッションに顔をうずめながら、すぐに答える。

「それに関しては問題ない。今から訪れる国は、そういった面で非常にオープンというか、国境を厳しく取り締まる必要が無い」

「それは不思議ですね。というか珍しい」

「うむ。非常に、独特な国だ。まあ、着けば、どんな国かはわかるだろう」

「少し説明してくれませんか。私、あまり情報の無い所に行くのは

好みじゃないのです」

預言者ドールは不安気な口ぶりだった。ただ預言者ドールの性格から言つて、不安など実際はまったく感じてなどいないのだろうな、演技なのだろうなしたたかな奴、とトン大臣は想像した。すると彼を困らせてやりたい気持ちの方が浮かび上がってくる。

「申し訳ないが、説明は後にさせてくれ。ずっと顔を床に打ち付けたりして、ろくに寝てないんだ。大臣の私としてはこんな情けない状態になっている以上、向こうの人間と面と向かい合う時に眠たげな様子ではナメラレテしまふ。悪いが眠らせてくれ」

実際に眠くて仕方が無かった。だが、預言者ドールはトン大臣が思うよりもしつこい男だった。

「ダメです。私に情報を教えてから眠っていただかなければ、あなたの顔を私が殴ります。痛くなるように痣になっているところをさらに殴りつけます。ほら、説明をしてください」

「おい！なんてことを言う奴だ、レシ王女のような高貴なお方がいる前でそのような野蛮な行為は許されんぞ、たとえ国の救世主といえどもだな…王女、なんとか言つてやってください」

トン大臣はレシ王女に懇願したが、しかし彼女はトン大臣の顔を一瞥してから、

「ああ、そう」

「まだ彼女は上の空だった。

「ほら説明なさい」

預言者ドールは片腕の拳を振り上げながら、脅迫めいた語調で説明を求めてくる。トン大臣の敗北だった。

結局トン大臣は眠ることも出来ないまま、だるい説明をすることになる。

説明している途中にも何度も顔を床に打ち付けていた。その様は、上の空のレシ王女から見るととてもなく憐れだった。

慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壮呂草々家、転転天鬼喜

草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、怪神貢食命草々家

儀式は進んでいる。村人は回っている。煙突は黒煙を、けたたましく吐き出す。空が黒に染まり、月のない夜のような静けさ。

青年は声を枯らしてしまったのか、先程の様な威勢はもはや失われておりくたばっている。老婆も静かに目を閉じていたし、他の二人も気絶したまま横たわっている。

お経のぼそぼそと呟くような、一種気味の悪い声ばかりが響いていて、村は奇妙奇天烈な雰囲気、空気を醸し出すことを憚らない。人々はみなして同じような顔をしていて、同じような動き。先程よりも一つの帯としての結束を深めていて、彼らは一人一人、人間というよりは、一つの物体だった。細長い、おんぼろな一本の細長い帯だった。その細長い帯の絶え間ない努力、反時計回り。これが功を成したのだろうか、天に変化が現われた。

儀式が始まって二、三時間が経過したところだろうか。空に張り付いた黒い膜、黒雲が、雫をこぼし始めた。

真珠のような、丸い、そして色は翡翠。黒いカーテンの空から、流星のように輝きながら幾つも零れ落ち始めた。

とても綺麗で、美しかった。小ぶりで、不思議で、神秘的だった。雹のようにストンと飛び降りてくる訳では無く、どちらかというところのように零れ落ちる。落ちるまでは粉のように空気の中で右往左往に、蛭が飛び回っている風にも見えるけれど、地面についたその蛭は固まっていて、ビーズに姿形を変えている。そのビーズが大きくなって、膨れ上がる。そうすると宝石の様にしっかりとした形になる。一センチほどの、翡翠の宝石。

預言者ドールと、杖になった大臣と、レシ王女と、おんぼろ布を全身に巻いたおばさん。その四人が村のはずれの、高いところから、蛭のような翡翠が空を漂い地面に落ちて宝石になる様を眺めていた。おんぼろ布のおばさんはうっとりしていて、残りの三人はそれぞれ茫然としたような、阿呆な表情をしていた。

おんぼろ布のおばさんが言う。

「すごいでそー、これ。あれ全部宝石になんのよー。隠れて取っちゃったり出来ないように、みんな手え繫いでんの。わんたしは儀式に参加しなかったからあれだったけれども、参加した人はうんらやましいねー。目の前で翡翠の蛭が漂ってるのを見るのは、とつても気持ちいいことだかねよ」

おんぼろ布のおばさんは、うつとりしている。

「いやー、私も名産品としてあの翡翠の宝石をいただいたことは何度もあります、儀式を見るのはこれが初めてですなあ」

トン大臣が感慨深そうにしながら述べる。預言者ドールが続く。

「たしかに、蛭みたいですよ。あの宝石を他国に売ること、国は生計を立てているのだと聞きましたが、それ程に売れるものなのですか」

先ほど仕入れたばかりの知識を使っておんぼろ布おばさんに話す。

おんぼろ布のおばさんは答える。

「わんたしはそういうのに疎い女だから、知らないさ。だけど、そりゃああれが無かったらみんな飢えて死んでしまっただろうねえ。

なにせ、何も取れないところなんだ、ここは昔からさ。山や森に囲まれているけれど、囲まれているだけなんだ。全て、とられっちな、凶暴なのに」

凶暴？レシ王女は少し耳を疑った。

「そんな危険なのがいるのですか？」

預言者ドールはトン大臣から多少聞いてはいたが、尋ねる。するとおんぼろ布のおばさんは、答える。

「いるさあ、危険な、凶暴なのがね。この周辺の森や山を支配していて、時々村にも降りて来るんだあよ。人間たちが眠っている夜中に訪れるんだ。訪れるだけで特に何もするでもないんだが、徘徊しているのさあ。普段は山や森に、そんなのが何匹もいる。だから森や山に、人は普通近寄らないんだけどよ。他国の人を訪れたり私たちがどっかに行く用の道には妖術が敷かれているから、あいつらも

おちおち出張つてはこれないけれどねえ、そこだけだ。そこ以外のところには妖術を敷ききることは、広すぎて出来ない。だから森や山はあいつらの縄張りだ…あんなヤツラ消えちまえばいいんだけど、消すことも出来ないんだよねえ」

忌々しそうにしながら、『凶暴やヤツ』について語るおんぼろ布のおばさんの額は、黒ずんだ皺だった。

「ここは大丈夫なんですか」

預言者ドールが辺りを見回す。古びた柵が幾つか張り巡らされていて、枯れた雑草、虫食いにされている赤い果物。どことなく陰鬱な雰囲気がつつすらしている所だが、凶暴なヤツらしき影は見当たらない。だが、今は暗い。どこに潜んでいるとも知れない。

おんぼろ布のおばさんは冷笑して「ここは大丈夫さ。私がいればね」と、首をかしげさせることを言った。

四人の見下ろす光景では、いまだ大勢の人間が反時計回りに回っている。煙突は黒い煙を吐き出し、空で黒い膜になる。黒い膜から翡翠の蛍が降り注ぎ、地面で緑の輝きとなって転がっている。

「さて、じゃあわんたしが案内するからさあ。こつちおいでよ、儀式ももうすぐ終わるし。トン大臣が杖になつたなんて長老に話したら、きつと驚いて腰い折つちゃうかんもねえ」

おんぼろ布のおばさんが、歩き始めた。歩いている彼女は、何だか萎れた花だった。歩く度に、一歩一歩を踏み出す度に、何か燐粉らしきものを吐き出しているような気が、預言者ドールにはした。よたよたとしているからそう見えるのか、それとも何かしらの理由があるのだろうか。預言者ドールの見たところでは、彼女は妖術使いでは無い。なぜなら、同じ穴の貉としての匂いがしない。

三人はおんぼろ布のおばさんに続いて歩いているわけだが、この村の不気味さを、歩くたびに実感させられる。なんだか湿っている。ムカデが闊歩していそうな、靴が沈没する湿った土。鼻で吸い込む空気もなにやら鼻腔をくすぐってくる。皮膚と着ている服が密着しているような気分にもさせられるし、髪の毛も曲がりくねるかのよ

うだった。

余所者の三人は慣れない湿りのせいで、先を歩くおんぼろ布のおばさん程には上手に進めない。それだと言うのにおんぼろ布のおばさんは三人のことなど気にも止めないのか、後ろを振り返りもせず、湿った地面を何の障害も無いようにして行ってしまふ。

「ちよつと、あなた！」

レシ王女に握ってもらいながら進んでいるトン大臣がイラだちから叫ぶ。

おんぼろ布のおばさんは止まらない。そのまま、行ってしまった。遠くなつてやがて消えた。

トン大臣は顔をしかめる。

「なんだあれは。なんで私たちを置いていく。案内役だろう、あのおばさんは……あ、王女、気をつけて！」

トン大臣は叫んだが遅く、レシ王女は土のぬかるみに足を取られて、すつ転んでしまった。握られているトン大臣も当然、顔面からすつ転んだ。

土と満遍なく顔面で触れ合ってから、勢い良く首を上げてトン大臣は嘆いた風に咆哮する。

レシ王女もせっかくのお召し物がすっかり汚れてしまった。「ああ」とお気に入りのポンチョが土まみれになったのを感じて、落胆。急いで立ち上がるうとしたが、そこでおかしなことに、立ち上がれなかった。

「ん」

足から立ち上がるうとした。しかし、

「ん」

立ち上がれない。何かに、土に足を取られているのかと思つたが、違う感覚だった。足首を握られている。

慌てて視線を足首に動かした。その瞬間に彼女も叫び上げた。唸り上げるように叫び上げた。

三角形の何かが、足首を掴んでいた。

三角形の何かとは、何か？レシ王女は咄嗟に思ってから、理解出来ないと熱くなった。

で、男の助けを求めた。

「預言者ドールさん！預言者ドールさん！ヘルプ、ヘルプミー！」

少し前方を歩いていた預言者ドールが振り返り、しばし倒れているレシ王女を眺めるように見た。彼は暗がり眼をこらすような様子をした後、

「…なんですか、それ」

呆気にとられたような表情になって、立ち尽くした。

「見てないで助けてくださいよ、動けないんですよ」

杖のトン大臣は土に埋まったまま、まだ咆哮して使い物にならないみたいだった。預言者ドールは土に手間取りながらレシ王女の元に戻り始める。彼女の足首を、いまだ三角形の何かが掴み取っている。

レシ王女はびくびく脅えながらも、しかしもう一度目線を足首に戻して、その三角形の何かの正体を暴こうとした。得てして、正体不明なモノの正体を暴くと、少しは恐怖感が薄れる。王女はそれを狙った。

しかし狙いは外れた。レシ王女は、ああ、なんだろう、ん、ん、ん、頭に疑問符。余計にその三角形の何かの正体が不明になった。

正体が不明になっても当然の代物だった。その三角形の何かは、謎だらけの物質に思えた。どう謎かと言えば、まずは生物なのか植物なのか鉱物なのかそれともそのどれらでもないのか、ということが謎で、胴体は鉱物っぽい、ガチガチした見た目で鋼鉄の三角形といった様子なのだけでも、その三角形から伸びている手足はどう見ても植物の茎にしか見えない。で、三角形の胴体の上部に二つ、耳らしきものがくっ付いているのだが、これが犬だとか猫だとかにありそうな触ると気持ち良さそうなあれで、どうみても動物のそれとしか思えない。

それらから構成された三角形の何か、とは、一体、何だったか。



レシ王女は昔に城の書庫でかつて見た挿絵を一瞬思い浮かべたが、その名前は思い出せない。こういう時に王女は、かつての明瞭で才気溢れた頭脳が失われたことを一瞬嘆きたくなる。だが、嘆いても戻って来ないのが空しい。

「シカツケイ」

三角形の何かが喋った。オペラ歌手のような美声だった。

それに呼応するかのように別の地面が盛り上がり、今度は四角形の何かが飛び出した。

「ゴカツケイ」

これもオペラ歌手のような美声だった。三人が驚き戸惑っている間も入れず、別の地面から今度は五角形の何かが飛び出た。

「ロツカツケイ」

やはりオペラ歌手のような美声だった。三人はもはやどうしようも無かったが、別の地面から出て来たのはやはり、六角形だった。

「ナナカツケイ」

「ハチカツケイ」

「キュウカツケイ」

「ジュツカツケイ」

最終的に十角形の何かまでが地表に噴火の勢いで飛び出てきた。

そして三人は、その角形集団に、見事に三百六十度、囲まれてしまった。全員が鉱物のような身体、植物のような手足、動物のような両耳、を携えている。

「なんなんですかこれ」

レシ王女は慌てふためいているが、トン大臣も慌てふためいていた。

「これが凶暴な奴なんじゃないのか。預言者ドール、こういう時のための妖術なんじゃないのか！」

木偶のトン大臣は成す術も無いので、さっさと預言者ドールに助けを求めた。呼びかけられた預言者ドールは少しつまらなさそうな表情をしてから、「あなたに命令されるとやる気がなくなってますま

す」などと愚痴り始めた。トン大臣は思わず「えええ」と弱音を漏らした。

そうこうしている内に角形集団はじりじりと三人ににじり寄ってくる。それぞれが何だかよくわからない言葉をオペラ歌手みたいな感じで口走っていたが、どれもこれも聞き取ることが出来ない、意味不明な言葉だった。だが、それだけに不気味でもあった。理解出来ない物体、八体に囲まれて、耳をつんざく高音を鳴らされる状況というのは、奇怪じみたホラーだ。

「シカツケイー！」「ゴカツケイー！」「ロツカツケイー！」「ナカツケイー！」「ハチカツケイー！」「キユウカツケイー！」「ジユツカツケイー！」

気配。有害な行為をされそうな気配。八体全員が同時に、呼応し合うかのような轟き。

八体それぞれの頭上に、紫色のボール。丸みを帯びた、波動らしきものが錬成されて行く。禍々しい気配を持っている。触れれば只では済まないのが目に見えていた。レシ王女は「やばいよこれ」と叫びだし、トン大臣は「預言者ドール！」と助けをすがり求めて彼を見る。すると、預言者ドールが奇妙な妖術っぽいポーズを取っていることに気が付いた。一言で言えば、セクシーポーズだった、という物凄く格好が悪いが、しかし妙に色気があってダサいはダサイでも少し芸術的要素を含んでいそうなポーズにも、無理をすれば見えた。

ポーズのあまりの衝撃にトン大臣が呆気に取られている間に、紫色のボールの波動は体積を増し、サッカーボール程の巨大さになっていた。八体全員がシンクロして「ヨイシヨイ」という掛け声。三人に向かって紫のサッカーボール波動が発射された、が、預言者ドールは並の妖術使いでは無い。

預言者ドールは舞踊するかのように一回転、ぐるりとその場で回る。すると何ということだろう、全てのサッカーボールが漁師の網に捕らえられるかのように、次々にかきとられていくではないか。



めただけに。

八体が動かなくなつたせいだろう、静かになつた。

あまりに静かで、レシ王女の耳で耳鳴りがやかましい程だった。

「いやあ、妖しい男が身近にいて。まったく、助かったというものだよ」

大層なことだ、と畏怖と尊敬が入り混じつた顔つきで預言者ドールを睨み付けるトン大臣。預言者ドールはポーズを解いていて、先ほどまでのつまらなさそうなとは打って変わって、とてもすっきりしていた。口でも、

「あー、すつきりすつきり」

などと言つてすつきりしている。王女レシは、「すごいんですねー、預言者ドールさんつてば」などと言つて、妖術の凄みに驚いてみせた。

「こいつらは一体、なんなのだろうか。妖術使いの預言者ドールなら、わかるんじゃないのか？」

トン大臣が尋ねるが預言者ドールは首をかしげた。

「妖術と言つても様々ありますが、さっきの紫の光は妖術独特の色彩を帯びていました。…謎ですね」

「謎だと？」

「ええ。ボ口布のおばさんが凶暴な奴らと言つていたのがこいつらなのかはわかりませんが。…それがこいつらなのだとしたら、こいつらは野生の代物ではありませんよ」

「誰かが作つたつていつのか？」

「見た目からいつてキメラ。混合物でしょう。妖術使いならばそういう事をするのは可能ですが…」

「妖術使いか。…貴様がやつたんじゃないのか？」

半笑いの、皮肉めいた言い方。

「そうかもしれないですね。杖だけのおじさん」

預言者ドールも、半笑いで返した。

生贄の四人が、翡翠の洪水に埋もれて行く。青年は喚いていたし、老婆は苦しそうに呻いていた。残りの二人は相変わらず気絶している。翡翠の蛍たちの降り注ぎは四人に最も多く降り注いでいる。だから彼らは埋まる。そして最終的には四人全員も、同じように翡翠の宝石へと身を変える。変えて一生、誰かの宝石として利用されるし、自我だつて消え失せてしまう。それが生贄になるということなのだ。そういった事実を知らない者はこの村には誰一人としていないのだから、青年が喚くのは当然だし、老婆が苦しそうに呻くのも当たり前のことである。気絶している残りの二人は幸せかもしれない。気絶したまま死ぬるのならば、消える直前に苦しくならず済むのだから幸せだ。意識がある二人よりは。周辺でくるくる回っている村人よりは不幸だ。

「ひっ」

まず、青年は、足に激痛を感じた。太い針を何十本も刺されるような痛みだった。初めは右足、次は左足だった。その痛みが徐々に尻、腰、胸、腕、首といった風に、せり上がって来る。首にせり上がって来る頃には麻痺してしまったのか、痛みを通り越して宙に浮かび上がる感じに変化した。顔面、頭、視界までが翡翠に染められていき、それが青年の最期になった。老婆もそのようにして最期を迎えた。残りの二人も同様。

四人は煙突の間近にある巨木の、木陰辺りに横たわっていたが、木の幹全体を覆い尽くすほどにまで、翡翠は積もって、膨れ上がっていた。その巨木周辺のみならず、煙突の辺り一帯、村人たちが帯になって踊り回っている所まで、翡翠の宝石で満たされて、まるで円形のプールだった。緑の輝きがスゴイことになっている。

慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壮呂草々家、転転天鬼喜草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆……

お経が止んだ。村人たちは帯になることも止め、それぞれ繋ぎ合っていた両手を離し合って、一人一人、人間になった。疲労のせい、その場で地面にへたり込む者もいれば、興奮しているのか、近

くの人間に身振り手振りを加えて熱っぽく語っている者もいた。だが、大概は疲労困憊のようだ。

「皆、儀式は成功した。今宵、四人の我らが同志が、我らのために儚い命を捧げてくれた。その慈悲、自己犠牲の精神に感謝の念を表明しよう。さあ、疲れているだろうが今一度立ち上がり、眼を閉じよう。眼を閉じて、かつての同志の姿を思い浮かべようではないか。さすれば、彼らは翡翠の輝きとなって我らを永遠に見守り、邪悪を打ち払ってくれるだろうさ」

まだ若い村長の、一声。それに導かれて膝をついていた村人たちは、気だるそうにしている者も数人いたが、しかし立ち上がり、それぞれ神妙そうに眼を閉じた。先ほどまで洪水と言わんばかりに空から舞い降りていた翡翠の蛍たちは、今や穏やかになっている。数えるほどの蛍たちが、ゆっくりと、広大な暗闇の隙間を縫って、ゆらゆらと落ちていく。地面に落ちると、小さな、米粒みたいな塊に変わっている。

煙突はもはや黒煙を吐き出すことも無く、それゆえか、空を包んでいた黒い膜は剥がれて行く。ゆっくりと暁が天から差し込んでくる。丁度夕方なのだろう、燈色の夕焼けが村人たちを暖かな色に変えていく。

暁に照らされる翡翠は、キラキラと瞬いて、煌いていた。空から差し込む燈を弾いたり吸い込んだりして、煌いた。

村人たちは何人だっている。少なくとも百人以上はいる。そんな人たち全員が黙祷をして、瞑想をして、生贄にした四人に対して謝罪している。あるいは、謝罪したつもりになって、それで清算している。生贄は、儀式は、村人たちにとって日常だし、当たり前で必要不可欠だ。翡翠の宝石を売りさばくから村人たち全員は生きていけるし、それが無かったら村に生きる全員が滅んでしまうのだとしたら、たしかに生贄は必要だ。だから、彼ら全員は時たま仕方無いと言った思いも含めて瞑想をする。

やがて、夕焼けも沈んだ。

「すごいものでしたなー、さっきの光景は。いや、村に入る前、高い所から見えたのですよ。いやー、今まで何度もこの村の翡翠は貿易で戴いてきましたが、生産されるのを見るのはこれが初体験ですよ。いやー、ほんと、綺麗でしたなー。あれだけ綺麗ならば、そりゃどこの国だつて欲しがりますものな。いやー、女というのはヒカリモノが好きですからなあ。需要は何処にだつてありますものな。まあ、そりゃどこの国にも女つてのはいるものなのでしょうから、いやー、お羨ましい。さぞ奥方も光り輝いていることなのでしょうなー翡翠に。そうでしょうしょうでしょう。いやー、このお屋敷も立派なものです。和風建築つていうんですか、こういうの？いやー、雅ですなあ。その、掛け軸、つていうんですか？後でじっくり見せてもらつても？いやー、素晴らしい。いやー、ほんとに」

トン大臣のお世辞が大量に発されている。村の村長のお屋敷の一室、畳やら障子やらの和室で轟いて、騒がしくなっている。トン大臣は杖のわりに、声がやけにでかい。

彼の次々に放たれるお世辞に、筋骨隆々の、和服を着込んだ、まだ若い村長は、精悍な細長い顔つきをしかめたり緩めたりしながら、物静かな感じで応対していて、瞳が鹿だった。きつと彼はクールな性格の村長なのだろう。「すごかったですなー」「たいしたことはありませんよ」「いえいえ、すごいですよ」「そんなに褒められるとむず痒い」「ははは。いやはや、それにしてもすごかった」

謙遜する村長。お世辞を滔々とトン大臣が述べるのは村に泊めてもらうためだ。

「村長。お願いがあるのですが」「はい、何でしょう」「実はいろいろと複雑な事情があります、国が大変でして」「ああ、そうですね。確かに、トン大臣もそのような御姿ですな」「そうですね」「で、それがどうしたのですか？」「いや、その、それです。我々ずっと馬車で移動するばかりだったものですから、近頃、思い出してしまうのです」「思い出す？」「はい」「何をで

すか」「ふかふかなベッドの優しい心地です」「ああ」「おわかりになりますか」「そりゃ、ベッドは気持ち良いものですよね」「そうですね」「私もベッドには気を使っております。腰をやらねないために」「そうですね、それで、それがどうしたのですか」「いや、ですから、ベッドの心地を思い出させてもらいたいのです」「ああ。触ります?」「そういうことではなくて、触るだけではなくて」「どういうことですか?」「いや、泊めてもらいたいのです、どこかに」「ああ、ああ。そういうことですか。お安い御用ですよ。初めからそう言ってくださればよいのに」「ありがとうございます」「杖というのは、どこで寝るのでしょうか。玄関?」「いえ、頭は人間なのです」「なるほど。失礼を申し上げます」

こうして気前の良い村長のおかげで、三人は村の誰も使っていない空き家。というか、本日、生贄に捧げられた老婆の自宅。そこに泊めてもらえることになった。

「あの、何か着替えをいただいてもよろしいでしょうか」

相変わらず遠慮という言葉を知らない王女が、泥の付いたポンチヨを指差して替えの支度を欲求する。厚かましいが、しかし村長は微笑んでいる。「王女に満足していただけるお召し物をご用意しましょう」「気の利いた調子で立ち上がり、部屋の外から、王女が着ても申し分無さそうな、藍色を主にした、やはり翡翠も所々に模様として散りばめられている、見るからに高貴で、美しい人が着ればさらに、そうで無い人だとしても美しく見せてしまおう一品を持ち込んできた。和服。着物だった。

別室で村長の付き人らしき人たちに手伝ってもらいながら複雑な着付けをこなしたレシ王女が三人のいる部屋に舞い戻ってきた時、三人は自然と息を呑むのを抑えることが出来なかった。

レシ王女はそれに気が付いたのか嬉しそうに微笑んでから、

「何だかよくわからないんですけど、ありがたいです」

と、よくわからない礼を述べた。



所変わって、妙な所。

澄んだ音が鳴った。金属できて床に金属を叩きつけた時に生じるような音に聞こえる。それが、何重にもエコーがかって、その妙な所に波紋を広げていった。その広がりを考えれば、この妙な所が広い空間であることがわかる。だが、広いかどうかを、視覚で捉えることは難しいだろう。妙な所はとても薄暗い。靄がかかっているようにも思える。つまり、黒い霧が、妙な所に明かりが充滿するのを防いでいるのだ。だから、妙な所は、一部を除いては、完全に黒い霧に包まれてしまっている。だが、残りの、一部。つまり、明かりがある程度充滿している空間。そこでは黒い霧のほとんどが失われている。澄んだ金属音は、その一部分から鳴った。あるいは、鳴らされた。鳴らされた可能性は十分にあり得る。そこに、人影らしきものが一つ、見受けられるからだ。その人影は、ビロード張りの肘掛け椅子に腰を下ろしてグダっとなっている。贅沢に寄りかかりながら、右手に持っている針らしき、先端が尖っているもの。それを何処かに投げつける。どうやら、投げつけられたそれが、金属音を鳴らしているのだろうか。澄んだ音がまたもや妙な所に鳴り響いた。定期的に澄んだ金属音は鳴るから、きっと、定期的に尖っているものは投げつけられているのだろう。

投げているのは女だ。まだ若く見える。浅黒い肌をしていて、全身を紫のローブで包み込んでいる。ローブの中身もきつと薄黒いのだろうが、それは推測することしか出来ない。ローブの裾はとても長くて、女は妖艶な雰囲気はかなり醸し出しているにも関わらず、スリットが入っているわけでも無い程に露出が少ない。

妙な所で、また金属音が鳴る。澄んでいる音だ。それがどれくらいだろう。長いこと、定期的に鳴り続けた。

だが、女がビロード張りの肘掛け椅子から立ち上がると同時に、その定期的な音が止んだ。女は、妙な所で数歩前進した。そして、金属音を鳴らしていた尖ったものを一本ずつ、ゆっくりと抜き取り始めた。

だが、彼女はダーツをしていたわけでは無い。彼女の目的は、尖ったものを抜き取った箇所から飛び出てくる、ヌルヌルとした妙なモノだった。

妙な所で妙なモノ。まったく持って妖しい。

彼女はどこから茶色の瓶を取り出し、その茶色の瓶でヌルヌルをすくい取っていった。何回かすくい取られると、茶色の瓶はすぐに一杯になった。女は茶色の瓶を右手に携えたまま、妙な所を数歩移動し、今度は丸々とした、円盤らしきものに近づいた。そして、その円盤にタラタラタラタラ、ヌルヌルを茶色の瓶から流し込んだのだった。やがて、円盤の表面には膜みたいなのが張られ、そこに人間の顔が映り込んだ。

彼女はそれを、その顔を、見つめ続けた。両肘を円盤の端っこについて、顎を手の上に乗つける。

うつとり。その間、とても長かった。

虫の鳴き声がかましい。夜に運ばれながら風に運ばれながら、音が飛び回って、和風建築に辿り着く。老婆の家は、臭かった。臭かった。臭かった。と、三回言ってもまだ足りない程に鼻をつんざいてくるこの匂いの原因は不明なのだろうか、と案内された三人は親切でクールな長老に目で訴えるけれども、村長は鹿のままだった。「なんなんでしょうねこれ」レシ王女はお客の立場であるにも関わらず遠慮が欠けている。トン大臣の心臓が思わず鳴るが、村長は「なんなんでしょうかね」とはにかむ。快い同調だった。

コンクリの三和土。そこを抜けると簡素な一室。結構、広い。畳みがそれなりにあって。古びていない。汚れが無くて、置いてある

物質の数たちも少数になっている。生活感の無い疑似体験スペースのような、どこかの小さな展示場のサンプルとして置かれていそうな、つまり、広いプレハブ小屋、だった。広さが圧迫してくる。広さがやけに、人を締め付ける。そんな風な部屋だった。

「人が住んでいたんですか？」

レシ王女は傍らにあった木目のデザインがされたゴミ箱の中身を覗きながら言葉を出している。ゴミ箱の中には生活の形跡。丸まったティッシュ、みかんの皮、かつて和菓子が入っていたような袋。

村長は、何だか面白い程に目をパチパチさせてから、「人は住んでいました」。何だか含んでいるかのようで、薄気味悪い言い方をする。

「この家は。作られたばかりなのでしょね」

今まで一言も発していなかった預言者ドールが言う。彼は、いつものいやらしい微笑みを浮かべている。まだ三十代、四十代の年齢に見える鹿風の村長は、いやらしい微笑みをぼんやりと見つめてから、「そうでもないですよ」と言った。言うてから、彼は一瞬俯いて、何処かから座布団を持ってくる。片手で仕草をして、三人に、座ることを促す。促された三人は、預言者ドール、レシ王女、トン大臣の順に、なぜか順番に座った。トン大臣のハゲ散らかしの頭が、フワツと座布団に包まれる。杖の部分は残念ながら、畳みにハミ出てしまう。

続いて若い村長は「これが臭いの元かもしれないです」と言いながら、持ってきたのは壺だった。石が、蓋をしている。ごっごつとした、形の悪い巨石。

村長が持ち上げ、よたよたしながら畳に巨石を置く。ゴトリ、と畳に巨石は転がった。

小さく、村長は溜息をついた。目の下の皺がピクッと痙攣する。

儀式の後のせいだろうか。疲れているらしい。ドサリと崩れ落ちるようにして座布団に胡坐を？いた。

「飲みますか」

「はい？」

「この壺の中には、お酒が入っているんです。飲みたい方は、どうぞ」

言いながら村長は蓋を開く。アルコールの臭いが簡素な和室に漂いはじめた。

三人は顔を見合わせてから、「飲みます」レシ王女は即決。「ぜひ飲ませてもらいたいですな」杖のトン大臣も即決。預言者ドールはしばし村長をまじまじと見てから、「おいしそうなお酒ですね」。

いやらしく微笑む。

それを聞いた村長は嬉しそうにしながら、花の装飾が為されたコップを四つ、持ってくる。さらに、壺の中からチューブのような黒いを取り出して、そのチューブを通して透明の液体がコップに波々と注がれていった。手慣れた様子で、四つのコップ全てに均等にお酒が配られる。

レシ王女は間髪を入れずにコップを手に取って、ぐびぐびとアツと言う間に飲み干してしまい、へへへと奇妙に笑ってから「もう一杯もらえますか？」。預言者ドールは可笑しそうに笑い、トン大臣は辟易した。「王女がいける口とは驚きです。もちろん、どうぞ」村長はそう言いながら二杯目を注いだ。注がれた二杯目を待ち遠しそうに眺めてから、全てが注がれると直ぐにコップを手に取り酒を放り込む。三杯目も放り込む、四杯目も放り込む、直ぐに吐き気を催してしまつたらしく外に駆けて行って、吐いて帰ってきた。「はははは」と楽しそうに満面の笑みを浮かべている彼女は可愛いというよりは恐怖だったから、三人はちよびちよび酒を飲みながら、呆然とした。

そうこうする内に王女はヒートアップを欠かさない。

「月が見える」

まず彼女はこう言った。簡素な和室の障子を見つめながら、突然口走ったのだ。「月、ですか？」まだ酔っていない預言者ドールがたじろくがレシ王女は「そうなの、へへへ」と声の調子を高くした。

大きくした。簡素な部屋で彼女の演説が始まる。

「月の表面には、何が住んでいると思いますか。人が住んでいるのでしょうか、それとも月夜でしょうか。あそこには人の絶望が隠されていると私は思っているんです、だって、月明かりに照らされる私たちは何時だって妄想の中に身を置いているんですもの。それとも、月夜も幻で。寂しくないのでしょうか、月夜は。一人ぼっちなのに、肉体的には表の人と同じ姿なのだとしても、月夜はきつと一人ぼっちに違いないのに一人になりたくないとは思わないのでしょうか。救われたいとか報われたいとか、そういうことを月夜はきつと考えないのでしょね、だから何時までも永遠に一人ぼっちでいられるし、それが故に一人ぼっちなんでしょうね。憐れみをかけあげるべきでしょうか私が、私が出向いて月夜に、出向いて私が何かになりたいです。私が月夜になれば、きつと永遠な孤独を味わえるんですよ。そうすれば世界は救われるはずなんです。世界が変わって、私も変わって、月夜だっていつかは滅びていくはずだと思うのです。それが、みてみたいんです」

レシ王女は紅潮しながら、頬も唇も緩んでいて、煌々としている。トン大臣は彼女に聞こえない低声で「王女に妄想癖があるとは、知らなかった」小声で、嘆かわしそうにしながら、目をぎゅっと瞑った。和室は妙な沈黙に包まれる。

だが、意外なことに、村長が、たじろくどころか口を開いてきた。

「月夜は寂しがり屋なのでしょね」

彼も酔っ払っているのだろうか。

レシ王女は顎に手を置いて、何か考えるような姿勢をとってから、「危険なことを言っています、村長さん」

と言った。その言葉を聞いた村長は一瞬眉を潜めて、「どういうことですか」と問うと、彼女は答える。

「月夜は呼び出しますよ、寂しがる人を。手招きします。鹿みたいな村長さんも、群れからはぐれたらいつかはきつと連れて行かれま

す。月夜は、月の裏は、何にも見えないところなんだと思います。ですから、村長さん、見えなくなつてはダメです。暗がりに向かつては落ちます。気をつけていないといつか食べられてしまいます、バクリつて。何度も上下にすり潰されて、またすり潰されて、それですり潰されてしまふでしょう。摩り林檎一丁上がりです」

言葉を放ち終わった彼女は右手で、左手を摩り下ろすような仕草をしてから、唇をすぼめて左手の甲にキスをした。

村長はアホな顔をしてから、

「：摩り林檎、ですか」

と言つて、黒いチューブを手で掴み、そこから酒を垂れ流し、また一杯、コップに注がれた透明の濁りを、飲み干した。

全で一息で飲みきつてから、彼は大きく息をついた。本日二度目の、溜息。

「外に、行きませんか。少し、体を冷やしましょう」

月が雲の合間からひよっこりと出ている。優しく村中を仄かに包み込んでいて、相も変わらず虫が鳴いている。蒸し蒸しとした、うだつを上げたくなる湿気、熱。まるで生き物のように、体にねばり、張り付いてくる湿った空気は、独特な臭気を発している。トリモチのような粘り気、しつこい臭い。

和風建築ばかりがポツンポツンとそこら中に点在している。夜の闇にとり憑かれた家々の黒々は、穴ぼこがひっくり返ったかのよう。街灯には翡翠が用いられている。時折、夜と翡翠が滲みあふことで、幻想が生み落とされる。

「気持ちの悪い、夜ですねー」

夜闇をつんざいているのは、レシ王女の叫び。気持ちの悪いと言つておきながら不快では無いのだろうか、微笑み、手を広げ、くるくると回転している。その背後で、三つの男性の影は、回りながら夜闇に消えていくレシ王女を見送りながら、フラフラと足の音を鳴らしている。虫の音とハーモーニーを奏でる、千鳥足だ。

「蒸し暑いですねー」「そうですねえ」「私は暑いのは苦手なんだがなー」「杖というのはどんな心持なんですかね」「いや、人間の時よりも身体が軽いんでいいもんですよ、ははは」「以前はお腹がポツコリでしたものね」「はははははは。今じゃ華奢だよ、華奢。これで手足があれば文句の付け様も無い！」「にしても。不思議なものですねー、妖術つてのは」「そうですねー」「この村にも昔はいたんですよ、妖術使いが。もう死んでしまいましたかね」「ほう、おかわいそうに」「ええ、可哀想でした。トン大臣のように杖になればよかったですかね」「はあ」「酷い亡くなり方をしましたよ」「そうなんですか」「はい」「妖術つていうのは便利なものですが、不幸を呼び出す、もしくは誘い起こす。危険な、本来ならば存在するのも如何わしい奇術ですからね。その方も、妖術の呪縛に収縮させられたのでしょうかね」「責様も呪縛をかけられているのだから？苦しんでいるのか？毎日」「そりゃあトン大臣苦しいに決まっていますよ。人間でなくなった貴方にはわからないような苦惱を日々持ち抱えて生きているんですよ」「はづ。人間でないのは妖術使用のような輩のことを言う。私はまぎれもなく、人間だ」「あなたは豚でしょう」「なんだと」「トン大臣叫ぶのはよしてくださいよ。村の者が起きてしまいますし、王女の姿も夜に紛れてしまいました」「む、ほんとうだ、王女がいない」「くるくる回っていましたけれど」

夜のとばりに王女は覆い隠されたのか、辺りのどこにも御姿は見当たらない。右を探した。草むらが生い茂って風に揺らされているだけだった。左を探した。家の中から人の喧嘩らしき怒声が聞こえてくる。上を探した。月と雲と星だった。

それから、十分後。レシ王女がベンチで座りながら俯いてるのを、三人は発見した。

起きているのか寝ているのか。曖昧に、頭を前後にくらぐらと揺らしている。

「月が見えるなー」

などと相変わらず、うわ言をやっている。村長は何かを聞いた気だったがどのように切り出せば良いのかわからず口をムズムズとさせている。その様子を預言者ドールは傍目で見ることを楽しんでいた。村長という役職の人間の割にかわいいものだ、と。

「お聞きしたいのです」

村長は静かに言った。レシ王女は「んん」と鼻歌でも歌うように返した。しかし、村長の声は耳に届いているようだ。

それを確認した村長は、何かを言おうと口を開きかけたが、ちらと、預言者ドールと、その右手に納まっているトン大臣に横目を向けた。

「少し、王女と話をさせてもらってもよいでしょうか。先ほどのようなお話を、彼女からもっと詳しく教えていただきたいのです」

冷えた語調だが、しかし切実な願いのようだ。預言者ドールは浅く頷いて、何か反発しそうなトン大臣の口を塞ぎながら、そろそろと後ろに下がった。翡翠の街灯の当たらない暗闇に、身を退く。村長は預言者ドールに感謝を内心で呟きながら、ベンチに、レシ王女に恐怖感を持たせないよう多少の距離を置いて、座った。村長は落ち着かないままに何かを言おうとするが、言いたいことが心内で渦巻きすぎているような気がして、上手いこと最初の言葉を口にするのが出来なくて、もどかしい。レシ王女はぼーっとした、どこか遠くに心が持っていかれているような表情をしているから、思ったよりも話しかけるのが困難でもあった。しかし預言者ドールにわざわざ暇を潰してもらうよう願った引け目もある。せつかく二人きりにしてもらっておいて、何も話さない訳にもいかない。村長はそのようにして焦り、余計にしどろもどろになっていった。

だが、四、五分ごろだろうか。村長は意を決して、言葉は整理出来ていないが、思いついたままに喋り出してみることにした。そうしなければ無言のまま陽が昇ってしまいそうだった。

村長はレシ王女に言う。

「恋って、どう思います？」



あまりにストレートといわざるを得ない。恥ずかしい。言った側も言われた側も何だか気恥ずかしくなりそうな一言だった。この状況をさらに気まずくさせるには十分の直球だ。それ、レシ王女も思わず目を見開いていて、村長の鹿顔をまじまじと観察しているではないか。端正な顔つきが崩れて、片眉だけ潜めていて、怒っているような戸惑っているような、感情の交錯した顔つきだ。

だが、それは一瞬だけのことだった。あるいは幻だったのだろう。村長が気が付いた時には、レシ王女は既に真顔だった。真剣だった。：それは、村長が他国の王女に話しかける内容としては全く無い様、ですね。：今の、無理したシャレ、ちゃんと理解してくれたんですか？」

村長がピクリとも笑わなかったことに気分を害したのか、言葉の末尾は不機嫌そのものだったので、村長は焦る。

「いや、すみません」

謝ってしまった。正直、わかるわけないだろ、とも言いたかったが言うわけにもいかない。言葉が繋がらなくて、灰色なのがベンチをまた包み込んだ。しばらく二人は、月を眺めたりベンチを肌で触ったりした。

レシ王女は口を開いた。

「突然話したいって言った人の方が、話しかけられた人よりも戸惑ってしまうのはおかしいことです。それに、私は女だし、貴方は男だ。男は女に頼るものじゃないってのに、貴方はぐらぐらしちゃってて、もう言葉が出てきてないじゃないですか。何が言いたかったのか知りませんが、今からも言葉が続かないのだったら、月だつて沈みこんじゃいますよ」

そう静かに述べてから、彼女は息をついた。あきれたように吐き出した息。

「すみません」

村長はもう泣き出しそうだった。どうにも、なさけない姿だ。彼自身も自覚している。だが自覚しているからってこの場の不備がよ

くなるわけでもない。だから村長は、無理をしても口を開く。

「私は、村長です」

夜はいっそう静まり返った。そんなことは誰でもわかっているのだが。

レシ王女が噴き出しそうにしているのを横目に、村長は続ける。

「私が村長に選出されたのは二年ほど前のことです。投票制の、民主的な、現代的な選出方法でした。ですから選ばれた私はとても誇り高かった。この村を今までより、いっそう立派にしようと思ったし、村人たちを微笑みで満たしてあげたいと切に願いました。あれは、本物の、気持ちでした」

レシ王女はポカンと口が半開きになった。しかし、「それで？」とポカンとしたまま問うた。村長は続ける。

「それで、それで。…ある日、私は、大きな過ちを犯していることに気が付いたので」

「大きな過ちですか？」

それは何だろう、とレシ王女は首を捻る。過ちなんてのは誰でも犯していることじゃない、なんて、馬鹿の彼女の割に達観したことを思っていた。

「私が村長になったこと自体が、間違いだったんです。私は、愚か者でした」

なるほど、そういうことか、と彼女は村長がネガティブになっているのを知った。

「なんで愚か者なんですか」聞くために言葉を掛ける。

「愚かだから、ですよ」声がかすかにだが震えている。

村長は夜闇に声を入り込ませた。

「あの日は、ひどい気分の朝でした。きっと、体が未来を予期していたのでしょう。胃が軋んでいて、腸が苦しんでいた。頭も鉛のように重かったし、風邪かとも思ったのですが、額に熱はありませんでした。知っていますか、これは教えてもらった迷信なのですが、人間というものは体がいつもと違う調子の時が、それが悪い方向の

時には特に、一日に良い結果をもたらすことが出来るのです。私はね、その迷信を信じていたんです。その迷信を信じると、体が重たい時にも頑張れるんです。ですから、私はその日はひどい気分だったにも関わらず、どこかでは楽しみにしていたのです。心の奥底からですよ。何か一日が終わる時に喜びを感じれるんじゃないかって想像していたんです。ですが、お昼に。その日のお昼に、その想像は打ち切られることになりました。迷信を今後信じられなくされてしまうような、心臓に響くショックな出来事を部下から伝えられたんですよ。…翡翠の宝石が、倉庫に厳重に保管されていた、他国との貿易のための翡翠の宝石のストックが、破壊されたんです。盗まれたんじゃないやありません。倉庫ごと爆弾で爆破されて、跡形もなく空中に弾き飛ばされてしまったんです。もう、びっくりしたなんてものじゃありませんでしたよ。現場に行ってみたら、空気が翡翠に霧に包まれたかのように、染まっていたのは夢想的で素晴らしいんですけど、それは、単純に素晴らしいと言っていい光景ではないのですよ。翡翠が空气中に霧散したということは、犠牲にされた命が無駄になったのと同じことなのですから……レシ王女は、私たちの儀式をご覧になりましたよね？」

「はい。さつき、遠くからですけどけれど」レシ王女は気まずそうな表情のまま答える。

村長は何度か小刻みに頷いてから、また口を開いた。

「儀式ではね。毎回、四人の命が生贄に捧げられるんです。古代からの妖術なのです。村全体が生き延びるために妖術という禍々しいものを利用するのは悔しいというか、あまり良い気分が無い時もあるのですが、それがこの村の古代からの生きのび方なんです。この村で命が失われる理由の大半は、儀式のせいです。みんな、儀式に生かされ、儀式で殺されていきます。この村は、禍々しい妖術を中心にして回っているんです。皆、そのことに疑問は抱かない。いや、抱くときもあるのだろが、それに反旗を翻す者はいない。不思議なことでしょう。…因果なことに、私はこの村で初めて、この村の

もつとも深い業に楯突いた、もつとも愚かな村人でした。小さい頃から、儀式で奪い取られていく命の、その理不尽な消失に苛立ちを隠せませんでした。それは、家族にも迂闊に話すことの出来ない、己の秘密にしなければならぬ秘密でした。大抵、外に処分出来ない負の苛立ちというものは、心内でどんどん大きくなっていくものです。遂には、心全てを覆い尽くすくらいにね。私の心は何時の間にか、儀式に対する怒りで一杯になりました。儀式の、理不尽に見える部分だけに対する苛立ちで、一杯になりました。だから、私はその満杯の杯を抱え込んだまま血眼で生き続け、そして村長という座に着くことに成功しました。口当たりの良いマニフェストを述べることと、先代の遺産を目一杯に活用することで、ね「ここまで言うて、村長は息を大きく吸い込んだ。しばし、夜の沈黙が二人の間を通り過ぎた。

「先祖の方、すごい方だったんですね」レシ王女が静かに相づちを打った。

村長は苦笑いをしてから、

「私が言うのもなんですが、すごいなんてものじゃありません。翡翠の宝石の儀式を編み出したのは、私のその、遠い先祖様なんです。私の家系というのは、その大昔の先祖の恩恵を常々受け取ってきた者達なんですよ。ですから、私が村長の座に着くのは、容易いことでした。正統な血筋、ですから」言うてから、村長は自らを卑下するような皮肉な笑い方をした。

「そうだったんですか」事情も心情も深くはわからない余所者のレシ王女には、この程度の返事しか出来なかった。

また、しばし沈黙が続いた。だが、やがて、村長は口を再び開いた。

「でもね。…何にもわかっていなかった男には、村長なんて大任、はじめから無理だったのかもしれない。私の儀式に対する疑念が一部の村人に伝播して、儀式に対する疑念や恐怖を増長させてしまった。村は今、かつて無い不穏な空気で満たされている」

そういつと、彼は三度目のため息をついて、鹿顔を俯かせた。俯いたまま、目を閉じてしまい、言葉も発さなくなった。

なんて言っているのか、レシ王女にわかるはずも無い。

レシ王女は俯いている村長の顔をしばらく眺めていたが、なんだかあんまり見ているのも申し訳ないから、仕方なくまた目を眺めた。レシ王女の好きな三日月が、今日も顔をひよつこりと出している。

まあ、顔じゃなくてアレは口なのかもしれないけれど。ニヤツと笑う、得意気な唇だ。三日月は、いつも得意気だ。あの三日月ならば、迷うことは無いだろう。何時だって得意になって夜空から悩む人々を見下ろす気分というのは、いったい全体、爽快なんだろうか。

「三日月は、ずるいですよね」

何時の間にかレシ王女は思ったことをそのまま口に出していた。俯いていた村長は鹿顔のつぶらな瞳でキョトンと、何事か、といった風にレシ王女をおどろいたまま見た。

「なに、どういうことですか」

レシ王女は夜空に目を向けたままだった。黒の瞳が、夜空を吸い込んでいる。釣られて、村長も夜空を見た。そして、彼も三日月を見つけた。彼の瞳に、黄色い曲線が、入り込んだ。

「あれは、ずるいんですか」

しばらく二人が三日月を眺めたまま、村の夜は時に流されていった。王女と村長の二人を、呆けた表情の二人を、三日月は唇をぐにやりとまげること、嘲笑して、小馬鹿にしている。まったくもって嫌な奴だ、なんて、レシ王女は思いながら、悩んでいる村長の苦悩はどうすれば解決されるのだろうか、とも思っていた。その答えは、内側からは、湧いてきそくに無かった。

「ずるいですよ」

お茶を濁すかのように、いや、事実お茶濁しなのだけれど、そうすることでベンチの重たかった空気も、少しずつ換気されていた。村長は、時々レシ王女の黒い瞳を見つめていた。どうやら、村長は、

完全に、恋をしていた。三日月を吸い込んでいる、和服を来た王女の御姿を眺めながら、いつまでもいつまでもこの時間が続けばいいのにと、願っている。そんな彼の瞳も三日月を吸い込んで、やわらかく夜風で、漂っていた。

「村長さん」

レシ王女の声が出て、村長の感情が揺れた。なんだろう、と思いながらレシ王女を見ると、彼女の頬から一粒涙が零れ落ちていた。思わず、唾を飲み込んだ。

「何で、泣いていらっしやるんですか」

でも彼女は何も言わなかった。涙が何かを物語るうとして、うにも見えるが、彼女はしかし口を開かないので、村長も困ったものだった。そういう意味で涙を流したくなってくる。だが、村長は彼女のこういふ部分に惹かれた人だから、本心から困ったりはしていなかった。疲れている彼は、浮世から遠ざかりたい人間だ。

「これを使ってください」

紳士。懐から絹のハンカチを取り出して、さりげなく手渡した。レシ王女は颯爽と受け取って涙をくいっ、くいっつと拭き取った。その後ハンカチを両手でぎゅっと握り締めたまま、唇を真一文字に縛っている。で、また涙を垂れ流した。ぐわーっと流れるそれを鼻を齧りながらまた絹のハンカチで拭き取る。しばらくしてから、「あー、すっきりした」と独り言のように呟き、「ありがとうございました」と絹のハンカチを村長にそのまま返した。「え、はい」。絹のハンカチは涙でぐしゃぐしゃだったが、村長は何も言わず懐にそれを閉まった。

「村長さんも、大変なんですね」感慨深い言い方だった。

「あなたも、何か悩んでいるんですか」

彼女は細く綺麗な眉を少し曲げてから、柔らかく頬を緩め、悩みを打ち明けた。

「悩んです。人間二人を、どう殺そうかって」

「え」

村長は呻いた。突然の一言で、村長の体はやけに冷え始めた。夜風が急に冷気を持ち出したようにも感じられるが、冷えたのは彼の体のほうだった。

「人間、二人、ですか」

声を発することが上手に出来ずに、喉奥のほうで何かがつつかえている気分にされる。村長には、彼女が殺したいと願っている二人というのが誰なのかは、想像が付かない。

「…誰なんですか、それは」

問いただすと直ぐに答えは帰って来た。驚き。戸惑い。その答えを聞いて、村長は思わず夜闇を見渡してしまった。預言者ドールとトン大臣の姿は見受けられなかったから、彼は一安心した。だが、すぐに焦燥が襲い掛かってきて、言葉を発さずにいられなくなつた。「なんだってそんな物騒なことを思うようになるのですか。あなたは王女でしょう」

「王女は物騒なことを考えてはいけません」

「そういうことではありませんが、そういうことではないんですが」「二回も同じことを言わないでください」

「いいたくもなりません」

はあ、と四度目の溜息をついて、村長は再び夜闇を見渡した。ベンチに座っている二人以外には誰もおらず、ただただ街灯の翡翠の灯火がゆらゆらと揺れ動いているのみだ。

理由を聞こうと思った。話はそれからだ。

そう思って口を開こうと思ったが、しかしレシ王女は急にベンチから立ち上がった。それで和服をはためかし、くるりとその場で一回転。裾が風と遊び、三日月の嘲笑をその身で浴びるようにして回る。

「村長さんにこれ以上話す気はありません」

彼女はそう言った。芯の通った滑らかな語調には、村長の反論を

聞き入れる隙間を作り出さないようだった。断固とした何かしらの覚悟を想像させる、力強い言葉。

彼女は本気でそれを行おうとしているのだ、と村長は思った。そして殺人を、殺人なんていう大それたことを女手一つで成し遂げようとしている。杖のトン大臣ならともかく、預言者ドールは大人の男で、しかも妖術使いだ。そんな男を、お姫様が殺そうと企てる。そりゃ、相手は油断しているのかもしれないが、仮に殺人が成功したとしても、その後はどうするのだろうか。殺人という業を背負ったまま彼女は生きていかなければならないのだ。それは、辛くないじゃないだろうか、ひどいんじゃないだろうか。

彼女はまた三日月を眺めている。

村長は思う。これ以上話す気は無い、などと彼女は言ったが、私は彼女を好きになっっている人間だ。そんな人間が、そんな大それた話の鱗片を聞いて黙っていられると、彼女は本気でそう思っているのか？…そりゃ、彼女は私の思いには気が付いていないのだろうか。村長は勢いをつけてベンチから立ち上がった。彼も三日月眺めた。相変わらず地上の人間を三日月は嘲笑っている。

「話してください。…いや、話さなくちゃ、だめだ」

勢いのままに言葉は強まった。村長のその言葉にも、さっきのレシ王女と同じような、芯があった。その芯に思わずレシ王女はたじろいだというか、思わず村長をまじまじ見てしまう。

だが、彼女の芯はやはり強かった。

「話しませんよ」

村長の芯を一撃で砕くかのような、冷水のような一言。何か鬼気迫るものさえあった。実際、レシ王女は鬼気迫っていた。今ここで鬼気迫るならば初めから打ち明ければよかったのだが、レシ王女にしてみれば、さっきはその場の雰囲気というか勢いに身を任せつつ口走ってしまったに過ぎなかった。村長に打ち明けたわけだが、殺人という大それたことを他人に手伝ってもらうなど、それは王女にとってはとんでもない話だった。あの二人を殺すということ



を他人に手伝ってもらおうということは、彼女にしてみれば何の罪も無い人間を無理矢理台風に引きずりこむような感覚だった。つまり、彼女にとって、やつちやいけないことなのだった。

だったら、本当に、初めから打ち明けなければよかったのだが。

困ったことに、レシ王女からしてみれば村長は他人であるが、村長からすればレシ王女は好きな人であった。

村長の心は燃えている。熱意がある。

しかし、レシ王女の堅固な壁は、崩れない。

それから約一時間、二人は小競り合いを続けた。

三日月は嘲笑しながら落っこちていき、翡翠の街灯の灯火が消えていった。

結局レシ王女の勝利という形で、一つの夜は、終わりを告げてしまった。

和風建築。先程杯を挙げていた簡素なスペース。レシ王女と村長が話し込んでいたその間、トン大臣と預言者ドールは王女無しで話をする時間を得ることが出来た。彼ら二人からはもはや酒が抜けており、赤ら顔は冷え切っている。というのも、真剣な話をするためだ。

「王女が気が付いているかいないかが問題ということだが……」

トン大臣の首元から垂れている神経のような赤と青の触覚。それが手の代わりにもなるのだろうか、ポリポリと彼は頭をそれで掻いた。

「気持ち悪いからそれやめてもらえませんかね」

預言者ドールが不快そうに眉を曲げながら、彼に釘をさした。トン大臣は頭を掻くのを止めない。「手で頭を掻いて何が悪い。ただでさえ自由が少ない体なんだぞ私は」

「そういう不自由さからもしやれは解消されません。私の目的が達成された時には体を元に戻して差し上げるんですから」

「私にはそうするしか手段が残されていないから。だから私は責

様に従っているんだ」

「それは王女や王に対する裏切りへの言い訳にしか聞こえませんがね。あなたは人殺しでしょう」

「……」トン大臣はかなり不愉快そうな表情をした。

それには構わず、預言者ドールは断言してみせた。

「王女は気が付いていますよ」なにかを考えている様子でもあったが、しかしはつきりとした口調で言っただけのける。

トン大臣は凍りついた。

「なんでそう言える？」冷や汗を浮かび上げさせながら、尋ねる。

そのことに対して預言者ドールは少しおかしそうに笑った後、

「そりゃ、聞いてこないからですよ。何が起ったのか、何でトン大臣だけ生き延びることが出来たのか、何で国民たちは石像にしなればならなかったのか。何で王に会う事が解決の糸口になるのか。

彼女は何も聞いてこない。聞くべきはずのことを何一つ訊ねて来ないのは、いくらなんでもおかしい。彼女は私たちが国民に危害を加えたのだとわかっていいるから迂闊に物事を尋ねて来ないのでしょう。我々は彼女が必要だから彼女を殺すことは出来ない。だから何でも答えなければならぬし、困ることを尋ねられても彼女を殺すことは出来ない。じゃあ何故彼女は私たちに何一つ尋ねて来ないのかと言え、それは彼女自身が自分の価値を理解していないからです。

私たちはどうしても彼女という存在が必要だから殺すわけにはいかないが、彼女自身はその事実が気が付いていない。だから彼女は我々に何も尋ねて来ない。下手に尋ねれば事態が悪い方向に進展すると想像しているから」と言う。

「随分と想像力が逞しいんじゃないか、貴様が？その想像力には感心するが、しかしお前さんは複雑に考えすぎだな。王女は気が付いていないよ。せいぜいちょっと怪しんでいる程度だ。何せ昔は天才少女などと言われていたが、王を旅立たせたあの青い花のせいであらう。今じゃ記憶力も思考力も薄れてただの箱入り娘に成り下がっているんだからな」凍りついていた表情を和らげながら、トン大臣はせせ

ら笑う。しかし「ですが間違はなく気が付いていますよ」という預言者ドールの一言で、瞬間的に冷凍される。

「なんでそんな風に断言できるんだ。私には貴様が理解できん。…お前はさつき『彼女は自分自身の価値に気が付いていない』などと言っていたが。それならば、自分に価値が無いのだと思っっている人間ならば、『何故自分は生かされ続けているのだろうか』と考えるだろう。働かざるもの食うべからずというが、人間がお互いに生かしあうのはお互いがお互いにとって利益だからだ。自分が相手にどのような利益を与えているのか理解出来なければ不安に駆られてしまつたろう。己が相手にどのような利益を与えているのかはつきりしていなければ、自分がいつ周りから排除されるのかわかったものじゃないからな！そしてあの女が我々に与える利益は、ほぼ無い。そりゃ、王女は悪くない器量だからそれだけでも価値はあるのだが、しかしあの娘はそれを自分自身で理解できるような女じゃない。だったら、彼女はどのようにして、己がここにおいても排除されないと判断することが出来たのだと思う。いいか、あの娘は俺たちが『悪』じゃない、と判断したんだ。つまりだ。あいつは、まあ、私のことはあまり信用していないだろうが、しかし預言者ドール。あの娘は、おそらく貴様のことを『悪』だとは判定できなかったんだらうよ。立ち回りの上手いお前は、王女に良い顔をしているからな。お前の『良い顔』を演技だと、あの娘ではおそらく見抜けまい。社会というものを経験していないあの女には人間の本質を見抜く力など養われちゃいないんだからな。だから、預言者ドール。あの娘が、自分のことを邪魔な存在だと認識したならば、あいつはな、預言者ドール。貴様を、善良な人間として認識するしか道は残されていないんだよ。善良な人間は、邪魔な人間を排除したりなんかしない。善良な人間は、邪魔な人間にも優しくするものだ。…貴様はあの娘に優しい。あの娘に対して『良い顔』もしている。だから箱入り娘のあいつはお前を『悪』だとは思えない。だからあいつは、我々が殺人者などとは認識しない！つまり、どうということだかわかるな、預言

者ドール！あの娘は気が付いていないよ。ただただ、愛しい生き別れの父親に会わせてくれるという親切な男性に甘えているだけなのさ。初めての外の世界の空気に、興奮しているだけなのさ。邪魔な自分を排除しないお前を、善良な人間だと思つて、いるのさ」

全て語り終わつた後のトン大臣は完全に解凍され、頭がオーバーヒートするほど燃え滾っているのか、顔のどこもかしこも真っ赤になつていた。

さすが大臣という職につく男と言つたところだろうか。あまりの熱弁である。

さすがの預言者ドールもこれには首を捻るしかない。彼はおもむろに壺を覗き込み、黒いチューブを取り出し、花柄のコップに透明色の濁りを放り込んだ。そうして一気に喉にかきいれてみせる。トン大臣はぎよつとするが、彼は構わず飲む。飲み終つた彼は勢いをつけて飲んだ割には静かに息を吐いたし、コップもテーブルに静かに置いた。

「なるほど。私があなを生かしているのも親切でやっているよ、彼女は認識してくれている。そういうわけですね。…だったら、あなを生かしておいて本当に正解だった」

「はつ。そういうことだな。用意周到で結構なことだ。貴様の手腕なら一國を旗揚げすることも可能かもしれないな。…少なくとも、私はお前のようなやつが相手になつたら不快だな」トン大臣は呻くように言つてみせる。赤青の気持悪いのを伸ばして、彼もお酒を飲んだ。預言者ドールとは対照的に、ちびちび飲んだが勢いつけてコップをテーブルに叩き付けた。

預言者ドールはそんなトン大臣を少し不快そうに眺めていたが、やがて平常の様子に戻つた。

「私の考えすぎだったのかもしれないね。たしかに、彼女は勘が良さそうな人間には見えない。突飛な人間には見えますが」

「そういうことだ」

「ならば計画はこれまで通り続行です。血族の縁を利用して、王女

をつてに王を見つけ出します」

「そういうことだな」

こうして二人は床に着いた。レシ王女が朝日が昇る時間に帰って来たことにも気が付かない程の深い眠りに、落っこちたのである。

窓から入り込む朝日を背にして、王女は立っている。その視線の先で、男二人が眠っている。

「……こんなに寝てる」

レシ王女の瞳は、真っ黒だった。

『暗がりにはひそんだ雑木林』

村に名前などは無い。翡翠が栄えている村、というのがこの村の名前だと言っている。翡翠が栄えている村、というのがこの村の程度しかないのだから。この和風建築だって、この村に住む彼らが編み出した建築様式では無い。ルーツがどのものなのか、いつの時代のものなのか、そんなことを彼らは知らない。知らないまま瓦屋根の下、村人は毎日を生きている。翡翠での繋がり。それが彼らの結束である。

山々に囲まれた、森林生い茂るこの地帯、象の足跡のように落ち窪んでいる盆地。迂闊に山奥に近づけば、なぜか人間は行方不明になる。いわゆる神隠しというやつなのだろう。その怪奇な現象の正体は、彼らが百年以上この土地で営んできたにも関わらず解明されていない。不便で仕方がないのである、不安で仕方がないのである。幽霊だか怪獣だか妖怪だか知れぬものが常に、ほぼ三百六十度、土地に住む人間を取り囲んでいるのかもしれないのだ。もちろん、全てが山に囲まれているわけではないのだから、この土地から出て行くのも可能だ。だが、翡翠の儀式は、村の中心に置かれている『煙突』でしか行えないし、そしてこの『煙突』を復元する技術を彼らは持ち合わせていないのだから、この不思議な土地で彼らは生き

ていくしかない。それが、生きるといふ目的を達するには、食いつ持を得るためには、もつとも安全な手段なのである。

それ程に翡翠の宝石は価値があった。儀式は圧巻の光景だし、宝石の輝きは人間を魅了する。特に、富んでいる国の人間からすれば、翡翠の宝石は、まさに、富の象徴としてふさわしい。だから価値がどんどん鰻登りになっていくのだ。ブルジョワとブルジョワが裕福を競い合う分だけ、翡翠の宝石の価値は不動に成り変わっていく。いつのまにか、村が滅びないための、安定した収入源となり、それ無しで村は生きていけなくなる。だから村の住人は、神隠しに遭う恐れに常に脅かされながらも、逃げ出さない。ひたすらに儀式を繰り返すのだ。たとえば己が生贄に捧げられる時がこようとも、少なくとも、それまでは生きていけるのだから。

村には数多くの問題がある。誰もが気が付くような問題点がいくつも存在している。たとえば、何故『煙突』があるのか。たとえば、何故『翡翠の宝石』が生み出されるのか。たとえば、何故『人間が生贄に捧げられなければいけないのか』。たとえば、何故『山に立ち入ると神隠しに遭ってしまうのか』。

彼らは追求を怠っているが、言うなればそれも仕方が無いことである。というのも、妖術に関する知識というものは民衆には伝わらづらい裏側の知識だからである。妖術使いは妖術の知識を晒さない。妖術使いは妖術が危険な代物であるとわかっているから、社会をめちゃくちゃな混乱に陥れると知っているから、広めない。また、それが己の命を守る手段にも繋がるのだ。迂闊に妖術を教えて教えた相手に殺されてしまうという可能性は、十分にあり得ることだからだ。

だから、翡翠の宝石の儀式を考え出した妖術使いの、その子孫である現在の、村長。一番妖術を解明できる可能性のある人間は彼である、と村人は考える。血族の者にだったら、知識を分け与えるかもしれない。村長は、自宅の奥深くに、先代が遺した妖術の知識を隠しているのではないか。あるいは何かしらの知識を知っていて、

それを村人に教えると都合が悪いから、己だけの秘密にしているのではないか。

そういう疑いを強めて、強めて強めて、遂に強行に移した人間が、おのれらの命でもある翡翠の宝石を爆破してみせた。そして彼らはその行為が生じた責任は村長にあると言つてのける。正体は明かさないままに、こんな声明を出したのだ。『村の財産となり得る知識を独占する村長のせいで、我々は自らの身を切り裂いて血を流した。貴方がこれからも変わらぬ態度を取り続ける限り、我らは罪を犯し続ける』、と。

それでは困つてしまつてはいないか。一体全体、村長は何かを知つているのだろうか。それとも村人の思い過ごしなのだろうか。

主にのどかな田園風景が広がっている、村。陽も照つていると、この村の翳りなど見えてこない。つくづく平和に見える。だが、預言者ドールと村長が連れ立って歩いていると、時折、とてつもなく鋭利な視線が送られてくるのである。麦藁帽子の陰からの睨み。頭巾の陰からの睨み。筋骨隆々の若者からの睨み。歩いている最中に、何度もそういう視線とぶつかる。そこには村長に対する不信と、正体不明な人物に対する窺いが、ちらちらとしている。そんな中、周りに聞こえない程度の声量で、二人は話している。村長が預言者ドールを呼び出したのだ。

「…あの煙突を、調べて欲しいと？」 天気が良いおかげで、煙突は堂々と空にそびえ立っている。出目金のようなでっかい目を細めながら、預言者ドールは不審気に問う。

「はい。しばらくこの村で、妖術使いのあなたに、調査をお願いしたい」村長も煙突を眺めている。鹿顔からは、苦々しさが浮かんでいる。

少しの間を置いてから、

「妖術使いにも色々あるんです。あなたの先代が妖術使いだからといって、私が煙突の仕組みを理解できるとは限らないのですが」

「無理ならば無理でも構わんです。行動をしていただくだけで、助かるのです」

「村長らしく振舞いたい、というわけですか」

「恥ずかしながら、今現在私は、暴走している一部の村人を止める手段を、なんら持ち合わせていない。藁にもすがる思いなのです。

あなたに『煙突』を調べて貰って、何かが判明すれば御の字ですし、わからなくても、なんとなくごもつともな言葉を述べてくだされば、村人を落ち着けることもできるはずなのです。大切なのは、妖術使いのあなたが煙突を調べてくれた、ということ。村人たちにアピールすることなんです」

「その調査をしている間、この村で面倒を見てくださるといっものはありがたい話です…。正直、まだ長旅の疲れも取れていないですし」

「そうですよ」

「ですがね…」

預言者ドールが何かを言おうとした瞬間に、また睨みと遭遇する。睨みを向けていたのは顔にバツ印のある中年男性。何か気難しそうに眉間の皺を寄せている所を見ると、彼も何か不満を抱えている村人なのだろう。

歩いている二人とその男は、しばし互いに深刻な空気を醸し出しあい、そして擦れ違った。

村長が言う。

「こういう話は、外でするべきではありませんでしたかね」

預言者ドールは頷いてから、

「そりゃそうです」

と述べた。村長の鹿顔は、いよいよ苦しそうになった。

雑木林に入った。陰と陽が交錯している、木々のトンネルを、潜って行く。

預言者ドールがさっきの続きを言う。

「別に私じゃなくても構わないですよ」



その言葉に村長は不思議そうな顔をする。キョトン顔をした彼は余計に鹿らしく見える。

「いえ、あなたでなくては、ダメじゃないですか」

「この村には妖術使いがいるはずですよ。村に入る時に、妖術が使われた混合物に、襲われたんですから」

「そんなことが？」

「ありました。誰か、この村に妖術を使う人間がいるはずですよ」

預言者ドールの言葉に村長はピンと来ない様子だ。村長は首をかき上げてから、

「いませんよ、そんな人間は」

笑いながら、はつきりとそう言った。

「いない？」

述べてから、預言者ドールは雑木林を見渡した。木々が風に揺らめいている。その木々の間は暗い。そこに誰かの姿は見当たらなかったが、何だか急に、背中がひんやりとする感覚が、彼を襲ってきたのだ。

不気味な思いをしながら、しかし言葉を続ける。

「だったら、正体を隠している人間がこの村に潜んでいるのでしょう。…：そつで無いならば、山奥に潜んでいるのかもしれない」

「山奥。…：山奥で神隠しをしてきたモノが、妖術使いということですか？」

「体が鉱物で出来ていて、動物の耳。さらに植物らしき足がくっ付いている。そういうのが飛び出してきたんですよ。そんなものは妖術じゃなければ形成できない。…：そういうものを見た経験は無いのですか？あるいは、村の誰かがそのようなものを見たという話は？…：…：そういえば、私たちを案内した、ぼろい布を身に纏ったばあさん。この村に入るまでの道のりを案内してくださったのですが、急に私たちを置いて行ってしまったんです。そのおばさんがいなくなつた途端に三角形は現われました。もしかすると、彼女が関係しているのかもしれない」

「はあ」

やはり村長はピンと来ない様子だった。預言者ドールとしては、せめておんぼろ布のおばさんの存在に關しては、話が通じて欲しかった。しかし、彼は不思議そうな顔をやめず、それは鹿が餌を貰えない時のような顔だった。

しばし無言になる。雑木林のトンネルは以外と距離が長く、深まっているのだろうか、どんどん陽が遮られていく。風が前から吹き流れてきて、後ろに流れていく。それは涼しくて良いのだが。良いのだが、陰気を含んでいる。預言者ドールの額に落ちてきた葉っぱの、葉脈。それがなぜか黒々としているのが、不自然だ。

「何時になったら抜けられるんですかね。ここの雑木林は」  
気が付くと不満を述べていて、村長を苦笑させた。

「すみません。人がいないところの方が良いと思っただけで」  
なんだかもう村長はたじたじた。構わず預言者ドールは思ったことを口にする。

「それはありがたいのですが。何だかここは、気味が悪い」  
村長の苦笑している顔が一瞬で、真顔になった。

「妖術使いの方にそう言われると、怖いじゃないですか」  
彼は周囲をキョロキョロと見回した。どうやら、怖がりらしい。そういう会話を交わしてから、村長は言葉少なになりビクビクしっぱなしだった。葉のざわめきにも時折、反応するほどになってしまい、預言者ドールはその滑稽ぶりのおかげで、不気味さを多少忘れた。『この男はコメディアンに近いな』。そんな風に村長を分析したりもした。そしたら唐突な事件が起きたのである。

「xxxxx!」  
思わず預言者ドールは飛び退いてしまった。何が一体どうしてしまったというのだろう。卑猥な言葉を村長が叫んだのである。

「なんですか!」

「xxxxx!xxxxx!」

「どうしたんですか」

「xxxx!xxxx!xxxx!」

これは緊急事態だと言えまい。なんということなのだろうか、村長が卑猥なAV男優のようになってしまった。わけがわからない。これではさらにコメディアンぶりが増すではないか。いや、コメディアンはこんな気狂いで低俗なことは言うまい。これをコメディアンに例えることはコメディアンに失礼である。顔が空を見ていて、鹿顔に日溜まりが斑模様のように点々と張り付いている。そんな村長の目玉は、どうしてしまったのだろうか、白目の部分が真っ赤に充血してしまっているではないか。

思わず嘔き出しそうになっていた預言者ドールだが、ここまで村長の目付きがおかしくなっているのを見れば、自然と、顔が周囲に向く。どのように考えてもこれは何者かによる、呪だ。明らかに、幽霊的なものを感じさせる。

幽霊的なものを感じさせるということは、近くに妖術使いが潜んでいるということでは、ないのか。

「どこにいる」

低く呟きながら、両の目で雑木林を見渡す。村長の気を狂わせた何者かが、この鬱蒼の中でほくそえんでいる。村長を変態に変えることで悦に浸ることに成功した妖術使いが、どこかで息を潜めているはずだ。そうで無ければ説明がつかない状況じゃないか。

預言者ドールは目に見えないほどの速さで、幾つかの挙動を行った。手首をぐわんぐわんと回し、足首をしゅしゅっとごわごわさせる。日溜まりを拒絶し、体全身に影が這いつくばるのを頭で想像する。

膜が張られる。透明な、一見変化は無いように見えるが、彼の体には木漏れ日が寄り付かない。彼の全身は斑にならず、影の濃薄が一切消え去られた。彼だけ影の無い世界に入り込んだような、あるいは影のみの世界に入り込んだような。そういう姿に彼は変化していった。

その数秒後に、預言者ドールの足元から数本の蔦が、地面を突き

破つてにゆるにゆると飛び出てきた。緑色の、植物。預言者ドールはすぐさま悟り、伸び出て来た蔦を手で掴もうとしたが、しかし蔦は柔軟な動きでそれを避けてみせる。蔦はさらに伸び出て伸び出て、預言者ドールの全身を巻き取るうとしていくかのようだった。しかし、彼の背中に張り付こうと蔦が伸びたところで、電流のようなものが蔦全体に走りこみ、一瞬にして蔦は枯れ果てた。こげ茶に変わってしまった。そのような感じで全ての蔦が枯れ果てて行き、預言者ドールの足元から伸び出てきていた蔦は、やがて全て駄目になり、地面にへたばってしまった。

「なんだ…？」

目を見張る。こげ茶に枯れてしまった蔦が、地面にへたばったまま種の形に変わった。棒のように細長かったそれが丸みを帯びて行き、一瞬にして蔦から種に身を転じたのである。種はラッキョウのような形をしており、先端からよきよきと今度は莖らしきものが伸び始めて、息つく間も無いうちに莖は生長。葉やら花やらを咲かし始めたのである。そういう風に花が次々生えてきて、それぞれみんな色が違っていた。七つ生えてきた花は全部で七色、つまり虹っぽい色鮮やかな組み合わせで、預言者ドールの足元を囲うように、堂々と咲き乱れたのである。

で、その花びらの中心から、大砲の砲弾みたいな種子っぽい、虹色に点滅している丸いのが飛び出してきたのである。それが×7なのだから半端容赦が無い。妖術で全身にコーティングをしていた預言者ドールの体にそれがベチャリ、と気持ち悪くへばり付く。水風船のように破裂する虹色の丸い変なモノは、中から白い粉末らしいのを吐き出した。それは預言者ドールの体にどんどん重なっていつて重なっていつて、預言者ドールをどんどんドーランを塗ったような感じ、あるいは消火器を全身に浴びせかけられた感じ、に変えていった。出目金のように出っ張った目以外、ほぼ全身が真っ白に染め上げられてしまった。

「……こほっ！…こほっ」口の中に粉が入ってきて、咽込む。

喉に詰まりそうになったので、預言者ドールはさらに焦った。そんな時に、声が、雑木林の何処かから、風に漂ってくる。

『慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壯呂草々家、転転天鬼喜草々家……』

預言者ドールは手で十文字の形を作る。すると一瞬にして、彼を纏いこんでいた粉末は跡形も無く消えうせたし、地面に生えていた計七色の花々も枯らしてみせた。一つ息をついてから、「……どこだ」と、聞き覚えの無いお経に、神経を尖らせる。

雑木林の影を、見回す。陰鬱な風景の中にいる、自らと同業の間。その居所を探る。だが、隣からの喚きちらしのせいで集中できない。

「×××！×××！×××！」横で村長はずっと隠語を唱え続けているのだ。

だが、そんな村長に変化が生じる。彼の瞳は真つ赤に染まっていたのだが……緑。つまり、瞳の色が翡翠に切り替わったのである。「……命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、怪神貢食命草々家……」翡翠の瞳になった村長はさらにおかしくなり、お経を唱え始めた。彼のお経が、雑木林のどこかから聞こえてくるお経とシンクロする。

『慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壯呂草々家、転転天鬼喜草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、怪神貢食命草々家』

これが一度だけではなく何度も、繰り返し、雑木林のトンネルに響き渡って預言者ドールを不快にさせる。妖しい雰囲気の本家の預言者ドールであってさえも、心持ちがぐらつきそうになる。それ程にお経は何だか底が知れず、黒ずんでいる井戸のような不気味さを連想させる。

そんなことを思っている間に、トンネルの奥の方から突風が駆け抜けてきて、預言者ドールの後方へと流れていく。姿勢が多少仰け反る程の強風は、先程まで無風だったのでおそらく雑木林に潜んで

いる妖術使いの技か何かなのだろう。数枚の、黒い葉脈の葉がパラパラと踊り撥ね、トンネル内での視界をさえぎる。だが、預言者ドールは戸惑った様子も見せず、今度は二回、手でxの印を作った。するとxの中心は蘇芳に輝き、どこからどこへともなく吹き荒れていた強風はピタリと止み、世界を無風、無音に変えてみせる。

あんなにもザワザワと音をたてていた雑木林が、教師に怒鳴られた子供のように静まり返る。しかし、一つだけ、預言者ドールの世界の隅っこで、いまだに騒いでいるやつが、いた。

お経を唱えているのは、その木だ。

「ばれてしまいましたね」言葉と共に手の平をこによこによとやると、預言者ドールの手に銀色のナイフ。ざわめきを止めない問題児の木の中心、つまり幹に、投擲で突き刺した。苦しみの音も言わず、その木はざわめきを失くす。その幹のところはまだ預言者ドールは一瞬で移動してみせて、時たま太陽を反射して美しいまでにキラめいているナイフを、さらに深く、奥深くにまで幹に突き刺した。すると初めて、幹から「グア」と呻くような蛮声が上がったのである。それを聞いた預言者ドールは満足気に微笑み、なにか勝利者の驕りらしき嫌味すらも持ち合わせる。

「…何かをやる気なら、もつと賢くやらなきゃあ駄目ですよ。こうやって殺されちゃ、何にも出来ないんですから」木の幹に、静かに囁く。

木の幹は、

「すんごいんねー。あんたが強い男だったなんて、わたしは知らなかったかんねー」

老いたしわがれ声を発して、そのまま光源を内側に凝縮するかのよう濃密さを刺された部分に全て握り締めるかのようにして、機械音らしいガチャガチャという音を鳴らしながら、一本の木は次第に人間へと変化していった。葉は洋服になり、幹は肉体に変わった。顔は皺だらけで、着ている服は、つぎはぎの布。腰は折れ曲がり髪の毛は白髪混じり。みるからに、老婆。それは村に入るときに、そ

の道筋を案内すると申し出ておいて途中で消えていった老婆。その人物に違いはなかった。

「あひよ」

突飛なのが老婆のしわがれた唇から飛び出て、それをきっかけにして老婆は姿形を変貌させていった。

「やっぱり人間は、若い方がいいわよねえ」

そう言いながら彼女の皺はどんどん薄れて行き、ピッチピチの十代だとも言うのだろうか、もち肌でこんがりと日焼けした黒い皮膚が、老婆だった表面を覆うようにして露出してきたのである。所々がほつれてばかりだったおんぼろ布も綺麗に纏まってしまい、妖術使いらしい紫のローブへと変化した。老婆：いや、浅黒い女性。目付きは狐並に鋭い。妖艶が全身から滲み出るような、魔性を隠しきれていない女だ。いや、隠そうとはしないのだろうか。

その変化を見せ付けられた預言者ドールは、いまだ彼女の鳩尾に差し込まれている銀色のナイフを握り締めたまま、もう一度ナイフを押し付けて見せた。

「ぐっ」

薄黒の魔女は苦しそうだったが、しかし右手で何か仕草をした。そうすると預言者ドールは、ナイフを握りこんでいる右腕に、何か手前に引っ張り上げられるような力を与えられ、右腕が操り人形のように後ろに捻じ曲がった。それに付して銀色のナイフも魔女の体から抜き取られ、魔女は「んん」と妖艶な吐息を醸し出しつつ、「生意気な男だ」と声を沈めた。赤黒い血液は一瞬だけ吹き出していたが、何事もなかったかのように、すぐに傷は塞がった。

「あなたはねえ」と言いながら、預言者ドールに向かって手で仕草をする。するとナイフは宙を舞い、彼の左手さえも後ろに捻じ曲がった。預言者ドールは、まるで奇妙な彫像であるかのような、そういう格好になってしまった。「があ」と唾液を一粒。今度は男の方が苦しむ羽目になったというわけだ。

「少し調子に乗っているわよお」

妖艶なる魔女はローブの裾をはためかしながら預言者ドールを村長の元にまで動かしてみせる。手ですこし仕草をしてみただけで男は自由自在に動かされてしまう。彼は喉からこみ上げてくる悲鳴を押さえ込むよう努めることしかできない。村長にいたっては糸が切れてしまったかのように地面でへたばってしまっていて、死んでしまったのだろうか、と預言者ドールが疑うほどに手足があちらこちらに放り投げ出されている。

「この男の、ことは、殺したのですか」息を切らしながら尋ねると、「殺したりはしないわよ」と答えて、女は唇を曲げて笑って見せた。「休憩を取らせないと、疲れてしまうでしょう? ……村長さん、だものねえ」言いながら魔女は伏している村長の顎を手にとり、鹿のようなつぶらな瞳を持ったその顔を、まじまじと見つめ始める。そこには何か特別な感情があるかのように、預言者ドールには見えなかった。

「……その男は、あなたにとって、特別なのですか、ね」苦しみながら、預言者ドールは勘で尋ねた。すると呆気なく魔女は「そうよ」と肯定して、それから、気を失っている村長の唇に、キスをして、彼が彼女にとって特別だという証明をした。その証明に呼応するかのように雑木林はざわめく。

「色魔なのか、あなたは」「色魔は男のことをいうのよお。わたしは魔女でしょう」「言葉の違いは、どうだって、いいんです」「男に魔女って言葉は使わないでしょう?」「そういう風にかかった言い方をされると、よけい色魔に、見えますね」「フフフ。腕を捻り上げられている癖によく喋る男だことお」

彼女は再び手で仕草をして、十分に痛々しげな捻り上げを、さらに強めてみせた。預言者ドールの怨嗟を含んだ蛮声が雑木林をつんざく。そんな彼の苦しむ様子を魔性の女は愉しげに見下している。そして弄ぶかのように、預言者ドールの蛮声と同じくらいの大きさの嬌声を張り上げる。それをしばらく続けていると何か笑いのツボに入ったらしく、可笑しそうに唇を曲げた。そして再び魔女は村



長に口付けをする。その口付けをした時に、預言者ドールはようやく捻じ曲がりから解放された。彼は重力に引つ張られ、痛々しい痙攣を起こしながら、地にひれ伏した。

魔女は口付けを終えると、「目を覚まして」艶かしい声で、眠っている村長に声を掛けた。

雑木林の、一瞬のざわめき。その後の閑静。だが、村長は目を覚まさなかった。

「あら、駄目なのお？」声音は平坦なままに、彼女は、がっかり、といったジェスチャーをしている。本当にかっかりしているのかは、わかったものじゃない。

「フラれたんですか」「お黙りい」

「うぐ」預言者ドールは再び捻じ曲げられた。今度は右足。吊ったような痛みが彼の全身をのたうちまわる。それをただただ愉しげに見ている魔女は、黒いヒールの踵で吊っている足を踏みつけるといふ、惨たらしい行為をやつてのける。預言者ドールの口から、あの世直通かと思われる叫び声が上がった。だが、彼女はどれ程に恐ろしい気性だと言うのだろうか、彼女は唇の端をピクピクと痙攣させている。これだけの悪魔的行為をしているにも関わらず彼女のストレスは一切解消されていないのだろうか。きっと、されていないのだろう、

「本当はもっとひどいことをしてあげたつていいんだけどお。だけれどそれをしないのは、あなたに苦をわかつて欲しいから、ねえ」などという魔女らしい一言を平気で口にする。預言者ドールは虚脱した瞳になりながら述べる。

「…突然現われて、何をしたいつていうんですか。こんなサディストなことをする女、探しても見つかるものじゃないですよ」

虚脱が全身に襲い掛かってくる。預言者ドールは完全に『死ぬ』と意識した。鮮やかに浮かび上がってくる死の予感。だが、それも時が経つにつれて虚脱に覆いかぶせられて薄れていく。全身の感覚が薄れて、どこか遠くへ消えていく。

「こつすると、気持ちが良いでしょう」  
女の嘲笑いを最後に、預言者ドールは『なんだ、本物か』と、思った。

『ラピスラズリの天蓋』

ぐわつと心を驚つかみにする。何かというと、風鈴が。金魚と出目金がそよそよと、透明なる半円の世界で尾びれを動かしているのだが、その透明の半円はガラスで出来ているらしく、ガラスとぶつかり合つて音を鳴らすのは、この村の名産物、翡翠。まったくもつてそれが綺麗であり、風鈴の価値を二十も三十にも倍加していて、で、彼女は和風建築の簡素なスペースでその風鈴を見ている内に、  
「ああ、金魚になりたい」と思ったが、いやすぐに頭を横に振つてそれを否定。彼女は『そんなこと考えてる場合じゃないんだ』と脳裏で呟いたが、それは感情というよりはただの言葉だった。昨晚、二人の呑気な寝姿を眺めた時もそうだった。豚顔が、欲望を包み隠さないようなその横着が、目の前で耳をつんざく鬣を搔いているというのに、浮かび上がってくるモノは怒りでもやり切れなさでもなかった。別に、何にも無かった。いや、何にも感じなかった、という事ではないのだと思う。ただ、そこに現実感が無かった。彼らのことを『憎む』ということを、どこかで客観視している自分、というのが内側で、うつすらと呼吸をしていたのだ。

レシ王女は、はあ、とため息をついた。それは彼女にとっては『レシ王女という名前を付けられている女が世界の中の和風建築の一室で、はあ、というため息をついた』、という客観的な事実であり、主観的事実とは違うような、なんだか言葉では表せない奇妙な遊離感、を感じるのだった。

それは、その感覚は、彼女にとっては、蜜を舐めたあの幼少の時代から続いている感覚だ。あの時以来、彼女は全ての物事に対してぐでんぐでんになってしまった。つまり酔っ払いみたいなものなの

であつて、それまで彼女が励んでいた全てに対して彼女は自らドリップキックをかましたようなものだった。その結果、彼女に巢食っていたはずの社会常識は崩壊、それによって伴う危機への意識も皆無、誰かの助けが無ければ霞がかつた虚無の中で貧窮で死んでいくだろう、という有様に陥つたのである。つまり、レシ王女という人物は、王女という立場だったからよかつたものの、そうでなかつたら野垂れ死にする運命にあつた、のである。社会常識が無い者や自らに対する危機意識が無い人間が生きていける程、この世界は豊穡ではない。豊穡で無いからこそ、同志である人間さえも生贄にして、村人たちは、ようやく生きていくのだ。そんな貧困な世界で、社会の役に立つどころか足を引っ張ってしまうような輩が生きていて許されるはずも無い。物の豊穡が欠けているが故に、人々の心も、余裕のある状態には成り得ていないのだ。

王女はあまり社会に組み入っていない女だが、しかし蜜を嚙つてから、自らが社会に組み入れる状況で無くなつたことは彼女自身、ある程度は理解しているところだった。それがゆえ、王国の人間たちと己は違つたと彼女が認識するたびに、その回数を増やすたびに、己と他の溝を深めていった。それではよけいに社会と通念できなくなつていく。自活が出来なくなつてしまう。といつても、城の中でぬくぬく出来ている内は当然問題が無かつた。だがその牙城も潰えてしまつた時、彼女は新たに頼りに出来るなにかを見つけないわけにはいけなかつた。社会に入り込めない彼女にとって、その場凌ぎであるが、生きていくにはそれしか手段が無かつたわけでもある。だから、国民が虐殺された夜に、預言者ドールとトン大臣のことを彼女は非常に怪しんだし、その懷疑は日増しに強まり確信に近いモノに変化した。二人に対する追求を強めることは自活が不可な彼女には出来なかつた。追求することで対立が浮き彫りになることが、面倒だとさえ思つていた。それならばなんとなく場の流れにのつて生きてしまつてもいいか、と、彼女はそんな風に思つていたのである。それならば、なぜ彼女は『二人を殺したい』などということをする

長に述べたのだろうか。しかも、協力を申し出た村長を拒絶したのだろうか。拒絶は嘘で本当は協力してもらうつもりなのだろうか。まあ、現実感のぼやけている彼女だから、なんとなく言ってしまった所もあるかもしれない。言ってしまったから、『あ、言わなきゃよかった』などと思っただのかもしれない。

実際のところ、レシ王女としては、村長に協力してもらうつもりは、ほとんど皆無だった。そしてやはり、預言者ドールとトン大臣を殺したいという感情に対しても、他人事のように一定の距離感を保っていた。だから、どこか自分の思いに対して本気が欠けていて、言葉では預言者ドールとトン大臣に対して『殺したい』などと言っていたが、心の奥底では多少許していた。どうでもいいとさえ思っていた。

自分の命の有無に関してもどうでもいいと思っている人間だから、他の命に対してもどうでも良いと思っただけなのかもしれない。国民たちの死も、博士の死も、王女の死も、王との別れも、預言者ドールを殺すことも、トン大臣を殺すことも、彼女にとっては全てが実感の無い絵空事でしかなかった。だからこそ彼女はどんな場面においても真剣であることから一歩足を退いていて、観察者であるが如くすべてに対して他人事だったのである。

そういった性格は明らかに冷たいのだが、しかし彼女は自分自身で、そういった性格は『善い』のではないか、と思っただけ。さらに言えば、皆が私と同じくらい他人事な雰囲気であれば、世界は平和になるんじゃないかな、とさえ思っただけ。というのは、国や村などで生活をしている人々の執着というか、『死なない』ということに対して真摯な人々たちこそが戦争のような悲劇を生み出すのではないかと勘繰っていたから、彼女はそういった考えに行き着いたのである。死にたくないと願う結果、他が排除されることは多々あり得て、弱肉強食な感じでライオンはシマウマを襲って殺す。

それに比べて私という人間はどうだろうか。全てのことと距離感を置いていて、全てに対して「どうでもいい」と思える私という人

間は、「死にそう」ってなったとしても「どうでもいい」という気持ち  
持ちが上回るだろうから、他を排除してまで己を生かそうとはしな  
いだろう。そういう考え方を持っている人間がこの世界に闊歩する  
ようになれば、世の中では「どうでもいい」が広がっていった、人  
々は戦争を起こしたり食べ物略奪したりしなくなるんじゃないだ  
ろうか。その先に広がっている光景というのは約二文字の平穩、ま  
さしく平和。そういうことを皆が理解してくれば、理解するだけ  
でなくそんな感じを実践してくれば、己の生活を守るために他が  
排除されるというような悲劇は無くなって行き、みんなアハハと愉  
しくなって笑う。それはどれだけ住みやすい世界だろうか、生きや  
すい世界だろうか。まったく想像が付きませんが、想像が付かない  
程に素晴らしいに違いない。全てがどうでもいいで許しあえるから  
わだかまりが無い。憎みあうことが無ければ、みんな平らになって  
穏やかになれる。いいねいいね。たまったものじゃないね、虚心坦  
懷。

ふ、と、レシ王女は何か思い当たったかのような表情をしてから  
立ち上がり、手で弄んでいた風鈴もテーブルに置いた。

風鈴の悪あがきのようなチリンという呻きに安心を感じながら、  
コンクリの三和土を抜けて、彼女は陽光降り注ぐ青空に足を踏み出  
していった。

目と肌を焼いてくる日差ししの温もりに体を張って、精一杯の伸び  
をしてから、ぼーっとしたような顔つきをしつつ彼女は歩く。

何も考えていない顔つきは、先程まで自分が考えていた理想のこ  
とさえも、忘れているかのようだ。

絵に描いたみたいだな、もこもこと白い入道雲にぼんやりを向ける。  
「まるでクリーミー。折り重なった綿」

感想を洩らしてから、ゆったりと前へ。

そして、瑠璃色がグパーとなった。

## ラピスラズリの天蓋

ある夫婦は言い争っている。原因は両方の浮気で、浮気をした原因はお互いに『そっちが浮気をしている』と思ったから仕返ししてやるうと思つた』ということだつた。

実際のところは、わからない。元々、男も女も勇ましい性質で、やられたらやり返すを教訓にしているから、片方が浮気をした時点でこうなることは自明だつた。男と女、お互いに火がついている。

「女が浮気つてのが考えらんないんだよ。男は毎日仕事で大変でな、安らぎがなきゃやってらんないだろうが」

「安らぎが欲しいのはこっちの方でしょ？そういう風に女がだとか男がだとか、古い考え方しか出来ないあなただから、女一人に優しく接する余裕だつて持ち合わせられないんだ」

「結局、お前だつて男と女で区別してるんじゃないか。最低だな、そういう女には優しくする必要ないよな」

男は拳を振り上げようとした。そこで女は退いたりせず、男のイチモツに向けて、鋭い一撃。足を振り上げたのだ。

「んぐ、ご」あまりの苦しみに悶絶せざるを得ない男。

「ははは、そんなのブランブランさせてるのが悪いんだよ……ほら、この紙」

男の悶絶が止む間も与えず、女は筆筒の引き出しから一枚の用紙を取り出して、男が悶絶している床の前にそれを叩き付ける。男は「うっ、うっ」ともがきながら、しかし何とか涙目を開き、喧嘩の度に筆筒から取り出される、これまで何度も目にしている『離婚届』を目の当たりにした。

「うっ……まったく……これで、何回目だ」

男はイチモツの痛みに耐えながら、なんとか喉奥から声を振り絞る。

情けない男の姿を眺めながら女は、「ふふ」と微笑してから、「

今度は本気つてことも、あるでしょう？」と男を脅す。

「その台詞も、何回も聞いた！」大声でしゃくり上げる。

「でも、こういうことを繰り返すのが、私たちのやり方でしょ？」  
女が冷静に言う。

そうすると男もイチモツを蹴られた割には冷静に戻り、

「そりゃあ、そうやって繋いできたよな、今まで」

と平坦な調子で述べてから、イチモツの状態を確認するかのよう  
な仕草をした。

「下品なことをするな！」見兼ねた女が怒鳴ると男は「お陀仏かど  
うか調べてるんだろ！」と怒鳴り返した。

「…そりゃ、お陀仏じゃ困るけれどね」

女は思わず頬を持ち上げそうになった。男も自分で言った言葉が  
滑稽に感じられてきて、頬を持ち上げそうになった。

二人とも、なんとかこらえた。場の雰囲気、少し緩んだ。

「不満はこれまでも、たくさんあっただろう」男が静かに言う。

「そして、これからもだね」女は静かに答える。

「これからも不満な生活を続けていくことに、耐えていけるか」男  
がもう一度静かに言う。

「それは、あなた次第よ」女はもう一度静かに答える。

「俺だって、お前次第だ」男はついに笑った。

「前、こういう会話したね？」女も笑った。

「繰り返してるだけだな」男の笑いは皮肉に変わった。

「それもそうね」女は笑うのを止めた。

緩んでいた雰囲気再び凝り固めていくのは、繰り返すという退  
屈への拒否感。日常に対する嫌気。非日常への憧れ。

『離婚届』が、二人の視界を埋め尽くしていく。白色で長方形の  
紙ツペらは、薄っぺらいペラペラなのに、なんでこんなにも存在感  
が深々しいのだろうか。二人にはそれがわからない。だが、燃やせ  
ば消えてしまうそいつには不思議な効力が間違いない。二人  
はそれから逃れることが出来ない。

『別れてしまえば待つているのは、非日常だ』

人生に新たな展開が芽生えるかもしれない可能性に二人が思いを寄せる。その象徴である『離婚届』は白い紙で、長方形で薄っぺらい。薄っぺらいからどこかから入り込んだ風でふわっと浮かび上がった。

二人がそれを目で追う。ヒラリヒラリと四つの眼球を弄ぶ紙つぺらは、ダンスをして楽しんでいる。二人の視界が部屋に一つしかない窓へと移った。窓には煙突が映り込んでいる。その煙突が、グパ―と、なった。

夫婦は、「あ」と叫ぶ。

白い『離婚届』が瑠璃色に変わったと思ったら、二人の巣窟である部屋全体でさえも瑠璃色に染め上げられ、部屋の一部である二人も瑠璃色に溶け込んでいった。二人は「なんだろうこの気持ち」と一緒にのことを思ったけれど、二人ともその気持ちの詳細を考えようとは思わなかった。

二人は窓を開けた。そして煙突から突き出て広がっていった、普段とは色の違うそのキラめきを見て、「ああ、綺麗だな」と思った。そして、「ああいうのを綺麗だと思う俺という男が、特に特徴も無いこの女と共にこれから生きていくということを、憂いでいるのかな」と男は思っていて、女は「何が起ったのかはわからないけれど、そういう風に何かが起こることを待つことに飽きたから、特に特徴も無いこの男と共に生きていくのを憂いでいる女が、私なんだよな」と思っていた。

今や瑠璃色のキラめきは天をどこまでも覆い尽くしていて、窓から見える景色は全て、瑠璃色の天蓋に優しくされていた。虫になって地上に砕け落ちていた翡翠とは違って、瑠璃色は空で広がったまま落っこちてくることは無いようだった。天蓋が太陽さえも遮っている。それなのに世界は、仄かに明るい。全てを囲い込むかのようにして仄かである。

二人はしばし見合った。



真っ黒な瞳で、男と女はしばらくの間、見合っていた。

煙突に生贄が捧げられた訳では無いし、預言者ドールが調査して変化が生じた訳でも無い。だが、煙突がグパーッと瑠璃色を放出しているその頂点の間際には、唯一、浅黒いものが一つ、点となってポツンと存在している。浅黒いそれが、手で仕草を何度も繰り返す。怠らず、様々な表現を手で作り出す。おそらく、それによって煙突からは瑠璃色が放出されているのであろう。煙突は手と連動するかのようにして、瑠璃色をキラキラと吐き出して村中を包み込む天蓋を形作る。

天蓋はまるで、空に浮かぶ海のようなだった。村中が夢見心地な霧囲気に包まれていって、村は何処もかしこも、海に沈みこんだかのような、深い蒼のような色調を帯びていた。

「慕呂果草々家、君無呂草々家、悲壯呂草々家、転転天鬼喜草々家、命果亡君我草々家、共憚狂狂嘆草々家、具愚天愚具天草々家、怪神貢食命草々家」

浅黒い肌の、妖艶が滲み出してしまう魔女が、懲りずにお経を唱えている。彼女は右手で仕草をしていて、左手にはビー玉らしき球体を二つ持ち合わせている。ビー玉二つを拳内でコロコロ転がすとギユイギユイという音が鳴る。そのギユイギユイという効果音に魔女は快感を感じるらしく、足先から頭まで、突き抜けるかのように小刻みに震える。震えながらお経を唱えていてさらに右手では仕草をしているのだから、忙しい魔女だ。

忙しなく三つの動作を行っている彼女の視線が、ある一点で停止した。魔女の目は見開き、そして機械的に両頬を持ち上げ、真っ白な歯が湧き出る。

「みつけたわぁ」

真っ白な歯の奥にある喉から、艶やかな一言。彼女は煙突に両足

をくっ付け、その両足をバネにして自らを砲弾に変えた。砲弾になった彼女はさながらスカイフィッシュ張りのスピードで蒼い海を切り裂いて進み、茫然と煙突を眺めていたレシ王女の目前へと、高速で、ほぼ一瞬で、到達した。

「うわ」先程入道雲に感想を洩らしたばかりの彼女は、茫然としていた彼女は、さすがに二、三步は後ろにたじろいた。だが、腰を抜かしたりはしなかった。

「意外と、驚かないわねえ」空中で停止した状態のまま、魔女は歯を剥き出しにしている。

突然、艶やかな女が砲弾になつて停止してきたという状況に、さすがのレシ王女も生唾を飲み込んでしまったが、すぐに緊張をほどいた。

「…驚いてたまるもんか、って感じですよ。急にグパーってなつた上に魔女が飛んできて睨み付けてくるだなんて、夢でだつてあり得ない組み合わせじゃないですか。ふたつ後ろに下がったけど、私はたじろいてなんていません。魔女なんか心底驚いたりなんかしませんよ。ていうか、せつかく入道雲が綺麗だったのに、なんだつて邪魔するんですか。あなたがこういうことをしたんでしょ」

レシ王女の意外に淡々と紡がれてくる言葉に魔女は感心した。

「よくわたしが魔女だつてわかつたじゃない」

「だつて艶やかか溢れ出てて恐ろしいことになっていきます」

レシ王女の瞳はまっすぐに魔女を捉えていた。鹿の真つ黒よりも真つ黒で、それにしてもどこかが突き離れているような、一言で表すには語彙が少々物足りなくなつてしまふ独特なそれは、まっすぐに魔女を射ている。魔女はそれを気に入った。

無重力で漂っているかのように身軽な魔女は、体を浮かせながら両の足を地面につけて、一呼吸。そして何を思ったのか、右腕をレシ王女の口内に向けて、一閃に突き出した。レシ王女が呻く間も無い、魔女の右腕はアツという間にレシ王女の口内に入ってきて、しかし一瞬で飛び出していった。さすがに驚いてよたよたとして、

レシ王女は何回か咽込み、何を急にしてくるんですかこの馬鹿チンが、と言いたかったが、口内に丸いものが入り込んでいる違和感に気がついて、言葉を発する前にその丸いのを吐き出した。すると、ビー玉だった。

「これ」

触ってみても紛れも無くビー玉だと思えた。透き通っている透明で、つるつるで何処にでもありそうな丸いガラス玉。それが魔女から突然渡されるというのだから、只のビー玉では無く何かしらの危険があるのではないか、とレシ王女は感じたが、しかしやはり、どこからどう見てもただのビー玉でしか無かった。そこで、擦ってみた。手で万遍なくそれが何であるかを探ってみた。だが、やはり正体はただの丸いガラス玉だ。その認識が変わるような異変は認められない。

「これは！」

叫ぶようにして魔女に尋ねた。魔女は、ははんっ、と腹が立つ笑い方をしてから「時間が経てばわかるわよお」などと言って来たが、ビー玉を渡された側としては、そんな答えでは如何ともしがたい。ビー玉を地面に落としてしまいたくなる。それが、放り投げたい。だが、迂闊に落したり投げたりしたら、それこそ魔女の思っ壺になっってしまうような感じでもある。

天に昇る洪水のごとく瑠璃色を放出している煙突と、浅黒い魔女に。レシ王女は交互に目配せをしながら。よし、こうなったら、と彼女は決意した。奇策に打って出してみせる。「はっ！」という掛声と共に、透明のビー玉を、ははんっ、と口を半開きに行っている魔女に向けて投げつけたのだ。

だが、魔女はそれを予想していたのだろうか、呆気なくビー玉を左手でキャッチしてしまった。キャッチしてからまたははんっ、と馬鹿にした笑いで真っ白な歯を剥き出しにした。

「過激な王女様あ」

と言った。レシ王女が顔をしかめるのと同時に、魔女はビー玉を

レシ王女に投げ返した。レシ王女は反応することさえ出来ずに、ビー玉を再び口の中に突っ込まれてしまった。今度は喉奥にまでいつてしまい、嗚咽を何度も繰り返してビー玉を吐き出す羽目になった。嗚咽を繰り返して下を向いている内に、魔女はレシ王女に近づいていた。身構える暇もない。だが、魔女は彼女に危害を加えるわけでもなく、地面でへたばっているビー玉を指差して、「ほら、そろそろ変化がおきる頃よお。知っている人が中で喚いでいるでしょう？」と、少し熱っぽく語る。

「知っている人？」

視線を下に向けた。透明なビー玉が、へたばっているだけだ。

「…え」「よく見てえ」

魔女の言葉を受けて、もう一度まじまじと透明を眺めてみる。すると、気が付いた。何に気が付いたかというところ、透明の中に異物が入り込んでいることに気が付いたのだ。その異物は、ビー玉の中で、小さな点にも見えだが、よくよく見るとそれはただの点などでは無く、虫らしく見えた。だが、さらに目を凝らせば、それが虫ではないことに気が付くことが出来る。視線を下に向けているだけではわからないから、レシ王女はビー玉を再び手に取った。手に取って、自分の目の前にまで持ってきて、瑠璃色を発している煙突と重ね合わせることで照らして、中身を見えやすくした。瑠璃色の照明だから太陽と比べれば十分な明かりではなかったが、しかし、虫の実態は次第に掴めて来る。次第に掴めて来るうちに、その正体がなんなのか判明した。だが、何故この人物がビー玉に納められているのかは、レシ王女にはわからなかった。

「こういうことができるってあり得ないですよね」

レシ王女は戸惑いながら、魔女に聞いた。魔女は呆気らかんとし  
ていて、

「そりゃ、できるわよ。妖術っていうのは、便利だものお」

と簡単に答えてみせる。『余裕ぶってるなこの妖女』、とレシ王女は嫌な気持ちにさせられたが、それを表面に出さないように気を

つけた。魔女にはどんな面においても勝てる気がしなかったから、不快を顕わにするわけにはいかない。

レシ王女はもう一度ビー玉を、その透明の中でうずくまっている点を、虫を、というか、人間を、長らく、月を眺める時の様にぼつとした表情で、そして真つ黒な瞳で、黒いコートを着た出目金の男を見つめるのだった。彼はビー玉の中で、何をしているのだろうか、おろおろと動き回っていた。彼はこちらに気が付いていないようだった。というか、自分がどのような状況に置かれているのかにすら、気が付いていないのではないだろうか。虫籠に囚われた虫。或いは牢獄に捕らえられた鳥。真つ黒な、蚊ほどにミニマムになってしまった預言者ドールは、もはや恐るるに足りない存在になっているかのように見えた。ビー玉を捻り潰すだけで、その命を奪い取ることが出来るような気がした。実際、簡単にもみ消すことが出来るだろう。

「お気に召したようねえ、そのザマにい」

一心不乱にビー玉を観察し始めたレシ王女に向けて、魔女はくすくすと笑み。魔女の声に気が付いたレシ王女は、瞼を何度も動かして、とても落ち着かなくなった。だが、真つ黒な瞳だけは変わらない。

「好きにしていいますか、これを」

彼女は魔女に尋ねた。魔女は歯を剥き出しにしてからすぐに元の表情に戻し、「できるのならば」と、真剣ぶつて答える。

「瑠璃の色は、これからこの村を穏やかに包み込んでくれるわあ。揺り籠よりも緩やかに、あなたたちはここで理想の社会を築いていくことが出来るわよ、太陽は見えないけれどねえ。だから、あなたが太陽になるといいわあ。全てを照らしてあげて、導いて上げれば、みんなはあなた無しでは生きていけなくなってしまうでしょう。月はいないのだから、大丈夫。あなたは、そのビー玉を好きに出来るのと同じように、この場所でホメレラ花を咲かすことも、みんなで微笑んで暮らすことも、何にもしないで屍になっていくことも、

全てが自由よお。だから、幸せになつてね。王女。あなたにはその権利があつて、義務でもあるのよお。それが、あなたのお父様とお母様が、願ったことでもあるのだからあ」

そこまで言うのと、魔女はくすくすと笑い、「それじゃあねえ」と、右手で仕草をした。

「どういふことですか、何か言わないとずるいじゃないんですか、あなた」

レシ王女が反射的に口を開いて何かを問いただすのよりも早く、魔女は重力に逆らうようにして地面から浮かび上がり、最後に歯を剥き出しにし、謎な言葉をたくさん残したまま、ぐんぐん上空に浮かび上がって行ってしまい、レシ王女が叫んで引きとめようとするのも聞かず、どこまでもどこまでも、瑠璃の天蓋へと吸い込まれていき、点になり、やがて姿を消した。

「……」

後に残されたレシ王女は、しばらくは啞然としたまま瑠璃の天蓋を見上げていたが、手に残されたビー玉に気が向かった。

「預言者ドールを私が好きにしていっていいことは、殺してもいいっていいことなんだろうけどなあ」

彼女は小さいため息をついてから、先程言われた言葉の意味を探るうとも思ったが、『お父様とお母様が願った』というそのインパクトが強くて、二人は生きていてもいいのだろうか、とか、あの魔女は二人のことを知っていて私のことも知っているということはどういうことなのだろうか、とか、これから先どうしよう、だとか、いろいろと考えを張り巡らせて見たが、頭が一杯になるだけだった。

誰か何か教えてくれないかな、と彼女は天に顔を向けた。瑠璃の天蓋ばかりが、チラチラと幻想的な感じで口では何とも言えない雰囲気を醸し出しているばかりだった。太陽や月は見当たらない。

なんだか別世界に来たみたいだ。

そう思うと心寂しさが湧いてきたりもしたが、だが心の奥底では

いつものように、別にどうでもいいか、と思っている自分も濃密に居座っている。

なんだかよくわからなくなった彼女は、「ああ」とだけ、呻いた。

悪夢の中には、女王と博士がいた。二人とも、すでに亡者だ。二人は、私が殺した。邪魔だから、殺してやった。女王は生かしてやってもよかったが、私を拒絶したから殺してやった。王がいなくなつて、権力の頂点が私になって、私はあの時、有頂天だった。女王は私のものになると思っていた。床に臥している女王はやつれていったが、それでも彼女はレシ王女の母だけあつて、美しかった。太陽の日差しを身に受けながらベッドで横になる彼女は、どんな女よりも気品に満ち溢れていて、同時に知性さえも持ち合わせていた。そんな女を我が物に出来ることに、私は喜びを感じていた。それなのに彼女は私を拒絶してみせた。彼女は私にいつも微笑んでいたが、それは哀れみの微笑でしかなかった。

博士も口うるさいやつだった。あいつは変に王に取り入っている奴だから、私を認めていないようだった。だが、王は私に国を任せただの。それなのに一々しゃしゃり出てくる男。邪魔で、やかましい。

だが、私は二人のことを嫌っていたわけではない。やかましいというのは、私にとつての好意に値する。やかましい存在というものは何時だって私に火をくべる。それで私は走り出すことが出来る。だから私は、あの善良で賢い二人が、やかましくもあつたが、しかしやはり、嫌いではなかった。だけれどもあの二人は私を拒絶していた。あの二人は私のことをただのエゴイストだとして評価せず、心内でせせら笑っていた。己らの方が人間として素晴らしいのだと思っている。そんな高慢を許せるわけがあるだろうか。私は二人のことを嫌っているにも関わらず認めているというのに、何故お前らは私を評価せず、嘲笑するのだろうか。だから、殺した。分からない奴は一生分からないのだと思つたから、殺すしかない。殺して、

私のことを理解できる人間だけの世界に変えることを、権力は実現してくれる。権力は力だ。

あの瑠璃の光は何なのだろうか。あれが、王女を馬鹿に貶めて見せた光なのだろうか。わからんが、優しい光のような気がする。あれは、私のことを拒否したりはしないだろう。そんな小さな事など気にもしないようなやわらかさじゃないだろうか。ああいったもので世界が満たされれば、そりゃ私だって二人を殺したりはしなかったさ。だけれど、あの二人は私を認めなかった。煙ったそうに顔をしかめることさえ隠し、哀れみの微笑みを醸し出すことで、私に対する侮蔑をひた隠しにしていた。

あの光のところに行けば、全てが認められるのではなからうか。それならば私だって全てを認めてやるさ。力など、捨ててやるさ。

その時はレシ王女のように、私だって、馬鹿になってみせるのだが。

そういうことを思いながら外に飛び出たトン大臣は、杖の肉体の癖に、赤青の触覚を巧みに使うことで村を歩いていた。

村人たちの中には、トン大臣の奇怪な姿を見て驚く者もいたが、大半は瑠璃の輝きをグパーッと放出している煙突に気を取られているから、彼に気が付くことすらしなかった。

「なんだ、あれは」

「あんなの初めて」

「綺麗」

「不思議な色だ」

「こんなときに、村長はどうしたんだ」

トン大臣にとって不思議だったのは、そうやって感想を洩らしている村人たちの瞳が、どれもこれも真っ黒なことだ。彼らの発する言葉にはどれもこれも実感が込められていなかった。口では驚いて見せているが、このような状況にも関わらず、村人たちは皆冷静だった。



そのことをトン大臣は不思議に思ったが、特別追求する気にもならないし、トン大臣自身、煙突に向かつて一心不乱に突き進んでいくことだけに集中したかった。

そんなトン大臣の瞳だつて今や真つ黒なのだが、彼は自分のことだから気が付いていない。

村を二十分程、赤青の触覚で駆け抜けて、ようやく煙突の麓にまでたどり着いた頃には、彼はかなり息を切らしてしまっていた。だが、トン大臣は倒れようとは思わなかった。休もうとは思わなかった。休む気分にならなかつた。肺も無いのに息をぜいぜい言わせながら、彼は煙突を見上げる。

間近で見る煙突は、トン大臣が想像していたよりも遙かに圧倒的だった。そこら中に彫り物がされていて、彫られているのは植物だと思えた。その植物にはそれぞれ涙が付けられている。『我が王国にいた優秀な彫刻家の劣化版と言ったところか』。トン大臣は彫刻に対してそのような感想を抱いた。だが、長さで言うならば山にも匹敵する煙突全てにそれが彫られているのだと考えれば、その量は凄まじいものだとも思えた。

しばし煙突の全貌を探っていたトン大臣。だが、ふと彼はそれをやめた。そして、赤青の触覚を、手を合わせるかのように繋ぎ合わせた。さらに目も瞑り、まるで何かに祈るかのような仕草を形作つた。なぜかはわからないが、こうすることが良いとトン大臣は突然閃いたのだ。

それから数分、しばらくは何も変わらなかつたが、ゆつくりと変わり始めた。トン大臣の脳裏に、何かが去来し始めたのだ。『なんだ』、と去来するものに意識を集中すると、その全貌がゆつくりと浮かび上がってくる。それは、数多くの映像だった。まるでテレビに映される画面のように浮かび上がっては消えて行く。長らく見ている内に、それは自分が今まで生きてきた人生の映像なのだ、と気が付くことが出来た。今まで目で見てきた光景が、ヒュン、ヒュン、と脳味噌の中で飛び交かっていた。

忘れることの出来ないような、印象深い映像ばかりだった。トン大臣を突き動かすに値する、深々しいしがらみばかりだった。過ぎて来る映像の一枚一枚を見るたびに、過去に感じた悔しさや憤り喜び愉しみ、全てが一拳に押し上がってきては、しかし何処かへと飛んでいく。今の自分が出来上がるまでの経緯。映像にいる、関わってきた多くの人間たち。

だが、それらは飛んでいってしまう。次々に言ったり来たりする映像を流し見る度に、トン大臣が根っこに持っている喜怒哀楽すらも、飛んでいってしまう。その内、映像がまるで他人の人生であるかのように感じられてくる。自分の今までの人生に対する実感が薄れて行き、感情が欠落していく。最後の映像は女王を葬った時の映像だった。その時に感じた不気味な取り返しの付かないような感情も、他人事のようになって、やがて、消えていった。すべてのしがらみが消えていく。

#### 明鏡止水。

目を、悟った賢者のごとく開く。真っ黒な目。生気が薄れているその両目で、彼は山のように聳え立つ煙突を映し込んだ。彼は、「おお」と呻いた。

洪水のように吐き出されている瑠璃の一つが枝分かれするかのようにつに干切れ、婉曲を描きながらトン大臣に向かって降り下って来ていたのだ。瑠璃は、降り下りながら細い糸のようなものになり変わり、トン大臣を一瞬にして貫いた。頭から杖の先端まで、音も無く。

だが、貫かれたからといって、トン大臣が死んだわけではなかった。彼は「おお、おお」「おお、おお、おお」と気持ち良さそうに咆哮する。一度だけではなく二度、二度のみならず三度。

スポン、とトン大臣を貫いていた細い糸が、小気味良い音をたててから、天蓋に舞い戻っていった。その光景を見たトン大臣は、「ああ、私も瑠璃色の一部になったのだな。あの天蓋は、私ということか」と、悟ったような真っ黒な目付きをして、そんなことを思っていた。トン大臣は、自らに巣食っていた過去からの様々なしがら

みが無くなって、これからは何にも気にせず生きていくことが出来るのだな、ということ想像してみてもフンと笑ってみた。真つ黒な目付きだった。

それからしばらくの間、そこで瑠璃の天蓋を見ていた。見ていると心が安らぎ、揺り籠の中で眠りに落ちるかのような感覚がした。

一時間だろうか、それとも三十分くらいだろうか。トン大臣はハツと気が付き、いかんいかん、何かをしなくては。こんなところに長らく居ても仕方が無い、しがらみが無くなったのだからこれからは幸せになれるだろう、よし、何をしようか、と、考えてみた。

考えたのは何分くらいだろうか、彼はしばらく頭を右へ左へ唸らせた。赤青の触覚で頭を押さえ込んだり掻いてみたりもした。だが、どうにも漠然としていた。

生まれて初めての経験だった。道筋が漠然としすぎている心持。何をすべきか、ということは今までの人生常に浮かび上がってきたのに、なぜだろうか、今はしたいことも浮かび上がってこないし、しなくてはならないことすらも浮かび上がってこない。

トン大臣は再び考え込んでみた。今度は、三十分くらい考えた。長い思考、長考。しかし脳裏に浮かび上がってくるのは純白の世界のみだった。かつてのように過去のしがらみが浮かび上がってきて、それによって火をつけられることは無かった。何かをしなくては、という衝動は、心の奥底のどこを見渡しても見当たらなかった。とても、不思議で、気味の悪い感覚だった。

トン大臣は再び、瑠璃の天蓋を、見た。ただただひたすらに、煙突からグパーっと、それは垂れ流されていた。どこまでもどこまでも瑠璃色が広がっていついていて、当ても無く途方に暮れているトン大臣を包み込んでいる。そういえば、太陽も月も見当たらない。

トン大臣の頬から、涙が一粒、零れ落ちていた。わけもわからぬい。だが、気が付いたら零れ落ちていた。彼は、瑠璃の天蓋を見ながら思う。

人生というものは、全くの嘘っぱちなのだ。今まで現実だと思っ

て真剣に取り組んできていたことは、なんてことは無い、幻のような存在である私が幻覚をさらに強めるために行ってきた虚構だったのだ。幻覚のような世界を現実だと捉えることが出来れば、その世界で真剣に生きていくことが出来る。そして死ぬことを恐れることが出来る。だが、ここはもう幻覚の世界のようなものじゃないか。全てに対してどうでもいいと言い切ることが出来るじゃないか。死ぬことすらもどうでもよければ、あとは何に対して真剣に取り組むことが出来よう。そうか、そうだったのだな。この世はお遊びだ。現実だ、と錯覚しやすい、幻覚と同じような世界が、ここだったのだな。

トン大臣はここまで考えきつてから、ハハハ、と笑った。そしてまたもや涙を流すのだった。そして虚脱したような、真っ黒な目をしたまま、数時間。

そんなときに、頭の中で、『ガチャリ』という、なにかが崩れ落ちる音が鳴った。トン大臣は、ん、と何が起こったのか理解不能だったので耳に神経をぎゅっとした。するとまた『ガチャリ』って鳴った。今度は下半身の杖の方からだった。なにかな、と思って下を見ようとした瞬間に、トン大臣の視界はプツツリと切れて臨終した。機嫌が故障したかのように、トン大臣の全身が崩壊されていつて、生首も、杖も、赤青の触覚も、全てがバラバラになって、地面に散らばった。

真っ黒な目は、瑠璃の天蓋を映した。

彼は、自分が死ぬことに気が付かなかった。

## ラピスラズリの天蓋 2

妙な所。黒い霧。一部分が明るい。人が二人。一人は魔女で、もう一人は鹿顔の男。ああ、再び金属音が鳴っている。茶色の瓶に又ルヌルとしたのが進入して行って、又ルヌルとしたのは茶色の瓶に埋め込まれていく。そうして茶色の瓶は一杯になった。だけれどもすぐに円盤に流し込まれてしまって、茶色の瓶はすぐに丸裸にされてしまつて、又ルヌルとしたのは円盤に埋め込まれていった。こうして円盤は豊穣になつて、見事に景色を映し出すのだった。映し出された景色には、一人の女と、バラバラになつてしまつたトン大臣が映り込んでいた。バラバラになつてしまつた豚は身動き一つしないまま、風にも吹かれないでげつそりとしている。一人の女は、何かを踏み潰して粉々にした直後で、踏み潰したそれを力強く粉末に変えていた。足で、苦つたらしく、踏み潰されていたのはビー玉。ビー玉が踏み潰されるあまりに粉末になつてキラキラと、蒼い。海にある珊瑚よろしく、ビー玉の粉末は粉々だった。円盤の映像からは、一人の女がどういう顔をしてそれを踏み潰しているのかは見えない。だけれどもビー玉はもう粉々だった。きつと預言者ドールは、踏まれてしまつたのだから、死んでしまつたのだらう。トン大臣も、粉々になつてしまつた。

魔女は、ふふん、といった含み笑いを作つてから、ビロード張りの肘掛け椅子で眠っている、鹿顔の男に近づいた。そして彼の寝顔をしばし、うつとり、といった様子で見つめ、それから彼の顎を手に取つた。口付けをしてしまいそうな勢いだつたが、しかし魔女は顎を手に取つたまま、しばし動かなくなつた。眠っている鹿顔と、浅黒い魔女。円盤に映っているレシ王女の姿が、霞んで消えた。

それからしばらくの後、村長はゆっくりと目を覚ました。彼の目の前には、見たことも無い、肌の黒い女が。

「…な、だ、だれだ」

たじろこうとしてから、自分が座っていることに気が付いた。慌てて首を回したが、知らない場所だったし、みるからに妖しい空間だった。部屋のような所にいるのに、部屋のある地点からは、闇がひたすらに広がっている。夜の闇よりも一層深い、純粹な黒の密集だと思える。それが、扉の区切りも見当たらないのに、部屋の途中から突然、無限にのびている。闇が部屋の明かりを蝕んでいるようにも見える。蝕まれていないほんのりと明るい部屋の中では、いや、ここが部屋と違っていい所なのかどうかも妖しいものだが、UFOみたいな円盤が中心に堂々と置かれていたり、壁に青っぽい蜂の巣らしきモノが掛けられていたり、モアイ像みたいなのが所々に置かれていて、モアイ像の配置の仕方には何の規則性も見出せなかった。だが、どのモアイ像も村長のことを、まじまじと、じつくりと、ぎとぎとと、落ち窪んだ両眼で見ている。

「こつちを見て。あんなお飾りなんか目にやっていちゃ、だめえ」  
村長の両頬を、いたわるかのように魔女は両手で包んだ。知らない空間に対しての注意ばかりで目をあちこちに動かしている村長を、無理矢理まっすぐにさせる。たるんだ言葉を連ねる。

「ずっと、待ってたんだから、これまでずっとお。あなたの近くに居れないから、毎日毎日、少し離れた所で見守るしかなかったのはあ、辛かったわあ。これからは、私とあなたはずっと一緒にいれるのよお」

ゆるゆるとして、彼女は「ああ」と洩らしながら、村長を抱きしめた。そして言葉を続ける。

「やっぱり、私はあなたがいないとダメなの。あなたの顔、体、心全てが私の近くにいてくれないと、やっぱり私は生きていないんだわあ。私はこんなにも力を持っているのに、あなた一人を手に入れるのに、こんなに長い時間を費やしてきたのよお。あなたは、まだ思い出せないのでしょうか」

魔女は鼻をすすっていた。感極まっているようだった。

何のことだかは、わからなかった。ただ村長は魔女の両目が、モアイ像と等しく落ち窪んでいるのには、不気味さを感じた。彼女の持ち合わせている揺ぎ無い深みを落ち窪みが示しているようでもあったし、ただ単にこれは、頭がパニクっているから目の前の女に脅えているだけの可能性もある。だが、村長は魔女のことを知っているような気は、した。忘却した、懐かしい故郷、があつたように、彼女も故郷の一部であるかのような、脳味噌の右奥斜めの位置でくすぶっている灰色の燃えカス。そんな、やや抽象的な、あんまり深くは思い出せない妙な記憶が、わらわらつと、なつた。だけれど別に何も思い出せない。そもそも、今頭の中で飛び出てきた『懐かしい故郷』…？

村長はハツ、と、目の前の魔女が笑っていることに気が付いた。

今、私がどんな表情をしていたのか私は知らない。だけれども、魔女は影で黒くなっている瞼から、瞳から、私の表情をじっくりと覗き込み、それによって何かを愉しんでいるように見えなくもない。不愉快になつた村長は声を張り上げた。

「なにがおかしい」

彼女は平然としている。

「おかしいのは、モアイ像たちよお。彼らつたら、自分で歩くんだからあ」

「あんたは、モアイ像みたいに目が落ち窪んでいるな」

「失礼ね。モアイ像ってのはあ、男の人の像なのよお。女の人はモアイ像にはならないのあ」

「色魔でモアイ像なんだろ。だつたらもう性別の領域を飛び越えている」

「ねえ。なんであなたは、急にそんなに強気になっているのあ？村長さんは勝気な人ではなかつたように思うのだけれど。きつと、思出し始めているのかしらあ」

魔女はくすくすと笑う。

村長は、自分の片手を頭にあてがつた。確かに、自分でも不自然

な気分がしてはいる。己が弱気な気性であることは自分自身理解している所であるが、何故、こんな状況で、私は強気な態度なのだろうか、わからない。だが、頭の中でモアイ像がぐるぐると回り始めている。

「私のもつと思ひ出させてあげるわぁ」魔女が村長の額に、指を突いた。

小突かれた村長の額は、トライアングルの音のような、研ぎ澄まされた高音をけたたましく三回、鳴らした。

村長の意識は混濁した。

『あの落ち窪んだ目の見えないモアイ像が、何体、私の方に瞳を向けて、ぐるぐるぐるぐる村人たちの冷たい視線であるかのように、ぐるぐると、だが、村人の冷たい視線以前に、私は暖かな故郷に身を置いていた時期があったはずだ。今、思ひ出した。魔女の言うとおり、何かを思ひ出そうとしている。暖かな視線、もつと大きくて穏やかな、モアイ像……？いやいや、違う、モアイ像では無い、かといって村人たちの記憶ではない、翡翠の儀式で生贄を捧げるよりももつと以前に、昔に、私は誰かと共に生きていた。だが、別れた。そして何かに出会った。であったのは、この女だ。そうだ、だが、魔女では無かった。こんなに艶やかな魔性の女ではなかった。たしか、もつと……湖……湖湖湖、そうだ、湖。湖で、彼女に出会った、彼女は聖女だった、魔女ではなかった、だが、瞳の形は似ている、落ち窪んでいなければ魔女のこの瞳は聖女のそれと同一じゃないだろうか。純白のローブは確かに裾が長く、彼女は間違いない清らかなる聖女だったはずだ。瑠璃の花を…瑠璃の花を、捧げたのだ。違う、落としたのだ、私は馬に跨っていた。だが、落としたのだ。落とすべきでない瑠璃の花を私は懐から落としてしまい、そして湖の中に瑠璃の花は沈んでいった。花なのに、沈み込んでいった。そして、濁っていた湖が一瞬にして、蒼く澄み切ったのだ。そうだ、そして現われたのだ、聖女が。それが、この魔女と同じ瞳をしていた。聖女は私に笑いかけ、私は思わず息を呑んだのを不覚に思ったのを



覚えている。と、同時に、あの時私は間違ひなく思った、そうだ、私は『救われる』と心の奥底で感じていたのだ。つまり、重荷を聖女が取り払ってくれるのだらうかと虚ろに期待していたのだ。それが良いことなのか悪いことなのか私は十分に理解していた。重荷を取り払うことは私の裏切りで、私を見送ってくれた国民たちの笑顔を切り裂くことと同意な行為なのだ。王女のことでも女王のことでも博士のことでも大臣のことでも私はあの時にあの瞬間に裏切ったのだ。そうだった、私は馬からわざとらしく慎重に降り下り、聖女に向かつてへりくだった微笑を向けて、聖女様我々をお救い下さいと申し出て、頭を垂らしたのだ。すると聖女は指を突き出したのだ。蠟のように白く細長い指だった。その指の指し示す方向の先に、鋸型の純白の羽を生やした、大木があった。私はそのように幻想的なものは書物でしか見たことはなかったが、それが現実だと理解することは出来た。葉の代わりに羽を。鋸型の羽が何枚も私に降り注いで、私の護衛の者たちにも降り注いだ。私の護衛の兵たちは像になった。何の像か、と聖女に尋ねたら、モアイ像です、と聖女は答えた。だが私はモアイ像にはならなかったはずだ。私は尋ねた、「なぜ私はモアイ像にならないのですか」と。聖女は微笑んでから、何も言わず、瑠璃の花を私の胸に授けてくださり、恩恵を与えてくださった。そして彼女は私に「あなたが私の待ち人です。あなたを、何よりも愛す」と述べたのだ。覚えている。優しい声だった。』

村長の額に入り込んでいた指が、気持ち悪い音をたてながら抜き取られた。抜き取られた魔女の指は、極彩色に染まっていた。時間が経つとその極彩色も失われ、かりんとうの様に浅黒い指に、戻った。

視界が次第にはつきりとしてきた村長は、その指が、聖女の蠟のように白く細長い指と同じ形をしていることに、気が付かされた。

「……あ」

だらけた姿勢のまま、間拔けな一声。かつての自分を思い出した。「やはり、あなたが……。そして、私は」

「そう。あなたが、王様ですよ」

魔女が村長に口付けをした。すると、みるみる村長の鹿顔は容貌を変えて行き、額から『三』と書いたような皺が飛び出てきて、元々ケ気味だった頬は、表面の皮膚が多少ただれた。小さなシミが顔に少しだけ出てきて、鼻先は瘤のように腫れ上がり真っ赤に。顎は、尖っていて細い。福耳で。彼の頭の天辺に、クレーターが出来上がった。

年相応の、老け顔。だが指導者としてのカリスマ性というものなのだろうか、たしかにそんなじよそこの初老の男性と比べれば、品格と威厳が、見受けられる。動物に例えるならば、彼はハゲワシと言ったところだろうか。鹿と比べれば、肉食になった分強そうであるが、年を取ってしまった。

「ああ……ああ……」

王は呻く度に、村長だったころの記憶が、全て作られたものだったということ思い出してきた。それだけではない、思い出している記憶が正確なものならば、実は、村だって幻だった。『私の願いを叶える』ために作られた箱庭。それが、私が十年近く治めて来た村の、正体だった。

そうなのだ。なぜ、煙突のことも生贄のことも儀式のことも神隠しのことも、ほとんどの人間が追求してこなかったのか。その理由は単純なことで、それらのこと全てが即物的に作られた偽りだったからなのだ。箱庭の世界の中では、余計なことは追求されない。追求されれば、箱庭のほころびが浮き上がってしまうから、みんな違和感が付かない。だからこそ、元々が唯一作り物でない、記憶を消された私だけが、その違和感に気が付くこと出来た。村の存在全ては、魔女にコントロールされていたに過ぎない。箱庭の創造主たる彼女に、『翡翠で栄える村』は形作られたのだった。まあ、形作られたといっても、村のほころびに関するタブーを無意識的に避けようとする点を除けば、彼らは通常の人間と何も変わらない。だから、翡翠の宝石は現実世界に売り捌かれるし、他国の品物が村に

入り込んでくることもある。とにかく、この村が魔女による作り物であるということが、ばれなければ問題が無いのだ。で、そういったことがばれることは必然的にあり得ない。魔女は全てをコントロールしていて、煙突を作ることによって村人たちは土地から出て行くことが出来ないし、それでも出て行こうとする者は神隠しに遭わせてしまう。作り物に関するタブーに気が付くような勘の良い人間は生贄に捧げられるようになっていく。

そうすることで作り物の『翡翠で栄える村』は滅びることもせず、そして私は、この村の村長として、存在することができた。幼少時代の頃からの嘘の記憶を与えられ、姿を若々しくしてもらい、この村の若き精鋭として、村長の座に就いたのだ。

私の願いは…そうだ、私は三つの願いを叶えてもらったのだ。それも、聖女はその願いは全て無償で叶えると誓ってくれた。だから私は願ったのだ。一つは床に臥してしまった女王の命の無事。一つは王女が幸せに過ごしていけるようになること。一つは私の人生のやり直し。最後の願いに関しては、結局、聖女の箱庭の世界で体験させてもらうに止まった。私は治めていた国にうんざりしていた。国民たちは何でもかんでも、私のせいにした。私のせいにすれば物が簡単に進むから、何でもかんでも私のせいにしたのだ。彼らのせいで私の人生は無駄にされたのだから、私には人生をもう一度やり直す必要があった。だから、私は人生をやり直した。まあ、結局この村の人間たちも国のやつらと同じだったのだが。結局、聖女の作り物にしるそうでないにしろ、人間は人間だった。

まあ、とにかくやり直すという点では、聖女に願いを叶えてもらったのだから、文句は何一つ無い。素知らぬ他人として、成長した王女と話もさせてもらったのだ。彼女に恋のような感情を抱いていたのは、あれは恋ではなかったのだな。私の眠っていた記憶が、わからしていたのだらう。

そんなことを思いながら王は、気が付いた順から、気になることを魔女に問い詰めていった。

「聖女よ……いや、魔女か。女王は、どうなったのだ」

王としては、人生のやり直しまで実現させてくれる魔女のことだから、女王を健康に戻してやることなど容易く為してくれたのだから、と安易に思い込んでいた。

だが、問われた側の魔女は、先程まで甘くたるんだ表情だったのに、急に曇った顔つきになり、先程まで王にべったりだったにも関わらず、突き放すように立ち上がり、円盤の方へと歩いていってしまった。王に背を向け、どんな顔をしているのか悟られないようにしている。

「…彼女は、死なせてしまったわあ。救うと誓ったけれど、死んでしまったの。殺されてしまったのよお」

魔女の言葉に、王はどこかから血が集まってくることに気が付いた。脳味噌の中を締め付けるようにして騒がしく、血が。

「あんたは、救うと言っただろう！なんでよりによって殺されるんだ、どういうことだ！何で殺される！何が悪かったのか教えないか！」

王は唾を汚らわしく撒き散らした。ビロード張りの肘掛け椅子から勢いつけて立ち上がり魔女の後姿を見る。怒鳴りつきたい衝動が止まない。

魔女は王に振り返った。彼女は冷静だった。別に悲しそうでも嬉しそうでもなかった。

「彼女が願ったのよ。あの人は、殺されることを願ったのよお」

その言葉を聞いた王は、茫然とした。いわゆる、目を点にする状態になった。血はしかし余計に集結してくる。脳味噌で暴れまわっていたのが目頭に、研ぎ澄まされてくる。王は、喚いた。

「彼女が死を願うわけがないだろう、魔女！貴様は彼女を救う力を持ち合わせていなかったから、そのような嘘をついてるんじゃないのか！死にたいと願っていたのなら死なないようにしてやるのがあなたの仕事だったんじゃないのか、魔女！しかも、なんであなたは魔女なんだ！あんたは聖女だったはずだろうが、なんであなたは魔

女になつてゐるんだ！おかしな話じゃないか。魔女じゃあ命を救うことなんざ出来るわけがないじゃないか、命を奪い取ることしか出来ないだろうが！」

叫びながら王は頭を押さえ込み、苦しそうにウウと呻いた。血の密集が彼の頭部を痛めつけているかのようだった。

「死にたいと願つてゐる人を生かしてあげれるほど、私は力強い女じゃなかったのよお、王様。彼女は『私のような穢れた存在がこれ以上生きる資格は無い』、と言つたわ。聖女だった私でさえ、その姿を清いものだと感心したものよお。だけれど、確かに彼女の内側にはドス黒くて汚らわしい、脂肪のようなモノがたくさんウズウズと居づいていたのよ。だから、私は」

「…それを吸い取つて、そして貴様が魔女に変わった、とても言うのか」

王の直感には正しかった。魔女はコクリと頷いた。

「彼女は殺される時には、おとぎ話に出てくる人物のような清さで死んだわあ。人間として死んだのではなく、聖女として死んだのでしようねえ。死に顔は、とても美しかったわよお」

「…」

何かが弾け飛んでしまつた王は、茫然とした表情のまま、再びビロード張りの肘掛け椅子に腰を下ろした。干からびてゐるかのような、力尽きた動物の虚脱さが、王の全身から滲み出た。

「誰に殺されたのだ、誰に。それに、そうだ。王女はこれから先、本当に幸せになれるのだろうか？村長だった時に話した王女は、不幸せそうだった。少なくとも、幸福そうではなかった。人を殺したいと願う女が、幸せなはずもない。幸せになれるはずもない」

王は自分で言いながら絶望を感じてきたのだろうか、また頭を押さえ込んでしまい、二度か三度ため息をついた。

魔女は、そんな風に落ち込んでゐる彼の顎を手にとって、少し強引に引つ張りあげた。無理に前を向けさせると、「この円盤に、女王を殺した人間が映り込んでいるわあ。そして、王女がきつと幸せ

になれることもお、理解できる」

魔女の静かな言葉つきには、妙に確信めいたものがあつた。だから王は、またもや、立ち上がった。よたよたフラつきながら、魔女に導かれるがままに、顎を手にとられたままに、円盤へと足を進めたのである。

よたよた、フラフラ、辿りつく。魔女がトロトロとしたものを、茶色の瓶から垂れ流す。トロトロが円盤に垂れると、円盤は水面の波紋であるがごとく揺らめいた。「今から、殺人者が映るわあ」魔女の一言。そして波紋が広がった先で、まず映り込んできたのは、やはり、バラバラになつていているトン大臣だったモノだった。今や顔は董トりに突つつかれており、顔としての形状を失つて肉塊となつている。

「この杖は…まさか、トン大臣か？」

瞳の奥で、憎悪か何か、黒々しいものが誕生して、王からやけに感情の無い声が発される。その無感情が、王の怒りの激しさを伺わせる。

「あなたが信頼を置いていた博士も、この男があ。だけれどこの豚大臣も、もう死んでしまつたわあ」

「死で許せるはずもない」

魔女が王の気を静めるために言った言葉も、王の怒りを高めるだけだった。だが、たしかに死んでしまつているのだから、怒りのやりようも無い。それは、王だつてすぐに理解できた。できるからこそ、怒りのやり場が無い。

その怒りを発散させるためであるが如く、魔女は、

「国民を殺したのは、預言者ドールの方ですわあ」

と、まだ王の知らなかつた事実を言つてのけた。王の頭の怒りがぶつ壊れて、遂に混乱が始まつた。「国民がどうなつたつて今言つたのだ？」

少し、間。しかし魔女は言つてのける。

「全員、死んだのよあ」

王は立ち上がった。しばらく、何も言わずに立った。かと思いきやまた座った。座って、そしてまた再び立ち上がった。何だか叫びたさそうな、獣が吠えるようなひどい顔つきになったと思いきや、平常の顔に戻って、俯いた。俯いたまま、最後に座った。

「そんな」

とだけ、言った。

しばらくすると、そのしばらくは長かったのだが、彼は、痙攣を始めた。手や足や顔が小刻みに震え始め、まぶたさえも震えている。意識があるか、ということさえも怪しい様子になった。受け入れなければならぬ事実の莫大さに、体が縮み上がっているかのようだった。といつてもこういう結果になったのは王自身の責任でもあるわけであって、体が縮み上がるなんて恐怖を体験するのは、同情すべきことでもない。彼は、国民にうんざりしていた。だが、そのことと国民を全滅させたことは、無関係だった。国民を全滅させたということとは、王としてもっともあるまじき結果だ。彼は、その結果を受け入れたくないが故に、震えているのだろうか。だが、彼は三つの願いの中で、国民のことは一言も触れなかった男だ。国民にうんざりして、別の場所で人生を再び謳歌したい、と願い出た男だ。そんな男には、後悔する権利だつて与えられてはいないに違いない。それは紛れも無い事実だ。それなのに、彼は苦惱してみせる。演技ではなく、本気で苦しんでいる。

「…なんとということだ、ああ、なんとということなのだろう」

魔女から見た彼は、ひどく哀れだった。四方八方を何かに責め立てられているかのようだった。魔女は王に近づき、慰めるようにして王に手を重ねる。王は何かから逃れるためだろうか、重ねられた手をぎゅつと力強く握り締めた。そして、王は情けなく「ああ、ああ」と何度も呻くのだった。しかし、しばらくすると呻くのを止めた。彼は首を持ち上げた。目は充血していた。

「預言者ドール。預言者ドールに、会わせてくれ。殺さねばならな

い、奴を、私の手で」

王は片言だったが、それゆえに切実さが伺えた。怨霊の水圧で溺れる寸前の彼は、道連れに預言者ドールの首を引きちぎろうとしている。魔女は首を振った。王が溺れるのを目の当たりにしながら、彼女は首を振って彼の願いを根絶してみせた。「なぜだ」と王はもがき苦しんだ。魔女はゆつくりと立ち上がり、円盤へと王を導いた。王は手を取られたまま、赤子が親に引つ張りあげられるように、円盤の前にまで連れ出された。

「御覧なさい。あなたが復讐を遂げるべき存在も、今や片割れは董トりに腸を突付かれえ、もう片割れは、人間としての姿を失ってしまったあ。妖術使いとして生きてこの世を謳歌した代償が、あの姿です。彼はこれから、死ぬまであの姿のまま生きていく。復讐を為すまでも無く、彼はこれからもがき苦しんでいくことでしょう。だから王、気を静めてください。落ち着くのです」

顔が切迫と圧迫で世の中で生きることになった中年男のようになり始めている王は、円盤を御覧になって、さらに切迫した。機械でプレスされたかのように打ちのめされた顔になった。

「見苦しい。妖術を使った者はこんな成れの果てに墮落してしまうだなんて、私はいままで知らなかった。地獄絵図じゃないのか、こんなもの。人間とは思えない、むしろ人間を食ってしまいそうな姿だ」

王はその場で座ったり立ったりを繰り返した。屈伸をしながら、頭を両手で抱え込んだ。「ああ、ああ」ともはや何かが崩壊している。そんな王を見る魔女の目は、先程よりも強く彼を労わっていて優しかった。

「しっかりと見るのよ、王。人間ならば誰しも、あのような姿になることはあり得ることだわあ。聖女だった私でさえ、己の願望を叶えるためにこうして魔女の姿に変わった。それならば、あのように気味の悪い姿に変わった預言者ドールは、私たちの鏡のようなモノなのよ。もちろん、それは魔女の私の、独りよがりな捉え方だけ



れどねえ。王、あなたは、これからもう一つの鏡を目撃してから、意識を失っていくことになるわ。もう、心残りは無いはず。全てのこととは伝えたわあ。王女はきつと幸せになれるし、女王は女王の願いを叶えたまま空に消えていったあ。そしてあなたは、国民を死なせたことも女王を失ったことも、全てから逃げ出して人生をやり直そうとしたことも、全てのことを忘れて薄っぺらい紙切れになれるわあ。これからは、あなたは私のものですから。私の待ち人だったあなたは、体を残したまま、人間を辞めることが出来るわあ。ほら、目を閉じてえ」

王は頭を抱えたまま、充血の眼をゆつくりと閉じた。考えることを放棄したかのような素直さで彼は、瞼を閉じることが厭わなかった。王はボロボロ、男の癖に情けなく泣いていた。「ああ、ああ」という空しさだけが募る呻きだけは、止めなかった。

妙な所は、大の男のすすり泣きばかりが垂れ流れていたものだが、時間の経過と共に、黒い霧の漂う音さえも聞こえてきそうな静寂が集まっていた。妙な所では、魔女が貪っている。魔女が貪るたびに、魔女は黒ずんでいった。かりんとうよりも、辺りに漂う黒い霧よりも、魔女は黒ずんでいった。それに対比するかのようには、貪りの対象となつている老体は、石灰石の塊に。彼は腑抜けた顔のまま、頬に落涙の跡も残すことで憐憫を醸し出して、石塊になった。

黒の濃霧など物の数ともしないほどに純白な、石塊であった。

### ラピスラズリの天蓋 3

ビー玉を踏み潰してから、しばらく。

瑠璃の天蓋が、雲がやがてどこかに消えるのと同じように、無くなってしまった。そしてペンキで塗りたくったような群青の空になった。入道雲がでっかく、迫り来るような巨大さと圧迫さで、群青の中空に浮かぶ城塞のように浮かび上がっている。

包容力凄まじい、空。そんな空に包まれている、ポツンとした点。それは村の煙突。そして、そのポツンとしている点よりも更に小さい点となって存在しているのが、レシ王女である。

そんな彼女は、群青を仰ぎながら思う。現実を引き戻された気がする、と。悲しさが溢れ出てきた様な気もしたけれど、そんなことよりも気にしなくちゃいけないヤツがいる。

群青から目を離し、前を見た。

そいつは、今彼女の目の前で、仰向けになって、ゴロンと寝っころがっている。

見た目は、蜘蛛と人間が混じり合ったという感じだった。この村に入った時に現われた、色々と混じり合っていたあれ。角形の、鋳物やら植物やら動物やら。それに近い感覚だけれど、目の前にある蜘蛛と人間の混ざり合いは、あれらの可愛らしさなど一欠けらもち合わせていない。ひどく、残酷な程にグロテスクだった。レシ王女は蜘蛛が嫌いじゃなかったけれど、今、足をジリジリとそいつから逃がしてしまっている。目の前の存在から逃れてしまいたいと焦っているのが、彼女自身ひどく自覚できる。

「ねえ」

話を通じれば、或いは恐怖も薄れる。

そう思ったが、蜘蛛と人間の混ざり合ったモノは、ただ仰向けになっただけで、死んでいるようにも思えた。だけれど、生きて

いるようにも見える。要は、生死不明。仰向けになっているのは死んだフリをしているだけ、という可能性も考えられなくは無い。

「あなたは、預言者ドールなの。それとも、蜘蛛なの」

仰向けのままだ。

「ねえ、毒とか持つてるのかな。突然、毒液とか吐き出されたら嫌だと思っただよね、そういうのは自分勝手だからよしてね。だけど、ちよつと、あなた、気持ち悪いよ」

仰向けの体がモゾッと動いた。

レシ王女は後退り。数歩、下がった。「冗談だよ、今は」と、肩を強張らせながら、足元にあつた花を踏んづけた。感触に気が付き、「あ」と言いながら、足元を見る。青色の花が一輪咲いていた。彼女は足元の青色の花を手に取った。馴染み深い花だったから、彼女は自然と緩んだ。それは、ホメラ花だった。

レシ王女に踏みつけられたホメラ花は、土を被りながらも凜としていた。涼しげに、花開いたまま、ひんやりと冷気を。女はそれを摘み取り、鼻ですすと匂いを嗅いでいた。

二歩、あるいは、三。彼女は、ホメラ花を大事なもののようになり、手の平で抱え、仰向けになっている怪物へと近づいた。慎重に、しかし歩を止めないようにした。そうして、怪物とレシ王女の距離は、人と人が手を取り合える所までになった。レシ王女はそこまで来て、足を止めた。

怪物は、もぞ、もぞ、とさつきより激しく動いた。

「あげる」

供花をささげる。出目金のような預言者ドールの両目の先にささげる。

レシ王女は、下がった。下がって、彼の様子を伺った。

彼は、しばらくはもぞもぞと動くだけだったものだが、何を契機にしたのだろうか、突然、仰向けだった体をひっくり返すのみせした。ひっくり返っていた彼がひっくり返ることで、八本の足で、地に足が着いた。

人間の顔なのに、そこから下は蜘蛛である。

レシ王女はさすがに悲鳴を上げそうになったが、しかし喉はひくつくばかりで、嬌声は上がらなかつた。彼女が叫び声を上げる間も無いままに、事態は進行していく。

足を地に着けたばかりの彼は、顔の両耳から、蜘蛛の足のようなモノをゆつくりと伸ばした。その伸び出て来た二本で、彼は青い花を掴み取った。花瓶を持つ時のように慎重に、ゆるやかに、彼は完全に蜘蛛のそれである毛むくじらの二本で、花をかかげたのである。

供花を崇める出目金な瞳は、真つ赤だ。

かかっていた花を、彼は胴体の背甲の部分に、植え付け始めた。痛くないのだろうか、人間の耳から飛び出た蜘蛛の足は、蜘蛛の背甲にあたる部分を掘って見せた。掘られることで生まれた窪みに花は植えつけられ、土を被せられる代わりに、掘られた部分がすぐに新たな甲殻で覆われた。

ホメラ花を、気に入ったようだった。

群青の空の下で、入道雲の城塞から見れば、彼ら二人は蟻んこよりも小さくて惨めな姿だったであろう。その二つの生物は、元々は同じ種であつたわけだが、今はお互いにコミュニケーションの距離感を計りかねている。いや、計っているのは姿形が変わっていないレシ王女の方だけで、姿形が異質なモノに切り替わった預言者ドルは、レシ王女のことを今までと何ら変わらない感情で見ているのかもしれない。

しかし怪物は、何の予兆も含めないままに、咆哮した。犬が鳴くような、けたたましい喚き声を入道雲に向けて奮わせる。聞いていて気持ちの良くなるものではなく、憎しみや嘆きが満ち溢れているそれだった。

レシ王女は、いわゆる戦慄を、した。

怪物が向かって来たのである。八本の足をドスドスと地面に突き刺しながら、咆哮は絶やさぬままに、近づいてきたのである。出目

金の瞳の血走りが怪物の本性を示してきたことで、レシ王女は本格的に後退りをした。

群青の下で、追いかけて。ドスンドスンと、ズサーズサー。

砂浜で駆け回るカッブルみたいな古典的な平和の情景が浮かび上がってくるはずもなく、追いかけているのは怪物、追いかけられているのは王女、となればヒーローが現われてもおかしくは無いものだが、群青の空と入道雲の城塞はひたすらぼんやりするばかりだった。つまり、助けらしい助けは見当たらなかったものであって、村人の影すらも皆無。ならば、誰が彼女を救ってくれるだろうか。いや、彼女から助けを見つけに行くしかなかったのである。

幸い、怪物よりもレシ王女の方が足は速かった。怪物は八つの歩脚、その関節をぎこちなくみだらに動かすばかりで、上手に歩けないようだった。何度も足をしくじる。足を挫くような姿勢になるたびに、背甲に備え付けられているホメラ花が、静かに右往左往する。その青い花のさまは、でっかい犬の背中に乗って楽しむ幼子のように、儂い。

レシ王女は、息を切らしながら、ポンチョを揺らしながら、入道雲を見つめながら走る。

走る。走る走る。

走る。走る走る。

走る。走る走る。

どこまでも彼女は駆けて行く。蜘蛛の怪物に追いつかれぬよう。

助けを求めるために。

青空の下で駆け抜ける王女。村を、ひたすらに駆ける。

田んぼを横切って。雑木林を駆け抜けて。ひたすらに群青な空の下で。

八つの足はスピードを上げていた。ぎこちなさが次第に失われて、怪物はレシ王女との距離をゆっくりと縮めていく。

反比例するかのようになり、レシ王女の息は、どんどん荒くなる。

そして、遂に彼女の足が止まった。アッという間に怪物は王女に

追いつき、預言者ドールの出目金の血走った眼が、彼女に狂氣的な瞳を向けている。頭突きで彼女を地面に張り倒し、八本の足で囲って、彼女を逃げられないようにした。

レシ王女の視界に広がる、蜘蛛の内側は真つ黒で、油だらけ。数滴、怪物の腹辺りから油が垂れ落ちてくる。蜘蛛の怪物の肉体はまるで、動物の汚らわしい部分を命一杯集めたかのような汚れだった。レシ王女は呼吸を激しくしながら、しかし目をぎゅっと瞑り、何度も首を左右に振った。

「どうしよう。何がどうなってもどうでもいいって思って生きてきたのに、私、嫌だ。あなたに、殺されるだなんてゴメンだ。私があるあなたを殺すべきなのに、私が殺されるの？そういうのどうでもいいと思ってたけど、ただあなたに殺されるのはゴメンだ！」

目を見開いて、蜘蛛の体の先端にくっ付いている、預言者ドールの顔を見た。預言者ドールの歯が白いの、やけに映える。

そして、喋らないと思っていた怪物が、口を開いた。

「イヤア。君は僕に殺される。僕は人間じゃなくなったので、今日も明日もみんな殺す。弱肉強食っていう奴だよ。世の中は不平等。力や数が多いものが、世界を思い通りにできたりするのは事実だ。だから、あなたは怪物の僕にとっては虫けらの人間だから、簡単に殺すことが出来る。これは喜ばしいことだ。怪物になれたから、人間を殺すのは容易いことになった。残念だね」

そこまで一息に述べてから、怪物は「ヒヒ」と引きつった笑い声を上げたが、それは悪質な人間と同様の代物であった。もちろん、レシ王女からすれば引きつった笑い声だけでも十分に背筋は凍らされたし、死が目前にまで迫っていることを意識せざるを得ない感じにはなる。

怪物の八つの足の一つが、レシ王女を貫くために持ち上げられる。ゆっくり念入りに、力を見せ付けるかのように、怪物は足を持ち上げ、「青い花をくれてありがとう。おかげで背中が可愛らしくなった。だが、君は死んでいい」と冷たく言い放った。言った次の瞬間

に、躊躇ないスピードで、足は振り下ろされた。の、だが、その足はレシ王女の御体を貫くことは無かった。というのも、彼の振り上げられたその足に矢が突き刺さってしまった、足が関節とは逆の向きに折れ曲がってしまったからだ。

「ひぎい」

と情け無い声を次々に上げることになった。彼の八つの足には、絶えることなく矢が突き刺さっていったのであって、せつかく歩くことにも慣れていったというのに足は役に立たない棒つきれに変えられていく。彼の八本の足全てに矢が突き刺さった時、彼は「ウギヤア」と悪役らしい蛮声を最後に、再び仰向けに寝っ転がったのであった。背中に植えてあるホメラ花は潰れてしまったことであろう。「大丈夫ですかー」

啞然としている王女に弓を抱えた男が数人、走ってきた。それらの人間全員が、真つ黒な瞳をしている。その内の一人が王女の手を取って、連れ出した。そいつは、ふくよかな男で、喋り方も何だかのっぺりとしている男だった。

「いやー、危なかつたですねー。なんですかあれ、化け物ですよ。恐ろしい光景だ。あんなものが現われたのはさっきの綺麗な空と関係があるんでしょうか。さ、何をしてくるかかわかったものじゃないもつと遠くに逃げましょう」

ふくよかな男がレシ王女を連れ出す間に、怪物にはさらに矢が与えられて行き、怪物はまるで針山みたいな様子に変わっていく。一本の矢が突き刺さったすぐ隣に、また一本。その反対側にも一本。で、その近くにもまた一本。次々に、先端が銀色に輝いている矢が、仰向けの怪物に容赦なく襲い掛かっていく。これではさすがの怪物もどうしようもない。人間である顔の部分も、矢が突き刺さりまくることによって、もはや何なのか判別できないほどの有様に変えられてしまった。最終的には、矢しか見えなくなった。怪物は、矢の集合体になった。

『かわいそうに』と言う者はいない。矢を放っている人間たち全員

が、真っ黒な瞳で、何も考えないようなトロンとした目つきをしたままに、矢を放つ。その様はなぜか少し機械的で、気味が悪くもあつたし、中には『ウヘヘ』と笑いながら矢を放つ者もあつて気持ちが悪かつたが、しかし、そのおかげで、怪物はしっかりと駆逐された。

連れ出されているレシ王女の耳に、怪物の断末魔の叫びが聞こえた。

「…僕はただ、…世…あ…」

すでに遠く離れていたから、何て言っているのかは、わからなかつた。



## 空に花を捧げる

月が昇ったりする。その月は、右と左で、はっきりと色が別れている。

白と黒である。

瑠璃の天蓋が消え去った世界には、太陽は存在していない。群青が天空に塗りたくられていて、山々が稜線を描いている。なぜ空は明るいのか、村で住まう人々は光り輝くことが出来るのか。それは、きつと魔女の箱庭だからこそ生じる現象なのだろう。村人たちは、今日も明日も、田を耕す。畑で、果実に潤いを与える。彼らは真っ黒な瞳のまま、生贄の必要が無くなった豊穰なる土地で、ほがらかに生きていた。なんらのコダワリも持たずにクワを振り下ろし、そしてまた振り上げた。みんな真つ黒な瞳だったけれど、たしかに彼らは呼吸をしていた。呼吸をしながら、毎日なんてことは無い会話を繰り返していた。

「なあ、この俺たちを縛り付けている重りというのは、一体誰が考え付いた装置なんだか、わかるかお前？」

一人の男前が、一人の普通顔に尋ねた。

「何を突然言い出すのか訳はわからないが、説明してはくれないかな。人と人は正確に言葉を発しあわないと物事が通じないってこと知ってるか」

男前は、ははん、と普通顔を見下した。

「そんなに正確にならなくても、通じ合う時は通じ合うさ。まあ、説明させてもらうと、つまり、世の中で言っついわゆる重力というやつだな」

普通顔は、ふざけんな、と男前に怒りの表情を作った。

「何なの、お前。はじめっから重力って言えよ。ややこしくなるだろう。まあ、いいや。休憩時間は終了。クワを振るって、飯を作るとしようじゃないか」

男前は、特に面白くもないような表情を作ってから、「そうだな」と言つて、立ち上がった。

二人はクワを持ちながら、村のあぜ道を歩く。その途中に針山があった。二人はそこに辿りつくると立ち止まり、手を合わせて、念仏らしきものを唱えた。唱え終わった後、「今日も我らを、お守りくだせー」と、特に気持ちも込めず言い終えたら、再び歩き出した。

そうして二人が畑に辿りつくと、先客がいた。

レシ王女だった。

「二人とも、遅いよ。休憩しすぎだよ。さー、さっさと畑を耕してさ、ご飯にしよう」

レシ王女は言いながら、クワをズドンと、振り下ろす。

男前と普通顔は、

「へい」「へへえー」

と、へりくだつたような呻き声を発した後、クワを畑に振り下ろし始めた。ズドン、ズドン、気持ちよく、テンポよく、畑はどんどん耕されていく。

その途中で、レシ王女が驚いたような顔つきを作つて、「あ、そうだ。お参りはした？ 私たちの、お守り神様に」と聞いた。二人は平然とした表情で、「もちろんですよー。今日も、お変わりなく我らを見守ってくれてますよねー」と白々しい風に言った。レシ王女は「そう」とだけ言つて、また畑を耕し始めた。クワで、ドズン、トズン、と、畑を耕していく。

やがて、白と黒の月が、群青の中を昇り始めた。それを見た三人は、もう夜になったのだと気が付いて、クワを振り下ろすのを止めた。

三人同士で、アイコンタクトを交わすかのような仕草をした後、畑から引き上げていく、畑から出て行く時に、一度だけ「おつかれさまー」と言い合つて、その場を後にした。

帰り道に、針山を拜むのは、忘れなかった。三人、手を合わせてから、「今日も、ありがとうございました。明日もよろしくお願

します」と述べて、家に帰っていった。

三人が通り過ぎた後も、何人もの人が針山の所に訪れては、拝み通っていく。みんな、「今日も、ありがとうございました。明日もよろしく願います」と述べることは、忘れない。そうやってして、みんな家に帰っていった。

白と黒の月が山の稜線に引っかかり、やがて消えて行くと、また家の中からぞろぞろと、村人たちは畑に向かった。

空は群青のまま一度も変わらなかったが、次の日になったのである。

ブサイク顔の男と、奇妙な顔の女。その二人が話しをしている。

「私は思っただよね。太陽があつてもいいんじゃないかって。昔のようにさ。だけど、白と黒の月も綺麗だから、太陽がなくてもいいんじゃないか、とも思っただ。あんたはさ、どっちが良いと思う？」

ブサイク顔の男は考え込んでから、

「どっちでもいいじゃない」

と言った。奇妙な顔の女は、

「それもそうね」

と納得した。しかし、すぐに別の話題を持ち込んだ。「…じゃあ…」ブサイク顔の男は「どっちでもいいじゃない」と答えた。奇妙な顔の女は納得した。そしてまた別の話題を作った。「…じゃあ…」ブサイク顔の男は「どっちでもいいじゃない」と言った。奇妙な顔の女は「それもそうね」と言った。そうこうする内に、針山に辿りついた。

「今日も我らを、お守りくだせー」

二人は拜んでから、畑へと向かった。畑には、先客がいた。それは名物夫婦だ。離婚届でいつも言い争う、微笑ましい二人だ。結局、まだ二人とも別れていない。

「まったく。今日も退屈だなー」と夫は言っている。

「あなたも退屈よ」と妻が言う。

「そうだなー」と夫が言う。

「繰り返してるのね。ひどい話」と妻が、言う。

奇妙な顔の女とブサイク顔の男は、微笑ましい表情で二人のことを眺めながら、クワを振るい始めた。その黙々とした作業を見て、夫婦たちも黙々と作業を始めた。時折、雑談なども交わした。どの雑談も、平和な内容だった。

白と黒の月が昇り上がり始めた時に、その四人はクワを振り下ろすのを止め、畑を後にした。アイコンタクトをしてから、最後に、「おつかれさまー」とだけ、言った。

三十日に一度、月が昇らない日がある。その日にだけ、村人たちは畑を耕さない。針山の所に集まって、全員で輪を作る。手を繋いで、朽ち果てた土の塊のような、針山を、見守る。何年も前に突き刺さった矢たちは、いまだに何百本も、突き刺さったままだ。悲しんだまま、針山は動かない。

「さあ、みんなだ」

レシ王女の号令に続いて、みんなで感謝の言葉を述べる。「ありがとうございますー」と、口を揃えながら、輪を作ってくるくと針山を崇める。

すると、針山の、矢ばかりのせいで見えない内側から、何かが生え出てくる。それは、青い。

「出て来た」

次々に、針山からホメレラ花が溢れ出てくる。まるで花咲じいさんの粉を駆けられたがごとく、ホメレラ花が百本近く突き刺さっている矢を覆い尽くす程に、生命を滾らせたのだ。

そのホメレラ花は、まるでタンポポの綿毛であるがごとく、ある程度の大きさにまでなると、宙に飛んだ。根っこや葉や茎を付けたまま、ホメレラ花は群青へと飛び立つのである。フワフワと、住み所を探すかのように、ホメレラ花は針山を巣立っていく。

巣立っていく青い花を、村人たち全員は笑顔で見送りながら、歌を唄ってあげた。

群青の空の中を、数々のホメレラ花と、男女入り混じった歌声が、

どこまでもどこまでも轟いていく。花が旅立っていく。歌も旅立っていく。

「みんなで生命を崇めましょう」

白々しさが含まれたレシ王女の希望の一声も旅立って、聞こえなくなつて、やがて消えた。

了

## 空に花を捧げる（後書き）

我ながら、無駄に長い作品を書いてしまったと反省しています。何も伝わらなかつたならば、ごめんなさい。精進します。

読み終わったら感想下されば嬉しいです。何でもいいんですけどね、感想をもらえるだけでもありがたいんです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8716/>

---

ラピスラズリの天蓋

2010年10月8日14時35分発行